

---

# 遊戯王GX～十代に転生！？～

ヒートソウル

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

遊戯王GX〜十代に転生！？〜

### 【Nコード】

N0127T

### 【作者名】

ヒートソウル

### 【あらすじ】

ある日、一人の少年が神の手違いで死んでしまい、別の世界に転生する事になった。転生した世界は遊戯王GX。だが転生したら遊城 十代になっていた。これは幸か不幸か転生した少年の物語。  
(話を修正しました。)

## プロローグ（修正）（前書き）

ヒートソウルです。プロローグ修正しました。

## プロローグ（修正）

?????side

ふと気がつく。俺は真つ白な空間にいた。上下左右どこを見ても白一色だった。

「どこだ、ここは？」

そのセリフが不意に出てしまった。仕方がないことだった。自分が読んでいた二次小説の転生パターンでよくあることだったからだ。

「あの〜、すみませ〜ん。」

そんな声が聞こえたので後ろを振り向くと、背の高い女性がいた。

「私は神です。」

やっぱり、と思った。この場合は転生か、というより何故俺はこんなところにいるんだ？

「本当にすみませんでした。あなたはこちらの手違いで死んでしまいました。なのであなたには別の世界に転生してもらいます。」  
よくあるパターンだな。ていうか、心を読んでいるのか？

「はい、そうです。神様なのでそれくらい簡単なことです。」

「なるほど。で、俺はどの世界にいくんだ？」

「遊戯王GXの世界です。」

「そうか、分かった。」

遊戯王GXの世界か、どんなデッキを使おうかとか考えていたら

「あなたは遊城 十代として転生してもらいます。」

「待て！それはどうゆう意味だ！」

「そのままの意味です。では逝って下さい。ちなみにあなたに拒否権はありません。」

「字が違う！ってうわああー！ー！ー？！」

突然足元にできた穴に吸い込まれ俺は意識を失った。

??? side out

## プロローグ（修正）（後書き）

第四話の投稿が遅くなるも知れませんがよろしくお願ひします。

**第一話 実技試験VSクロノス(前書き)**

ヒートソウルです。第一話修正完了しました。

## 第一話 実技試験VSクロノス

十代 side

神に遊城十代として転生させられて早十五年。振り返るといろいろなことがあった。

まあ、今話している時間はない。何故なら、

「なんでこんな大事な時に限って電車が遅れるんだよ!!」

そう、遊戯王GXの第一話の時にあった電車の遅延に巻き込まれた。俺は今デュエルアカデミアの実技試験の会場に向かって走っている。

【まあ、十代。良かったじゃないか。カードもらえたんだし、あの人も会えたんだしさ。】

「それとこれとは事情が違うだろ、ユベル。」

俺が走っているとユベルが話し掛けてきた。何故ユベルがいるのかというところ子供の頃、精霊達が見えてその中にユベルがいた。宇宙には送っていないから、ユベルのカードは持っているし、ユベルの性格はヤンデレではない。

【誰に向かって話しているんだい?】

「気にするな。」

ユベルが軽くメタ発言しているが気にしない。俺はそう言って走る



スピードを上げた。

やっとの思いで試験会場に着いた。ちなみに俺の受験番号は一番、ていうかなんだよあの筆記の試験問題。『青眼の白龍』に関連したものばっかだし、海馬、どんだけ嫁のこと好きなんだよ。簡単だったから良かったけど。

【僕は十代のが好きさ。】

聞いてない。まあ別にいいけど。

【早く行ったほうがいいんじゃないかな。】

「そうだな。よし、行くか。」

俺はステージに向かった。さくて、俺の相手は一体誰だ？

「ドロップアウトボーイ、遅刻はいけません〜ガ、特別にワタクシとデュエルしてあげるノ〜ネ。」

「受験番号一番、遊城十代です。よろしくお願いします。」

相手はやっぱりクロノスだった。受験番号一番がドロップアウトつて。まあ、いい。さてと

「デュエル!!!」

クロノスLP4000

十代LP4000

「ワタクシのターン、ドロ！」

クロノスがドロしたカードを手札に加えるとニヤけた。《古代の機械巨人》でも出す気か？

「ワタクシは、《トロイホース》を召カ〜ン。」トロイホース ATK1600

「そして手札より魔法カード《二重召喚》を発動。これによりワタクシはこのターン二回まで通常召喚できます〜ノ。さらに《トロイホース》は地属性モンスターを生け贄召喚するとき1体で2体分の生け贄にすることができま〜ノ。」

この流れは、やっぱり。

「《トロイホース》を生け贄に《古代の機械巨人》を召喚する〜ネ。」

古代の機械巨人 ATK3000

「ワタクシは、カードを一枚伏せて、ターンエンドな〜ネ。」

クロノスLP4000

モンスター 古代の機械巨人

魔法・罫 伏せ1枚

観客からは「あいつ、終わったな。」とか「可哀想に。」とか聞こえてくる。

【十代、外野がうるさいね。攻撃力が高いくらいで、しかも3000でね。】

（仕方ないだろ、ユベル。こっちでは攻撃力が高ければ勝ちは決まりという概念が強いからな。元の世界では攻撃力1万超えることもできるし、攻撃力が高くてそれが最強とはいわないからな。）

【そうだね、攻撃力が3000でもモンスターはモンスター、必ず倒すことはできる。】

確かこの世界ではビートが多くロックやバーンとかは少ないかもな。ちなみにユベルには俺が転生者だって事は話してある。

「サレンダーするなら今の内なノ〜ネ。」

「悪いけどサレンダーはしない。俺のターン、ドロ〜。」

俺はカードをドロ〜した。そして今ドロ〜したカードと手札を見て、頭の中にカードが現れて光の線でカードとカードがつながり、そして

「俺は《E・HEROエアーマン》を召喚！」

俺の場に《エアーマン》が召喚された。改めて見てソリットビジョンはすごいなあと思った。

エアーマン ATK1800

「そして《エアーマン》の効果発動！このカードが召喚・反転召喚・特殊召喚に成功したとき、2つの効果を選択して発動することができる。俺は《デッキからHEROと名のつくモンスターを手札に加える。》の効果が発動。効果により《E・HEROフェザーマン》を手札に加える。そして手札の《沼地の魔神王》の効果が発動！このカードを手札から墓地に送り、デッキから《融合》を手札に加え、そして発動！」

さて、これがこのデッキの真骨頂だ！！

「俺は手札の《E・HEROフェザーマン》と《バーストレディ》を融合。来い！《E・HEROフレイム・ウィングマン》！」

俺の場に右腕が赤い竜の頭になっているフレイム・ウィングマンが現れた。

フレイム・ウィングマン ATK2100

「いくらモンスターを並べたところで攻撃力3000の《古代の機械巨人》には勝てないノ〜ネ。（それに伏せカードは《聖なるバリアーミラーフォース》、攻撃力を上げて攻撃してきても返り討ちなノ〜ネ。）」

「それはどうかな。手札より速効魔法サイクロンを発動！伏せカードを破壊する。」

俺が発動した《サイクロン》のカードから風が起こりクロノスの伏せカードを破壊した。《ミラーフォース》だったか。

「マンマミーア！」

「そして手札からフィールド魔法《摩天楼―スカイスクレイパー》を発動！」

デュエルフィールドが高層ビル群に変わり―一番高いビルの屋上に《フレイム・ウイングマン》が腕を組んで立ち、その近くに《エアーマン》が滞空した。

「な、なんなの？！」

「ここがHERO達の戦いの舞台だ！そして《摩天楼―スカイスクレイパー》はE・HEROと名のつくモンスターが相手モンスターを攻撃する時、相手モンスターより攻撃力が低い場合、攻撃力が1000ポイントアップする。」

「なっ!?!」

「《フレイム・ウイングマン》で《古代の機械巨人》に攻撃！スカイスクレイパーシュート！」

フレイム・ウイングマン ATK 2100     3100

《フレイム・ウイングマン》が右腕の竜の頭から、炎を出し《古代の機械巨人》を焼いた。

「くっ?!」

クロノス LP 4000     3900

「そして、《フレイム・ウィングマン》の効果発動！相手モンスターを戦闘によって破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。」

「パルメザンチークズ！？」

《古代の機械巨人》が崩れ、クロノスを下敷きにした。

クロノスLP3900 900

「《エアーマン》で直接攻撃！」

《エアーマン》が起こした風がクロノスに直撃した。

「ペペロンチークノ！？」

クロノスLP900 0

「スゲー！あいつ、やりやがった！」

「あのクロノス先生が負けるなんて……しかも1ターンキル。」

「フン、あんなのマグレだ。」

外野がなんか言ってるな、ていうか最後のやつ絶対万丈目かその取り巻きだな。

「ワタクシ〜が負けるなんて、ガックリンチヨ。」

クロノスが落ち込んでいるが気にしない。

【さすがだね、十代】

「まあな、これくらいどっつてことない。さて、帰るとしますか。」  
俺はそのまま会場を後にした。

十代 side out

??? side

なんだ、あいつ。本当に十代か。原作では受験番号110番だろ。なんで1番なんだ？それに《エアーマン》なんてカードも入っているしどうなっているんだ？おかしい。

まあ、いい。デュエルアカデミアで叩き潰してやるよ。

この俺、ジャック・アトラスがな！

ジャック side out

**第一話 実技試験VSクロノス（後書き）**

感想やアドバイスなどよろしく願いします。



## 設定（前書き）

設定です。修正しました。後々追加していく予定です。

6月10日追加しました。

## 設定

遊城 十代

年齢：15（第1話時）

性格：遊戯王GX初期の方の十代が2、遊戯王GX最後の方の十代が8の割合

好きな事、物、人：デュエル、デッキ構築、勉強、食事、話があう人、楽しくデュエルする人、仲間

嫌いな事、物、人：熱い食べ物、飲み物、イカサマ、カードを大事にしない人、人を見下す人

精霊：ユベル、ハネクリボー、エフェクトヴェーラー、ターボシンクロン

使用デッキ：E・HEROデッキ、天使族+時械神デッキ、機皇帝デッキ（ワイゼル、スキエル、グランエルの三種類）

備考：この作品の主人公であり転生者。神の手違いによって遊戯王GXの世界に遊城十代として転生した。前世ではデュエルは強い方だった。幼少期にユベルが精霊であることに気づき、和解してユベルのカードは持っている。デュエルは強く、よほどのことがない限り負けることはない。基本はクールかつ優しいのだが、怒ると怖い。（ユベル曰く、霸王モードになる。）得意なことは沢山あるが猫舌である。

ユベル

年齢：不明

性格：原作のユベル（ヤンデレではない）

好きな事、物、人：十代、ハネクリボー、エフェクトヴェーラー、  
ターボシンクロン、十代とデュエルする事、十代の寝顔

嫌いな事、物、人：十代をバカにする人、十代を傷付ける人

使用デッキ：E HEROデッキ

備考：十代の精霊。原作とは違い宇宙には行っていない。カードの  
モンスターを実体化する事が出来る。自分も実体化できるのでたま  
に十代とデュエルしている。十代が好きなので基本的には十代の言  
うことは聞く。十代の仲間には優しいが、敵と認めた者には文句や  
愚痴を言ったり、名前で呼ばない。

ジャック・アトラス

年齢：15（第1話時）

性格：5D'sのジャックからかっこいい所を抜いて、野心や下心  
などを入れた性格

好きな事、物、人：自分に好意的な女子、勝つこと、自分自身、キングの座

嫌いな事、物、人：負けること、キングの座から落ちること

精霊：ダークリゾネーター

使用デッキ：ジャックのデッキ

備考：ジャック・アトラスと名乗っているが、実は転生者である。転生する時に神にジャックにしてもらった。見た目はジャックそのものだがハーレム等の野心がある。シンクロがないGXの世界で最強になってやるといふ野望もある。ジャック本人が上の上ならば、こいつは下の下の下である。精霊はいるが見えていない。デュエルはシンクロを使うがかっこつけようとするので、よく失敗したり、カッコ悪くなる。ニートではない。

**第二話 船の中の出来事（前書き）**

第二話修正完了しました。

## 第二話 船の中の出来事

十代 side

俺は今、デュエルアカデミアに向かう船の中の部屋の中にいる。

「このカードは入れて、これは抜いて、これは、うーんどうするか  
な？」

俺は今、デッキの調整をしている。俺のデッキは融合を多く使うE・HEROデッキなので色々なカードにも対応出来るようにしている。

【十代、熱心にやっているね。】

「まあな、デッキの内容が全く同じじゃ、対策されたデッキに当たった時に勝てないからな。それにカードが多いから戦略の幅が広がる。」

【そうだね。しかし、不思議だねこのアタッシュケース。カードがどのくらい入っているか分からないよ。】

俺の目の前にあるアタッシュケースは転生させられた神から送られてきたものだ。この中には大量のカードがあり、種類もGXだけでなく、5D・s、さらにはゼアルのカードまでも入っていた。だが、さすがに『青眼の白龍』や『三幻神』、『三幻魔』、『宝玉獣』などのカードはなかった。まあ、使う人がいるから俺が使っていたらどうなるかわからないからな。チューナーやシンクロモンスター、エクシーズモンスターはあったけど俺は使おうかどうか迷っているのでアタッシュケースから出していない。あとオリジナルカードも

作ることができるので後でE・HEROのチューナーやシンクロモンスター、エクシーズモンスター、それにHERO専用の魔法や罠カードでも作るか。

「そういえば、ユベル。なんでお前はE HEROを使っているんだ？」

【ああ、それね。三幻魔って扱いが難しいし、これに入ってなかったからね。まあ、E HEROは僕のお気に入りだからさ。】

「なるほどな。よし、これくらいでいいだろう。」

俺は調整し終わったデッキを腰のデッキケースに入れ、残りのカードはアタッシュケースに入れて閉めた。そしてアタッシュケースにある千年アイテムの眼みたいなマークの上に手を置いた。するとアタッシュケースが光り、光がなくなると俺の左手にブレスレットとなって現れた。

【本当に不思議だし、便利だね、それ。】

「まあ、場所に困らないし軽くなるからな。」

本当に便利だなと俺は思った。ちなみにブレスレットには小さい十字架がありその十字架の交差している所に千年アイテムの眼がある。

「さて、船の中でも探検するか。」

【そうだね。】

【クリクリ〜。】

「あ、ハネクリボー。いたのか。」

【ク、クリ〜！】

「冗談だよ。ごめん。」

俺はユベルとハネクリボーと共に部屋を出た。

「あつ、いたツス。」

「見つけたよ、一番君。」

「ん？」

船の中の広間みたいな場所にある椅子に座っていると、声を掛けられたので振り返ると、レッドの制服を着た丸藤翔とイエローの制服を着た三沢大地がいた。

「何か用か？」

「クロノス先生をノーダメージでワンターンキルした君に興味があ



ってね。俺の名前は三沢大地だ。三沢か大地でかまわない。」

「僕は丸藤翔って言うんだ。翔でかまわないツス。」

「俺は遊城十代だ。よろしくな。翔、三沢。」

「ところで、なんで君はオシリスレッドの制服を着ているんだ？受験番号が一番で実技試験もクロノス先生を倒したのに。」

「あつ、僕も気になったツス。」

「あゝ、それはな。」

そう、俺の着ている制服はオシリスレッドの制服。試験の結果は合格だったけど配属はレッドだった。何故かというところクロノスをはじめエリート主義の教師達が色々としたみたいだ。遅刻を理由に不合格にしようとしたが、遅刻の理由は公共交通機関の遅延であり、筆記は一位、実技はノーダメージでワンターンキルであることが委員会を取り上げられて、ひと悶着あった。妥協案としてオシリスレッドに配属することでクロノス達も渋々了承した。という校長の直々の電話があった。

「なるほど、大変だったな。」

「別にどうってことない。」

「僕と一緒にツスね。これからよろしくツス。」

「ああ。」

翔や三沢達と一緒にの学園生活か、楽しみだな。

「あー、そうそう。君の他に興味深い人がいてね。」

「興味深い人？」

気になるな、誰だ？

「ああ、とても興味深かったよ。何せシンクロ召喚という未知の召喚方法を使って試験官を圧倒していたからね。」

「シ、シンクロ召喚!？」

い、一体どういうことだ？三沢の発言からしてこの世界ではシンクロ召喚はないはずだ。

「名前は分かるか？」

「確かジャック・アトラスだったっけな。」

ジャック・アトラスだと!？何故だ!何故この世界にいるんだ？

「どんなデュエルだったか分かる範囲だけでいいから教えてくれ。」

「ああ、分かった。」

その後三沢がデュエルについて話し始めた。

十代 side out

三沢（空気男） side

空気男じゃない！誰だそれは、俺は三沢大地だ！おっと、いけない。危うく変な人に思われる所だった。今俺はデュエルアカデミアの試験会場にいる。俺の受験番号は二番だった。一番は一体どんな人なんだろうか？

今俺は、他の人たちのデュエルを見ている。色々な人たちがいるな。学ぶべきことが沢山あるな。

『受験番号十番の人、ステージに来てください。』

受験番号十番か、この人も気になるな。

「君が受験番号十番のジャック・アトラス君か。緊張しないでね。」

「ふん、貴様に見せてやる。この俺キングのデュエルをな！」

「いい心構えだが、この世界はそんなに甘くないぞ。」

「デュエル！」試験官LP4000  
ジャックLP4000

「私のターン、ドロー。」

おっ、デュエルが始まった。

「私は《ゴブリン突撃部隊》を召喚。」ゴブリン突撃部隊 ATK 2  
300

「私は装備魔法、《デーモンの斧》を発動。《ゴブリン突撃部隊》  
に装備する。」

ゴブリン突撃部隊 ATK 2300 3300

「私はターンエンドだ。」

試験官

モンスター ゴブリン突撃部隊

魔法、罫 デーモンの斧（ゴブリン突撃部隊に装備）

《ゴブリン突撃部隊》の攻撃力は3300、高いな。

「俺のターン。ドロー！」

さて、このデュエルはどうなる？

「俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！」  
ジャックの場に見たことがないドラゴンが現れたがすぐに半分の大  
きさに縮んだ。

「《バイス・ドラゴン》は、相手フィールドにのみモンスターが存在  
するときに、手札から特殊召喚できる。この方法で特殊召喚した場  
合、このモンスターの元々の攻撃力と守備力は半分になるがな。」

バイス・ドラゴン ATK 2000 DEF 2400  
200 1

特殊召喚ということは、このターンで上級モンスターを召喚するの  
か。

「そして、俺は魔法カード《二重召喚》を発動！一回目は《ツイン  
ブレイカー》を召喚！」

ツインブレイカー ATK 1600

「そして二回目はチューナーモンスター、《ダークリゾネーター》  
を召喚！」

ダークリゾネーター ATK 1300

「……チューナーモンスター??」「……」

ジャックの場にまた見たことがないモンスターが二体召喚された。  
チューナーモンスター？聞いたことも見たこともないモンスターだ。  
会場も知らないモンスターが現れてざわめいている。

「チューナーモンスター？なんだい、そのモンスターは。」

「知らないのか。まあいい、見せてやる。キングの力を！俺はレベ  
ル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《ダークリゾネーター》  
をチューニング！」

《ダークリゾネーター》が3つの星になると、その星が輪になり、  
その輪の中を《バイス・ドラゴン》が通過した。なんだ？何がおこ

っているんだ？

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

5 + 3 = 8

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

ジャックの場に禍々しいドラゴンが現れた。

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK 3000

「なんだそのモンスターは？それにシンクロ召喚とは一体？」

「シンクロ召喚とは、チューナーモンスター一体とチューナー以外のモンスターを一体以上墓地に送り、そのレベルの合計と同じのシンクロモンスターをエクストラデッキより召喚することだ。《バイス・ドラゴン》のレベルは5、《ダークリゾネーター》のレベルは3、よって合計は8になりレベル8の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が召喚できるのだ！」

「な、成る程。だが私の《ゴブリン突撃部隊》の攻撃力は3300。そのモンスターでは勝てないぞ。」

「そんなことは分かっている。俺は魔法カード《攻撃封じ》を発動！《ゴブリン突撃部隊》を守備表示にする。」

ゴブリン突撃部隊 ATK 3300 DEF 0

「何ー！」

「《ツインブレイカー》で《ゴブリン突撃部隊》に攻撃！ダブルアサルト！《ツインブレイカー》は守備表示モンスターを攻撃したとき、攻撃力が守備力をこえているとき貫通ダメージを与える！」

「くっ！」

試験官LP4000 2400

「《レッド・デモンス・ドラゴン》で直接攻撃！アブソリュート・パワーフォース！」

「うわあああー！！！」

試験官LP2400 0

ジャックはワンターンキルか、すごい。それにシンクロ召喚か、興味深い。

「君はすごいな。本当にキングになれるかもな。」

「キングになれるのではない、俺はキングだ！」

と言ってジャックはステージから去っていった。観客からは「スゲーー！」や「かっこいいー！」とか聞こえてくる。確かにかっこいいかもな。

「うわ、ぐふ！」

……前言撤回、段差で派手にこけてカッコ悪い。

『受験番号二番の人、ステージに来てください。』

あ、呼ばれた。よし、行こう。

三沢（空気男） side out

十代 side

「だから、空気男じゃない！」

「い、いきなりどうしたんすか、三沢君。」

「いや、何でもない。」

「そっすか。」

確かに三沢は空気男だからな。

「十代、いま失礼なことを考えなかったか？」

「いや、別に。」

「そうか。まあ、だいたいのことは話したよ。」

「ありがとう。助かった。じゃあ、俺は部屋に戻るから。」



「ああ、わかった。」

「僕も部屋に戻るッス。またね。」

俺はそう言っつて翔と三沢と別れた。

俺は部屋に戻りながら考えた。

（一体何がどうなっているんだ。なんでシンクロがあるんだ？なんでジャックがこの世界に？ジャックは未来から来たのか？全然分からない。）

俺はいろいろと考えてみたが考えれば考えるほど分からなくなつた。

「……、き……。」

（ジャックがいるのなら遊星やクロウ達もいるかもしれないな。）

「……い、きた……。」

（仕方ない、後でユベルとハネクリボーにでも相談するか。）

「おい、貴様！聞いているのか！」

「ん？」

考え事をしていたので話し掛けられたのに気づけなかった。振り向くとそこには、ライイエローの制服を着たジャックがいた。

「貴様が遊城十代か。」

「ああ、そうだけど、何か用か？」

「この俺とデュエ」新生の皆さん。間もなくデュエルアカデミアに到着いたします。繰り返します。間もなくデュエルアカデミアに到着いたします。』……………」

「…………と、いうわけでデュエルはまた今度な。」

「くそ、覚えている。遊城十代！」

おい、それは悪役の言うセリフだろ。何かかっこつけているがカッコ悪い。ジャックはそのまま走り去っていった。

【クリ〜。】

【十代、アイツは気をつけたほうがいいよ。アイツには僕達は見えていないけど視線が気持ち悪かったよ。】

「そうか、分かった。」

ユベル達にそう言って部屋に戻った。

十代 side out

## 第二話 船の中の出来事（後書き）

引き続き感想やアドバイスなどよろしくお願いします。

**第三話 真夜中のアンティデュエルVS万丈目(前書き)**

第三話修正完了しました。

### 第三話 真夜中のアンティデュエルVS万丈目

十代side

「〜で、あるからして、」

俺含め新入生達は今校長からのありがたいお言葉を聞いている。はつきり言っつて長い、現に何人かは寝ている。早く終わらないかな。

「皆さん、学園生活を楽しんで下さい。」

あ、やっと終わった。全く、どの世界でも校長の話が長いのは決定事項か？

校長の話が終わると新入生達はそれぞれの配属の寮に向かっていった。俺は翔と一緒にオシリスレッドの寮に向かっている。

「はあ〜。」

「どうした翔。ため息何か出して。」

「アニキは何でそんなに落ち着いてられるんすか？僕達オシリスレッドなんすよ。」

「別に構わない。第一俺はデュエルアカデミアに入ればレッドでもいい。」

「そっすか。」

と言って翔は納得したみたいだ。まあ、何故俺をアニキと呼んでいるのかは「アニキと呼ばせて欲しいツス。」と言ってきたので構わないと返したからだ。

「ボロいツスね。」

「ああ。」

改めてレッド寮を見てみると本当にボロい。確か、ブルーは豪邸、イエローはペントハウスだったっけな。そう考えて俺達は自分達の部屋に入った。入ったらコアラがいた。

「コアラじゃないんだな。俺は前田隼人っていうんだな。隼人でいいんだな。」

「誰もそんなことは言ってない。俺は遊城十代だ。十代でいい。」

「僕は丸藤翔。翔でいいよ。よろしくね隼人君。」

「さて翔、学園でも探検するか？」

「いいツスよ。」

「歓迎会までには戻ってきて欲しいんだな。」

「ああ、わかった。」

隼人にそう言って俺と翔は寮を出た。

「ここはブルー専用のデュエルリングだ。オシリスレッドのドロップアウトが使っていい訳ないだろ！」

「そつだ！ここは俺達ブルーのデュエリストだけが使える場所だからな。」

「いいじゃん、ケチ。」

俺と翔は今ブルーのデュエルリングにいる。気になって近づいてみたらブルー生徒の何人が出てきてこうなっている。

「くだらないな。」

「なんだと！」

「くだらないからくだらないと言っただ。だいたい、デュエリストにブルーもレッドも関係ないだろ。」

「ドロップアウトが、いい気になるな！あ、お前遊城十代だな。」

「そつだが。」

「諸君達、何を騒いでいる。」

「ま、万丈目さん。だってこいつが。」

出て来たよ、万丈目。どうやったらあんな髪形にできるのか不思議だ。

「あのクロノス先生にまぐれとはいえ勝ったやつだ。」

「こ、こいつがですか。」

「あれくらいどうってことない。攻撃力が3000で勝った気になつて油断したから負けたんだよ。」

「ほう、あれは実力だと言いたいのか？」

「まあな。」

「その実力、ここで見せてもらいたいものだな。」

万丈目がデュエルディスクを構えようとしたら

「あなた達、何をしているの。」

「て、天上院君。」

声が出た方向を向くとそこには明日香がいた。

「そろそろ歓迎会が始まる時間よ。」

「ちっ、行くぞ！お前達。」

「」「はい！」「」

そう言つて万丈目と取り巻き達は去つていった。

「あなた達、万丈目君の挑発に乗っちゃダメよ。」



「分かっている。」

「あなたが遊城十代ね、私は天上院明日香よ。明日香でいいわ。」

「ああ、よろしく。十代で構わない。」

「僕は丸藤翔ツス。」

「あなた達の寮でも歓迎会が始まるんじゃないかしら。」

「あ、そうだったツスね。アニキ、早く帰るツス。」

「そうだな、早く帰らないと始まっちゃうからな。じゃ、またな。」

「ええ。」

俺達はレッド寮に帰った。

十代 side out

翔 side

レッド寮の歓迎会が始まって僕達はご飯を食べている。でも、ひもじい。だつてご飯と味噌汁とメザシだけだもん！隼人君曰くこれでも豪華な方だつて言っていたけど、じゃあ、いつもは何を食べているんすか！

「翔。何を言っているんだ？」

「あ、アニキはひもじいって感じないんスカ！」

「別に構わない。食べればそれでいい。」

「そつつスカ。」

「そう、気にしない。熱っ！！」アニキが味噌汁を飲んだら熱が  
た。

「大丈夫か、十代。」

「大丈夫だ隼人。しかし熱いな。」

「えっ、そんなに熱くないツスよ。もしかして猫舌なんスカ？」

「そつだよ。悪いか？」

アニキにも苦手なものがあるんスね。何故味噌汁には手をつけてい  
なかつた理由が分かつたツス。

「なあ、翔。猫舌つてどうやったら直るか分かるか？」

「分からないツス。」

アニキの猫舌はこのままでいいかなと僕はこの時思った。

翔 side out

十代 side

寮の歓迎会が終わり俺と翔と隼人は同じ部屋にいる。原作ではこの後万丈目とのアンティデュエルがあるんだよな。それより今は別のことが気になって仕方ない。

(ユベル、ちよっといいか。)

【十代、アイツのことかい？】

(ああ、そうだ。何でジャックがいるかが分からない。)

【ああ、そう聞いてくると思ってちよっと調べてきたよ。】

(本当か、教えてくれ。)

【分かった。あのジャック・アトラスっていう男は君の知っているジャックではない。】

(あー、やっぱりか。道理で雰囲気が違うと思った。)

原作のジャックと違い王者の風格が感じられなかった。

【あと、ハーレム作ってやるとかこの世界では最強だとか一人でつぶやいていたよ。気持ち悪いし気味悪いよ。】

(成る程、じゃあ、あいつも俺と同じ転生者か。)

【あんなやつ、十代と同じじゃないでしょ。で、どうするんだい。】

(放って置く。そうすれば大丈夫だと思う。ところでユベル、ジャックに気づかれたりしなかったか?)

【大丈夫だよ。アイツには僕は見えていない。そういえばそろそろ時間じゃないのかな?】

(ああ、分かった。)

俺はユベルとの会話をやめた。そのタイミングを狙っていたかのように俺のPDAが鳴った。

「アニキ、鳴っているツスよ。」

「分かってる。」

俺は自分のPDAを開くと万丈目からのメールがきていた。

『やあ、ドロップアウトボーイ。今からあのデュエルリングに会い互いのベストカードを賭けたアンティールだ。勇気があるならくるんだな。』

これは、「ご丁寧な場所まで指定されているな。さてと、行くか。」ちよつとデュエルの誘いがあるから行ってくる。」

「アニキ、僕も行っっていいかな?」

「構わない。」

ガードマンに見つからないように俺達は指定されたデュエルリングに向かった。

「よく来たな！逃げなかったことは褒めてやる。」

俺達は万丈目に指定されたデュエルリングに着いた。着いたら万丈目と取り巻き達がいて、万丈目は準備万端だった。

「別に褒められても嬉しくない。それに売られたデュエルは買うのがデュエリストだ。」

「このデュエルはアンティールだ。お前のベストカードを賭けてもらうぞ。」

「分かっている。さっさとやろうぜ、万丈目。」

「万丈目さんだ！！まあいい、このデュエルで身のわきまえ方を教えてやる。」

「デュエル！！」

万丈目LP4000

十代LP4000

「俺のターン、ドロー。」

俺の先行か、今回は手札がいい。

「俺は《E・HEROバブルマン》を召喚！」

バブルマン ATK800

「《バブルマン》の効果発動！このカードが召喚に成功したとき、自分フィールドに他のカードがない場合、デッキから二枚ドロースる。」

この効果はアニメ効果なんだよな。OCGだと手札もゼロじゃないとドロウ出来ないからこの効果は便利だ。

「そして俺は装備魔法バブルショットを発動！《バブルマン》に装備する。《バブルショット》は《バブルマン》にのみ装備可能のカード。攻撃力を800ポイントアップする。」

バブルマン ATK800 1600

「さらにカードを二枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター バブルマン

魔法・罫 バブルショット（バブルマンに装備）伏せ二枚

「俺のターン、ドロウ。さてと、あなた達、何をしているの！今の時間はここは利用禁止なのよ。」て、天上院君。」

万丈目がドロウしたら明日香がやって来た。明日香の後ろからあのジャックが来た。

「来たな、ジャック・アトラス。遊城十代が終わったらお前の相手をしてやる。」

「いいだろう、貴様にキングのデュエルを見せてやるから早くしろ！」

いや、お前はキングじゃないだろ。ジャック本人に謝れよ。それに明日香もお前のことを見てイラついているし。

「俺に指図するな！俺は《地獄戦士》を召喚！」

地獄戦士 ATK1200

「さらにカードを二枚伏せてターンエンドだ。」

万丈目

モンスター 地獄戦士

魔法・罫 伏せ二枚

「俺のターン、ドロー。」

伏せカードが気になるが対策は打ってある。よし、

「俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROスパークマン》と《オーシャン》を融合。来い！《E・HEROアブソリュートZero》！」

俺の場に絶対零度の力を持ったHEROが現れた。ジャックが驚い

ていたが気にしない。

アブソルートZero ATK2500

「やはり融合を使ってきたか。この時を待っていた！畏カード発動！《ヘルポリマー》相手フィールドに融合モンスターが召喚された時、自分のモンスターを生け贄に捧げ、その融合モンスターのコントロールを得る！《地獄戦士》を生け贄に《アブソルートZero》のコントロールを得る。」

やっぱり融合対策のカードを使ってきたか、だが甘い！

「カウンター畏発動！《盗賊の七つ道具》。ライフを1000ポイント支払い、畏カードの発動を無効にし破壊する！」

十代LP4000 3000

「なっ、何だと！」

万丈目の《地獄戦士》が黒いオーラに変わり《アブソルートZero》に向かうが途中で消えてなくなった。

「くそっ！」

「さらに俺は畏カード発動！《砂塵の大竜巻》。万丈目の伏せカードを破壊する！」

「万丈目さんだ！」

《砂塵の大竜巻》が万丈目の伏せカードを破壊した。《アヌビスの



裁き』だったか。《サイクロン》や《リーライトジャスティス》を使っていたらまずかったな。

「これでフィールドはがら空きだ！《バブルマン》で直接攻撃！」

《バブルマン》がバブルショットで万丈目を攻撃した。

「くっ！」

万丈目LP4000 2400

「これで終わりだ！《アブソルートZero》で直接攻撃！瞬間氷結！」

「う、うわああー！！！」

万丈目LP2400 0

「アニキが勝ったッス！」

「す、すごいわね！」

翔が喜んで、明日香が驚いている。

「アンティはジャックのデュエルが終わってからでいいからな。」

「くっ、いい気になるな。まあいいだろう。ジャック・アトラス！俺とデュエルしろ！」

「いいだろう、この俺、キングのデュエルを見せろ！ガードマンが

くるわ！アンティールは校則で禁止されているし今は利用禁止の時間を使っているのがバレたら退学もあるわよ！」「何！！」

あゝ、もうそんな時間か。そしてジャック、またか。御愁傷様。

「遊城十代！この借りは必ず返してやる。覚えている！」

「あつ、万丈目さん！待って下さいよ〜！」

「俺を無視するな！！くそっ！」

「早く僕達も逃げるッスよ！」

「皆、こっちよ！」

「ああ！」

俺達は明日香の案内でデュエルリングを後にした。

「どうだった、ブルーの洗礼を受けてみて。」

「どっつてことなかった。」

「そ、そう。」

「さて翔、戻るぞ。」

「はいッス。」

俺達は寮に戻った。ジャックが落ち込んでいた。カッコ悪いな。

【万丈目ってやつ、弱かったね。確かこの学園のトップだったっけ？】

（違う、この学園のトップはカイザーだ。）

【カイザーね、十代なら勝てるでしょ。】

（それは分からない。俺でも負けるかもしれない。この世に完璧な人間はいないからな。）

【確かに、十代は猫舌だからね。】

（そ、それは言うなよ。）

何故かユベルには勝てない気がした俺だった。

十代 side out

ジャック side

違う、何でだ。あそこは《アブソルートZero》ではなく《フレ  
イムウイングマン》だろ。やはり何かがおかしい。それより、

「何で俺だけこんな扱いなんだよ。くそっ！」

十代や万丈目に勝って女子にかっこいい所を見せようと思ったのに、  
どうしてタイミングだけがこんなに悪いんだ。

「くそっ！絶対たおしてやる。遊城十代！」

俺はそう決めたのだった。

ジャックside out

第三話 真夜中のアンティデュエルVS万丈目（後書き）

第四話はもう少し待ってください。

## 第四話 偽ラブレター事件VS明日香(前書き)

第四話です。今更ですがこの小説は主に十代sideで書いてます。

## 第四話 偽ラブレター事件VS明日香

十代 side

今は授業中。はつきり言っただけでも程がある。元の世界では小学生でも分かる内容をやっているからだ。

「セニョール十代。フィールド魔法について説明して欲しいノ〜ネ。

」

「フィールド魔法はフィールド上に一枚だけしか存在できず、新しいフィールド魔法が発動した場合、古いフィールド魔法は破壊されます。フィールド魔法は種族や属性などに関係しているものがあり、《草原》や《荒野》、《ガイアパワー》や《伝説の都ーアトランテイス》、《歯車街》や《天空の聖域》などがあります。フィールド魔法にはフィールド魔法のサポートカードもあり、デッキからフィールド魔法を手札に加える魔法カード《テラフォーミング》、フィールド魔法を破壊から守り新しいフィールド魔法を発動をさせない魔法カード《フィールドバリア》、相手がモンスターを特殊召喚した時にフィールド魔法を発動出来る速攻魔法《終焉の地》があります。また、手札から墓地に送ることでデッキからフィールド魔法を手札に加えることが出来るモンスターも存在します。《アトランテイスの戦士》は《伝説の都ーアトランテイス》を、《天空の使者ゼラディアス》は《天空の聖域》を手札に加えることが出来ます。他には「も、もういいノ〜ネ。」：「そうですね。」

一通り言ったらクロノスに止められた。まだまだ言いたいことがあるぞ。フィールド魔法が自分フィールド上に存在しなければ破壊されるモンスターがいる。《E・HEROキャプテンゴルド》は《摩天楼・スカイスクレイパー》、《天空の使者ゼラディアス》は《

天空の聖域』がないと破壊される。もういいや。簡単過ぎて授業がつまらない。

【クリ〜。クリクリ〜。】

【ハネクリボー、少し落ち着きなよ。しかし本当に簡単だね。僕これ全部分かるよ。】

俺はこのまま授業を聞き流した。早く終わってくれ。

午後は体育の授業があった。体動かすことはやっぱり楽しかった。あれ、でも何かあった気がする。何だったっけな？そういえば、翔がさっきから変だ。顔がニヤけているし、はつきり言って気持ち悪い。

「翔、大丈夫か？」

「あ、アニキ〜。どうしたんすか〜。僕は大丈夫ツスよ〜。」

「よし、翔。保健室いくぞ。」

「だから〜、アニキ〜、僕は大丈夫ツスよ〜。」

「な、ならいいが。」

そう言って翔と別れた。何もなければいいが。

翔と別れて、購買でドローパンを買って食べて、レッド寮に戻ってきた。ドローパン、結構旨かった。ちなみにひいたのは黄金の卵パンだった。



「そういえば十代、翔はどうしたんだな？」

「分からない。今日は何か変だった。」

「変？」

「顔がニヤけていたり、なにを聞いても上の空だった。」

「確かにそれは変なんだな。」

「だろ。」

何だろう、何かいやな予感がする。

【十代、考え過ぎだよ。】

【クリ〜。】

ユベルとハネクリボーにそう言われた。考え過ぎだよな。そう思った時に俺のPDAがなった。またか。

『丸藤翔は預かった。遊城十代。返して欲しければ女子寮に一人で来られたし。』

あ！今日は偽ラブレター事件の日だったか、忘れてた。

「隼人、翔が拐われたみたいだ。」

「な、何でなんだな？」

「分からない。一人で来いって書いているからちよつと行って来る。」

「分かったんだな。」

隼人にそう言つて俺は女子寮に向かった。

「翔、大丈夫か！」

「あ、アニキ〜！」

女子寮に着いた俺が見たのはジュンコとももえに捕まえられた翔だった。

「約束道理一人で来たぞ。ところで翔が一体何をしたんだ？」

「こいつは覗きをしたのよ！」

「そうですわ。」

「だから、誤解ツスよ。僕は手紙でここに呼ばれただけツスよ。」

「手紙？」

「そうなのよ。この手紙よ。だけど、字が汚いのよ。」

「確かに。」

明日香に手紙を見せられたが、明らかに女子が書いた字ではなかった。

「で、どうすれば翔を返してくれるんだ？」

「私とデュエルしてあなたが勝てば返してあげるしこのことは言わないわ。ただあなたが負ければこの事を先生に報告するわよ。」

「明日香とか？分かった。」

さっさと終わらせるか。

「デュエル!!」

十代LP4000

明日香LP4000

「私のターン、ドロー。」

さて、どう来る？

「私は《エトワールサイバー》を召喚！」

エトワールサイバー ATK1200

「さらに、カードを一枚ふせてターンエンドよ。」

明日香

モンスター エトワールサイバー

魔法、罨 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー。」

まずは様子見だな。

「俺は《E・HEROSパークマン》を召喚！」スパークマンAT  
K1600

「《スパークマン》で《エトワールサイバー》に攻撃！スパークフ  
ラッシュュ！」

「罨カード発動！《ドワーフルバッセ》。互いにモンスターとの戦闘  
を互いの直接攻撃に変える。さらに《エトワールサイバー》は直接  
攻撃する時、攻撃力を600ポイントアップするわ！くっ！」

エトワールサイバー ATK1200 1800

「くっ！」

明日香 LP4000 2400

十代 LP4000 2200

《スパークマン》のスパークフラッシュュが《エトワールサイバー》  
に当てようとしたがかわされ、《スパークマン》のスパークフラッ  
シュが明日香に、《エトワールサイバー》の攻撃が俺に当たった。  
「俺はカードを二枚伏せて、ターンエンドだ。」

十代

モンスター      スパークマン

魔法、罨      伏せ二枚

「私のターン、ドロ。私は魔法カード《融合》を発動！フィールドの《エトワールサイバー》と手札の《ブレードスケーター》を融合。《サイバーブリーダー》を召喚するわ。」

サイバーブリーダー ATK2100

「《サイバーブリーダー》は相手のモンスターの数によって効果が変わるモンスター。あなたの場にはモンスターは一体。よって《サイバーブリーダー》は戦闘によっては破壊されないわ。」

《サイバーブリーダー》か。一体や二体の時の効果は何か分かるが三体の時の効果は厄介なんだよな。

「罨カード発動！《威嚇する咆哮》。相手はこのターン攻撃出来ない。」

「成る程ね。私はカードを二枚伏せてターンエンドよ。」  
明日香

モンスター      サイバーブリーダー

魔法、罨      伏せ二枚

「俺のターン、ドロ！」

よし、これならいける！

「俺は魔法カード《融合》を発動！フィールドの《スパークマン》と手札の《オーシャン》を融合。来い！《E・HEROアブソルトZero》！」

アブソルトZero ATK2500

「さらに魔法カード《融合回収》を発動！墓地の《融合》と《オーシャン》を手札に加える。そして今加えた《融合》を発動！手札の《オーシャン》と《沼地の魔神王》を融合。来い！《E・HEROジ・アース》！」

ジ・アースATK2500

「一ターンで二回も融合モンスターを！あ、あり得ない。」

「す、すごいですわ。」

「な、なかなかやるわね。でもこの瞬間の効果がサイバーブレイダー変わるわ。相手モンスターが二体の時、攻撃力が二倍になるわよ。」

サイバーブレイダー ATK2100 4200

「関係無い。俺は《ジ・アース》の効果を発動！自分フィールド上の《E・HERO》と名のつくモンスターを生け贄に捧げることで《ジ・アース》の攻撃力はこのターンのエンドフェイズまで生け贄に捧げたモンスターの攻撃力分アップする。俺は《アブソルトZero》を生け贄に捧げ、《ジ・アース》の攻撃力を2500ポイントアップする！」

ジ・アース ATK2500 5000

「攻撃力5000!」

サイバーブレイダー ATK4200 2100

「さらに《アブソルトZero》の効果発動!このカードがフィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊する!」

「な、なんですって!」

《アブソルトZero》が《ジ・アース》に吸収され《ジ・アース》のオーラが強くなったと同時に《サイバーブレイダー》が凍りついて破壊された。

「《ジ・アース》で明日香に直接攻撃。アース・マグナ・スラッシュ  
ユ!」

「罨カード発動!《聖なるバリアーミラーフォース》。あなたの攻撃表示のモンスターを破壊s「罨カード発動!《トラップ・スタン》。このターンこのカード以外の罨カードの効果が無効にする!」  
えっ?!きゃー!」

《ジ・アース》が持っている剣で明日香を攻撃した。

明日香 LP2400 0

「やったー!アニキー!」

「そ、そんな!明日香さんが負けるなんて。」

「し、信じられせんわ！」

勝てたな。そういえばライフ削られたな。翔も隼人も明日香もカードを渡したり、アドバイスすれば確実に強くなれるな、うん。

「ま、まぐれで勝ったからっていい気にならない方がいいわよ！」

「ジュンコ、負けは負けよ。」

「というわけで約束通り翔は返してもらおうぞ。」

「ええ。」

「アニキー！助かったッス！」

「じゃあ、またな。」

俺は翔を連れて寮に戻った。

「翔。」

「アニキ、何スか？」

「もう覗きはするなよ。」



「だから！覗きはしてないッス！」

「冗談だよ、冗談。」

十代 side out

#### 第四話 偽ラブレター事件VS明日香（後書き）

《ジ・アース》の効果で《アブソルートZero》を生け贄 《アブソルートZero》の効果で相手モンスターを破壊 攻撃力5000の《ジ・アース》で攻撃、というコンボをやってみました。

## 第五話 月一試験VS万丈目+噛ませ(前書き)

第五話です。長くなりました。噛ませとのデュエルがあります。S  
pencerさんの意見を参考に夢の共演をさせてみました。

## 第五話 月一試験VS万丈目+噛ませ

十代 side

明日は月一試験がある。俺と翔と隼人は勉強やデッキの構築をしている所だ。

「翔にはこのカード、隼人のこのカードかな。」

「ありがとう。アニキ。」

「ありがとうなんだな。でも、いいのか十代。カードもらって？」

「カードはたくさん持っているからいい。でも、大事に使ってくれよ。」

「分かったツス。」

「分かったんだな。」

俺が翔に渡したカードは《強化支援ヘビーウェポン》や《マシンナーズギアフレイム》などの機械族のモンスターや機械族に関連する魔法や罫、隼人には《マスターオブOZ》や《レスキューキャット》などの獣族のモンスターや獣族に関連する魔法や罫を渡した。二人に共通して渡したのは《沼地の魔神王》と《融合回収》、それといくつかの魔法と罫カードも渡した。そういえば、《レスキューキャット》はこの世界では禁止カードではなかった。元の世界では効果からレベル3以下のモンスターを二体特殊召喚して《ゴヨウガーディアン》や《氷結界の龍ブリューナグ》などの恐ろしい効果を持

つシンクロモンスターを召喚しまくって禁止カード行きになったかな。

「アニキ、これはどうすればいいツスか？」

「これはどうすればいいんだな？」

「翔はこうで、隼人はこれだな。」

後、二人に勉強も教えている。二人とも頑張っているから、筆記でいい点はとれると思う。

【十代はデツキ構築しなくていいのかい？】

（そうだな。あ、ユベル、ちょっと頼みがあるんだけどいいか？）

【十代の頼みなら僕は何でもいいよ。で、頼みってなんだい？】

（それはだな、……………。）

俺はユベルにあることを頼んだ。

【成る程、それは面白そうだね。でも大丈夫なのかい？】

（油断しなければ多分大丈夫だろう。）

【分かったよ。明日が楽しみだね。】

（ああ。）

さてと、俺のデッキの内容の話はこれくらいにしよう。

「翔、隼人。これくらいやればだいたい大丈夫だと思うからそろそろ寝よう。」

「え？あつ、もうこんな時間なんだ。」

「時間が過ぎるのは早いんだな。」

俺達はきりのいい所で勉強とデッキ構築をやめて寝ることにした。

翌朝、俺達は遅刻せずに教室に着いた。

「ふわあゝ、眠い。」

「眠いんだな。」

「二人とも、分かる範囲の問題が終わるまで寝るなよ。」

「分かってるッス。」

「分かってるんだな。」

「それでは、はじめてくださいにやゝ。」

大徳寺先生の一言でテストが始まった。

（簡単だかケアレスミスはしないようにしないとな。）

二十分後

「よし、見直しも終わった。」

翔と隼人はまだテストをやっているが、二人なら半分から六割くらい出来るだろう。

（ユベル、ハネクリボー。時間になったら起こしてくれ。）

【分かったよ、十代。】

【クリ〜。】

ユベルとハネクリボーにそういつて俺は寝た。

十代 side out

ユベル side

僕はハネクリボーと一緒に十代の側にいる。いつ見ても十代の寝顔は飽きないし触りたくなる。でも、実体化したいけど今は周りに他の人達がいるから我慢するしかない。

【クリ〜？】

翔と隼人はまだテストをやっている。でも、二人は昨日の夜頑張っていたし大丈夫だと思う。

【ク、クリ〜。】

【どうしたんだい、ハネクリボー。いやな顔して。】

【クリ〜。】

【ん、あー、アイツか。気にするだけ無駄だよ。アイツには僕らは見えていないからね。】

【クリ。】

それにしても本当にアイツはジャック本人とは似てもつかない。ていうか、比べたらジャック本人に失礼だよ。それに考え込んでるよ、君も転生者なんだからこれくらいの問題は楽勝なはずだよ。

「時間ですニヤ〜。筆記用具を置いてくださいニヤ〜。」

あ、テストの時間が終わった。十代を起こさないと。十代の寝顔もつと見たかったのにな、残念。

【十代、起きなよ。もう時間だよ。】

【クリ〜、クリ〜。】

「……………ん、もうそんな時間か。ありがとう二人とも。」

【どづいたしまして。】

【クリ〜。】



「実技試験は午後からですニャ〜。皆遅れずにくるニャ〜。」  
大徳寺先生がそういうと大半の生徒が走って教室から出ていった。

【どうしたんだらうね。何であんなに慌てる必要があるのかな？】

（新しいパックが入荷したから皆新しいカードが欲しいんだろ。俺は持っているからいいけど。）

【そうだね。そうだ十代、オリジナルカードやシンクロモンスターとかはどうするかは決めたの？】

（ああ、考えてみたけど、使わないし作らないことにした。俺はH EROを中心としたデッキでいくことに決めただ。）

【そっか、それが十代らしいよ。】

【クリ〜。】

早く実技試験の時間が来ないかな。十代のデュエルが早く見たいよ、僕は。

ユベルside out

十代side

筆記試験が終わり皆午後の実技試験に向けてデッキの最終調整などをしている。

「二人とも、筆記はどうだった？」

「アニキのおかげで半分くらいはできたッス。」

「俺もそれくらいできたんだな。十代はどうだったんだな？」

「全部。」

「え！」

「す、すごいんだな！」

「あれくらいどうってことない。それより二人とも、次は実技試験だ。」

「わ、分かってるッスよ。」

「分かってるんだな。」

二人とも気合いが入っているな。

「あら、あなた達。ここにいたの？」

「あつ、明日香か、どうしたんだ。」

俺と翔と隼人が話していると俺の後ろの方から明日香がきた。

「筆記の方のときはどうだったの？」

「僕は半分くらいッス。」

「俺もそれくらいなんだな。」

「全部。」

「ぜ、全部ですって!」

「そう、全部。そうだ明日香、このカードやるよ。」

「これは、《ドレインシールド》と《レインボーライフ》?」

「ああ、明日香のデッキにちょうどいいカードだと思うからな。《ドレインシールド》は相手モンスター一体の攻撃を無効にし、そのモンスターの攻撃力分自分のライフを回復するカード。《レインボーライフ》は手札を一枚捨てて発動したターンのみ全てのダメージをゼロにし、そのダメージ分自分のライフを回復するカードだ。」

「珍しいカードね。でも、いいの?」

「大事に使ってくればいい。」

「ありがとう、もらっておくわ。」

「アニキ、そろそろ行くよ。」

「ああ、そうだな。」

俺は翔と隼人、そして明日香と一緒に会場に向かった。

翔、隼人、明日香の試験が終わり、次は俺の番。ちなみに翔は《強化支援ヘビーウェポン》を装備し《リミッター解除》を発動した《スチームジャイロイド》で直接攻撃し、隼人は《コアラッコ》の効果で相手モンスターの攻撃力をゼロにし、そのモンスターを《マスタートীবोजना》で攻撃して勝利した。明日香は《ドゥーフルバツセ》と《レインボーライフ》のコンボを使っていた。なかなかいい使い方だな。さて、俺の相手はというと

「遅いぞ！」

原作通り万丈目だった。

「セニョール十代には他のオシリスレッドの生徒では勝てないノ〜ネ。特別にセニョール万丈目とデュエルしてもらうノ〜ネ。」

「分かりました。」

「遊城十代！今ここでお前を倒し、あの時の恨みを晴らしてやる！」

「かかってこい、万丈目！」

「万丈目さんだ！」

「デュエル！！！」

十代LP4000

万丈目LP4000

「俺のターン、ドロー。」

さてと、

「俺は《E・HEROクレイマン》を召喚！」  
クレイマンDEF2000

「さらにカードを二枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター クレイマン

魔法、罫 伏せ二枚

「俺のターン！ドロー！」

万丈目は一体どんなデッキでくるんだ？

「俺は《V-タイガー・ジェット》を召喚！」

V-タイガー・ジェットATK1600

このデッキは確か、クロノスが買い占めたカードを使って元のデッキの面影すらなくなったデッキか。

「俺は永続魔法《前線基地》を発動！このカードは、一ターンに一度、手札からレベル4以下のユニオンモンスターを一体特殊召喚することができる。《前線基地》の効果により、俺は《W-ウィング・カタパルト》を特殊召喚！」

W1ウィング・カタパルト ATK1200

「さらに俺は《V1タイガー・ジェット》と《W1ウィング・カタパルト》を合体させ、《VW1タイガー・カタパルト》を特殊召喚！」

VW1タイガー・カタパルト ATK2000

「そして、《VW1タイガー・カタパルト》の効果発動！手札を一枚捨て、相手モンスターの表示形式を変更する。俺は《クレイマン》を攻撃表示にする。」

クレイマン DEF2000 ATK800

守備表示だったクレイマンが攻撃表示になった。

「《VW1タイガー・カタパルト》で《クレイマン》を攻撃！」

「罠カード発動！《ヒーローバリア》。このカードは自分フィールド上に《E・HERO》と名のつくモンスターが存在する時、発動することが出来る。相手モンスター一体の攻撃を無効にする！」

《VW1タイガー・カタパルト》が放ったミサイルが《クレイマン》に向かうが、《クレイマン》の前に現れたバリアに阻まれた。

「くそつ、俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

万丈目

モンスター VW1タイガー・カタパルト

魔法、罠 《前線基地》、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー。俺は《E・HEROアイスエッジ》を召喚！」

アイスエッジ ATK800

「そんな雑魚に何ができる。」

「俺のデッキに雑魚なんていない！《アイスエッジ》の効果発動！手札を一枚捨てこのターン《アイスエッジ》は相手プレイヤーに直接攻撃することができる。《アイスエッジ》で直接攻撃！」

「このくらいくれてやる。くっ！」

万丈目 LP4000 3200

「俺は《クレイマン》を守備表示に変更。そしてカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

クレイマン ATK800 DEF2000

十代

モンスター クレイマン、アイスエッジ

魔法、罫 伏せ二枚

「いい気になるなよ。俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《天よりの宝札》を発動！互いのプレイヤーは手札が6枚になるようにデッキからカードをドロウする！そして、《X-ヘッド・キャノン》を召喚！さらに《前線基地》の効果により《Z-メタル・キャタピ

ラー』を特殊召喚する!」

Xーヘッド・キャノン ATK1800

Zーメタル・キャタピラー ATK1500

「さらに罫カード《リビングゲテッドの呼び声》を発動!墓地の《Yードラゴン・ヘッド》を特殊召喚!」

Yードラゴン・ヘッド ATK1400

万丈目の場に一気に三体のモンスターが召喚されたことに会場が驚いている。

「俺は《Xーヘッド・キャノン》と《Yードラゴン・ヘッド》、そして《Zーメタル・キャタピラー》を合体させ、《XYZードラゴン・キャノン》を特殊召喚!」

XYZードラゴン・キャノン ATK2800

「さらに、《VWータイガー・カタパルト》と《XYZードラゴン・キャノン》を合体!現れる、《VWXYZードラゴン・カタパルト・キャノン》!」

VWXYZードラゴン・カタパルト・キャノン ATK3000

万丈目の場に《VWXYZードラゴン・カタパルト・キャノン》が召喚された。てか、合体させる前に何故《XYZードラゴン・キャノン》の効果を使わないんだ?

「《VWXYZードラゴン・カタパルト・キャノン》の効果発動!



一ターンに一度、フィールド上のカードをゲームから除外することができる。俺は《クレイマン》を除外する！」

《VWXYZードラゴン・カタパルト・キャノン》は効果は強力で攻撃力も高い。だが、

「カウンター罨発動！《天罰》。手札を一枚捨て、モンスター効果の発動を無効にし破壊する！」

「何！」

《VWXYZードラゴン・カタパルト・キャノン》が《クレイマン》に胸部のキャノン砲を向けたが、雷が落ちてきて破壊された。

「くそ！俺はターンエンドだ！」

万丈目

モンスター なし

魔法、罨 前線墓地

「俺のターン、ドロー。俺は魔法カード《戦士の生還》を発動！墓地の《E・HEROエッジマン》を手札に加える。そして墓地の《E・HEROネクロダークマン》の効果発動！このモンスターが墓地に存在する時一度だけ、手札のレベル5以上の《E・HERO》と名のつくモンスターを生け贄なしで召喚することができる！来い！《E・HEROエッジマン》！」

エッジマン ATK2600

「そんなモンスターをいつの間に、まさか!」

「そのまさかだ。」

俺は《アイスエッジ》の効果で《ネクロダークマン》を、《天罰》の効果で《エッジマン》を手札から墓地に送っていた。

「《アイスエッジ》で直接攻撃!」

「くっ!」

万丈目LP3200 2400

「《エッジマン》で止めだ!パワー・エッジ・アタック!」

「うわああー!ー!ー!」

万丈目LP2400 0

『し、勝者!セニョール十代なノ〜ネ!(あ、あり得ないノ〜ネ!セニョール万丈目がドロップアウトボーイに負けるな〜テ!)』

「スゲーな、レッドがブルーに勝ったぞ!」

「十代君かつこいい!」

「あ、あり得ない。」

万丈目のLPがゼロになったと同時に他の生徒から歓声が上がった。

「何故だ、何故この俺はこのドロップアウトに負けたんだ？」

「万丈目、お前が負けた理由は三つある。」

「三つだと！」

「ああ、一つ目はプレイングミス。これは召喚した《X・ヘッド・キャノン》、《Y・ドラゴン・ヘッド》、《Z・メタル・キャタピラー》の三体で攻撃せずに《XYZ・ドラゴン・キャノン》を召喚したことだ。二つ目は俺がレッドだということだ。油断したこと。ブルーは強い、レッドは弱いというくだらない思い込みでお前は油断したんだ。そして三つ目は、自分が組んだデッキを信じなかったことだ。」

「な、何を！」

「そのままのことだ。」

『遊城十代君、君のプレイングセンス、カードを信じる心、実にお見事でした。よって君はライイエローに昇格です。』

校長が俺のことをライイエローに昇格させると言ってきたがもう俺は決めている。

「俺は辞退します。レッドのままに構いません。」

『えっ！どついついことですか！？』

「そのままです。レッドだ、ブルーだ、っていうことに俺は興味無いからです。」

『わ、分かりました。ですが、何かこちらからしなければ気が済みません。』

「じゃあ、レッドの待遇を良くしてください。校長先生、お願いします。」

『分かりました。』

これで少しは差別が無くなると思う。良かった。

「じゃあ、俺は戻ら」セニョール十代、ちょっと待つノ」ネ！」「何ですか？クロノス先生。」

俺が翔達の所に戻ろうとしたらクロノスに止められた。

「セニョール十代には、もう一人の生徒とデュエルしてもらおうノ」ネ。」

なんだかイヤな予感がする。

「相手は誰ですか？」

「この俺だ！」

偽物、お前かよ！まあいい、戦ってみたいと思っていたからちようどいいな。

「今日こそお前を倒さ」デュエル！」「最後まで言わせる！」

十代LP4000  
ジャックLP4000

俺の先行か、先行は取りたくなかったけどな。

「俺は《E・HEROバーストレディ》を召喚！」

バーストレディ ATK1200

「カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター バーストレディ

魔法、罫 伏せ一枚

「俺のターン！ドロー！俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！このモンスターは相手フィールド上のみモンスターが存在する時、手札から特殊召喚することができる。この効果で特殊召喚した時、元々の攻撃力と守備力は半分になる。」

知ってるよ、そんなこと。

バイス・ドラゴン ATK2000 1000 DEF2400  
1200

「さらに、俺はチューナーモンスター、《フレアリゾネーター》を召喚！」

フレアリゾネーター ATK300

「そして俺はレベル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《フレアリゾネーター》をチューニング！」

《フレアリゾネーター》が三つの輪になり、《バイス・ドラゴン》がその中を通過した。

「王者の鼓動、今ここに列をなす。天地鳴動の力を見るがいい！」

5 + 3 = 8

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！ジャックの場に《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が召喚された。

「さらに、《フレアリゾネーター》をシンクロ素材としたシンクロモンスターは攻撃力が300ポイントアップする。」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK 3000 3300

会場が《レッド・デーモンズ・ドラゴン》の攻撃力に驚いている。

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で《バーストレディ》を攻撃！アブソリュートパワーフォー스！」

仕方がない、このカードを使うか。

「畏カード発動！《くず鉄のかかし》。相手モンスター一体の攻撃を無効にする。そしてこのカードは発動後、墓地に送らずそのままセットする！」

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が《バーストレディ》に攻撃するが、くず鉄でできたかかしによって防がれた。

「何！《くず鉄のかかし》だと！何故お前がそのカードを持っている？」

「俺に勝つことが出来たら教えてやるよ。」

「いいだろう、俺はターンエンドだ！」

ジャック

モンスター レッド・デーモンズ・ドラゴン

魔法、罫 なし

何も伏せないって、勝てると思ってるのか？

「アニキー、頑張れー！」

「きばれー、十代！」

「十代！」

「負けるな、十代！」

「あれ、三沢君。いつからいたんスか？」

「いたよ！十代と万丈目のデュエルが始まる前から！」

「気づかなかったッス。」

「気づかなかったんだな。」

「気づかなかったわ。」

「……………」

翔と隼人と明日香が応援してくれている、頑張らないとな。それと三沢ゴメンな、俺も気づかなかった。後で《白魔導師ピケル》のカードあげるから落ち込まないでくれ。

「俺のターン、ドロー。」

よし、来た！

「このターンで終わりだ！」

「できるものならやってみろ！お前では俺の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》は倒せん！」

俺の、じゃないだろ！なんか《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が可哀想に見えてきた。早く救ってやるか。

「俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《フェザーマン》とフィールドの《バーストレディ》を融合。来い！《E・HEROフレイムウィングマン》！」

フレイムウィングマン ATK2100

「さらに、フュージョン・ウェポン 装備魔法を発動！《フレイムウィングマン》に装備する。



このカードはレベル6以下の融合モンスターにのみ装備可能。攻撃力を1500ポイントアップする！」

フレイムウィングマン ATK2100 3600

「何！だが、このターンで倒すことは無理だ！」

「まだ俺のメインフェイズは終わっていない。俺は魔法カード《ダーク・コーリング》を発動！手札または墓地から融合素材モンスターをゲームから除外し《ダーク・フュージョン》の融合召喚でのみ特殊召喚できる融合モンスターを特殊召喚する。俺は墓地の《フェザーマン》と《バーストレディ》を除外しダーク・フュージョン。来い！《E HEROインフェルノ・ウィング》！」

「い、《E HERO》だと！」

インフェルノ・ウィング ATK2100

俺の場に悪の心を持ったHEROが現れた。これが昨日の夜に俺がユベルに頼んだことだった。

昨晚

（ユベル、《E HERO》を貸してくれ。）

【《E HERO》を？でもどうしてだい？】

（ちょっとやってみたいことがあるんだ。）

俺がやってみたいこと、それは、《E・HERO》と《E HER O》を同じフィールドに出すことだ。このデュエルがあつて良かったと思つた。

「《フレイムウイングマン》で《レッド・デーモンズ・ドラゴン》に攻撃！フレイムシュート！」

「くっ！」

ジャックLP4000 3700

「《フレイムウイングマン》の効果発動！相手モンスターを戦闘によつて破壊したとき、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！」

「くそっ！」

ジャックLP3700 700

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を破壊した《フレイムウイングマン》がジャックの前に立ち右腕の竜の頭から炎をジャックに放つた。

「《インフェルノ・ウイング》で直接攻撃！インフェルノブラスト！」

「この俺が、うわぁぁー!!」  
ジャックLP7000

「アニキが勝ったッス！」

「十代、凄いだな！」

「さすがね、十代！」

「……………」

俺が勝ったと同時に翔と隼人と明日香が歓声を上げた。そして三沢、まだ落ち込んでいるのか、元気出してくれ。

「こ、こんなことあり得ない！キングの俺が負けるはずがない！」

「お前の負けだ、素直に認めろ。」

「認めない、俺は認めないぞ！」

「後、お前はキングなんかじゃない。」

「何だと！」

本当に本人とは違い馬鹿だしかっこ悪いなこいつは、ていうか比べたらジャック本人に失礼だよな。

「お前は自分の力に自惚れているだけだ。」

「くそっ！」

アイツは俺にそう言ってどっかに走り去って行った。もうこれからアイツのことは本人に申し訳ないからジャックと呼ばないことにしよう。俺はそう決めながら翔達の所に戻った。

十代 side out

ジャック side

「くそっ！」

何故この俺が負けたんだ？何故だ！それに十代が《くず鉄のかかし》を何故持っているんだ？分からない。もしかしてあの十代は俺と同じ転生者なのか？

「まあいい、今度こそ叩き潰してやる！遊城十代！そしてキングの座は俺のものだ！誰にも渡さないからな！」

ジャック side out

第五話 月一試験VS万丈目+噛ませ（後書き）

《融合》と《ダーク・コーリング》のコンボをやってみました。《ダーク・フュージョン》と《ミラクル・フュージョン》のコンボもできると思います。事故つたら大変ですが。この小説以外に他の小説も書きたいと思っているので、これから更新が遅くなるかも知れませんがよろしく願います。

**第六話 十代の怒り、霸王モード発動！（前書き）**

第六話です。十代の霸王モードをやってみました。

## 第六話 十代の怒り、霸王モード発動！

十代 side

月一試験から数日後、俺は今、レッド寮にいる。俺が校長に頼んでからレッド寮の待遇が良くなっていった。ご飯の時のおかずが前より増えたし、それに今はレッド寮が少しずつ改築されている。もう少しで一人部屋がいくつかできるらしい。その内の一つが俺の部屋になるみたいだ。大徳寺先生から、

「レッド寮が良くなったのは十代君のおかげだニヤ〜。これくらいのことしかできないけどみんなで決めたんだニヤ〜。」

と言われた。それを聞いてユベルが喜んでいった。相部屋の時は実体化出来なかったからな。まあ、それは楽しみにしておこう。

後、アイツがいなくなったと三沢から聞いた。アイツは筆記の成績が悪く、実技も結果が悪かったのでレッドに降格になったが、「レッドに降格するくらいなら退学した方がマシだ！」と言って学園を自主退学したらしい。凄い行動力だと思った。ちなみに、帰る時に三沢に《白魔導師ピケル》のカードを渡したら小躍りして喜んでいった。それと、アイツは女子から嫌われていたみたいだ。これは明日香から聞いたことだが相当嫌われていたらしい。アイツがいなくなったことで大半の女子が喜んでいて、と明日香は言っていた。

俺個人としてはアイツが月一試験の後に俺の所にくると思っていたが杞憂だったようだ。だが、俺はアイツを許さない。ライイエローの寮から帰る時にカードを拾ったのだがそのカードがアイツのカードだと分かったからだ。カードを大事にしないなんてデュエリスト

失格だ。まあ、そのおかげか精霊に会えたけどな。

【本当に助かりました。ありがとうございます十代さん。】

【ホントに助かった、もうアイツの側にいるなんてまっぴらゴメン  
だぜ。】

精霊は《エフェクトヴェーラー》と《ターボシンクロン》だった。  
この二人はアイツのデッキに入っていなかったらしい。二人は遊星  
のデッキに入っていたからな、アイツは入れなくなかったのだらう  
な。

【こつ言つのもなんだけど、君達大変だったね。】

【クリ〜。】

【ホント、大変だったよ。アイツ、いつもなんか変な事呟いていた  
からこつちが変になりそうだったぜ。】

【私はいつも気持ち悪い視線を感じていました。あのままでいたら  
大変でした。】

「成る程、で、アイツにはお前達のこととは見えていなかったんだな  
?」

【はい。】

【後、俺達の他にアイツのデッキの中にも精霊がいるんだけどな。】

「誰なんだ、そいつは?」



【《ダークリゾネーター》です。】

【でも《ダークリゾネーター》はアイツのデッキの中に入ったままだからアイツと一緒にだ。】

「そっか。」

俺はさらにいろいろな事を聞いたり話したりした。そして、粗方話が終わって少し散歩でもしようかと思つた時だつた。

「アニキー、大変ッス！」

「十代！ブルーの生徒が来たんだな！」

「やれやれ、またか。」

部屋を出ようとしたら翔と隼人が入ってきた。ここ数日何人かのブルーの生徒が俺に挑んできた。月一試験の時に万丈目の事をあんな風に言つたツケが回ってきたか。やれやれ、今度から自重することしよう。ちなみに翔と隼人はレッドのままにいる。二人に連れられて部屋を出るとブルー生徒がいた。

「遊城十代！俺とデュエルしろ！一回ブルーに勝つたくらいでいい気になるなよ！」

いや、ブルーに勝つたのは一回ではないから、とは言わないでおこう。火に油を注ぐ結果になるからな。

「レッドのクセに生意気なんだよ、お前は！レッドはレッドらしく

してればいいんだよ！」

「レッドらしく、というの？」

「そのままだ！レッドは弱いから雑魚カードを使っていいだけだ！お前が勝てたのもカードが強かったおかげなんだよ。」

こいつ、今何て言った？

「そうだ！いいこと思い付いた。俺が勝ったらお前のカードを貰ってやる。そしてお前の目の前で破ってやるよ！」

ブルー生徒のその台詞を聞いた瞬間、俺の中の何かのスイッチが入った。

十代 side out

ユベル side

やれやれ、ブルーは本当にプライドだけが高いね。万丈目ってやつは油断して負けたというのにね。それよりこいつ、十代の前で言うてはいけない事を言っちゃったよ。僕どうなっても知らないからね。

【ク、クリ〜?!】

【じ、十代さん。お、怒ってるよね?】

【お、怒ってるだろ。ユベル、あ、あんな風になった十代って見た

【ことあるか？】

【あるよ。あ、そっか、三人は怒った時の十代を知らないんだよね。あれは十代の霸王モードだよ。】

【は、霸王モードって何ですか！？】

【ああなつた十代を僕はそう呼んでいるのさ。十代はカードを大事にしない人が大嫌いだからね。霸王モードの十代は怖いよ。】

【ク、クリ〜！！】

【や、やばいじゃねえか、アイツ！！】

【な、なんか十代さんの後ろに何か見えますよ！！】

【ああ、そうだね。】

ハネクリボー達が少し混乱している。まあ、僕は大丈夫だけどね。

「は、隼人君。ア、アニキ怒ってるツスよね？」

「お、怒ってるんだな。こ、怖いんだな。」

「……おい、デュエルしないのか？」

「い、いいだろう。俺が勝ったらカードは貰っぞー！」

「……分かった。」

「デュエル！」

「……デュエル。」

十代LP4000

ブルー生徒LP4000

「……俺の先行、ドロ。俺はカードを二枚伏せてターンエンド。」

十代

モンスター なし

魔法、罫 伏せ二枚

十代がモンスターを出さないなんて、手札が悪かったのかな。

「モンスターを出さないなんてなめているのか！俺のターン、ドロ！俺は《ゴブリン突撃部隊》を召喚！さらに、魔法カード《二重召喚》を発動！俺はこのターン二回まで通常召喚できる。《ジャイアントオーク》を召喚！」

ゴブリン突撃部隊 ATK2300

ジャイアントオーク ATK2200

「これで終わりだ！《ゴブリン突撃部隊》で直接攻撃だ！」

伏せカードを警戒しないとね。何考えているんだか。

「……罫カード発動。《ガードブロック》。この戦闘によって発生

するダメージをゼロにし、俺は一枚カードをドロウする。」

「《ゴブリン突撃部隊》は攻撃したら守備表示になり、次の俺のターンのエンドフェイズまで表示形式を変更することが出来ない。だが、《ジャイアントオーク》で直接攻撃だ！」

ゴブリン突撃部隊 ATK 2300 DEF 0

「……罨カード発動。《ドレインシールド》。相手モンスター一体の攻撃を無効にし、攻撃を無効にしたモンスターの攻撃力分俺はライフを回復する。」

十代 LP 4000 6200

「くそっ！命拾いしたな、ターンエンドだ！」

ブルー生徒

モンスター ゴブリン突撃部隊、ジャイアントオーク

魔法、罨 なし

「……俺のターン、ドロ！俺は《ターボシンクロン》を召喚。」

【よ、よっしゃー、お、俺の出番だぜ！】

ターボシンクロン ATK 100

「そんな攻撃力が低い雑魚を出してどうにかなると思ってるのか！俺のモンスターに勝てる訳ないだろ！」

「……関係ないな。《ターボシンクロン》で《ジャイアントオーク》に攻撃。」

「馬鹿だなお前は！攻撃力は《ジャイアントオーク》の方が上だ！」

「……この瞬間の<sup>ターボシンクロン</sup>効果発動。このカードがモンスターを攻撃するとき、攻撃するモンスターを守備表示にすることができる。」

「何！」

ジャイアントオーク ATK2200 DEF0

【い、行くぜー！】

《ターボシンクロン》が《ジャイアントオーク》の足に体当たりし、《ジャイアントオーク》が転んで破壊された。凄いな。

「……俺は魔法カード《強欲な壺》を発動。カードを二枚ドロースる。カードを一枚伏せてターンエンド。」

十代

モンスター ターボシンクロン

魔法、罫 伏せ一枚

「くそ！そんな雑魚すぐ破壊してやる！俺のターン、ドロ！俺は《ゴブリン突撃部隊》を生け贄に《偉大魔獣ガーゼット》を召喚！このモンスターの攻撃力は生け贄に捧げたモンスターの元々の攻撃力の二倍になる。よって攻撃力は4600だ！」

偉大魔獣ガーゼット ATK 0 4600

「……この瞬間、手札の《エフェクトヴェーラー》の効果を発動。このカードを墓地に送ることで、相手モンスター一体の効果エンドフェイズまで無効にする。」

【こ、これくらいしか出来ませんが、が、頑張ります！】

偉大魔獣ガーゼット ATK 4600 0

《偉大魔獣ガーゼット》が《エフェクトヴェーラー》の羽に包まれると力が抜けて弱々しくなった。

「だがそれもその場しのぎだ、俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ！と同時に《偉大魔獣ガーゼット》の攻撃力が4600に戻る！」

偉大魔獣ガーゼット ATK 0 0

「な、何故攻撃力が戻らない!?!」

「……効果を無効化したからな。効果を無効化したモンスターはテキストの攻撃力になり、そのままになる。《偉大魔獣ガーゼット》の攻撃力はゼロだ。」

「何!」

ブルー生徒

モンスター 偉大魔獣ガーゼット

魔法、罨 伏せ一枚

「……俺のターン、ドロ。俺は魔法カード《融合》を発動。俺は手札の《E・HEROスパークマン》と《沼地の魔神王》を融合。現れる、《E・HEROサンダージャイアント》。」

サンダージャイアントATK2400

「……《サンダージャイアント》の効果発動。手札を一枚捨てて元々の攻撃力が《サンダージャイアント》より低いモンスターを一体破壊する。《偉大魔獣ガーゼット》を破壊。」

「何！くそ！」

《サンダージャイアント》が放った雷が《偉大魔獣ガーゼット》に当たり破壊した。

「……さらに魔法カード《O オーバーソウル》を発動。墓地の《E・HERO》と名のつく通常モンスターを一体特殊召喚する。俺は《スパークマン》を特殊召喚する。」

スパークマンATK1600

これで決まるかな。

「……《スパークマン》で直接攻撃。スパークフラッシュ。」

「やっぱりお前は馬鹿だな！伏せカードを警戒しないと。罨力



ード発動！《聖なるバリアーミラーフォース》。お前のモンスターは全m「……畏カード発動。《王宮のお触れ》。このカード以外の畏カードの効果を無効にする。」何！くっ！「

ブルー生徒LP4000 2400

馬鹿は君でしょ。最初のターン伏せカードを警戒せずに攻撃したんだからね。

「……《サンダージャイアント》で直接攻撃。ボルティックサンダー。」

「うわああー！！」

ブルー生徒LP2400 0

デュエルが終わった。十代の勝ちだね。

ユベルside out

翔side

アニキがブルー生徒とのデュエルに勝った、けどまだアニキは怒ってるッス。こ、怖いよー！レッドの生徒はみんな怯えているッス！だ、誰か助けてー！

「……まだやるか？」

「う、う、うわああー！」

アニキがそういうとブルー生徒は慌てて走り去って行った。

「あれ、お前達どうしたんだ？」

あれ、戻った？よ、良かったッス！みんな緊張の糸が解けて座り込んでいる。

「ゴメンな、みんな。怖がらせてしまつて。」

「あ、い、いや、アニキ。ぼ、僕は大丈夫ッスよ。」

「お、お、俺も大丈夫なんだな。」

この出来事があったから、アニキを絶対怒らせてはいけない、というレッド寮の暗黙の了解ができたみたいッス。

翔 side out

第六話 十代の怒り、霸王モード発動！（後書き）

次はあの若本さんを登場させます。頑張っ  
て書いていきますのでよろしくお願  
いします。

## 第七話 廃寮でのデュエルVSタイタン（前書き）

第七話です。短くなってしまいました。あと若本さん口調難しいです。

## 第七話 廃寮でのデュエルVSタイタン

十代 side

俺と翔と隼人の三人は廃寮の前にいる。ここに来る前にレッド寮でモンスターカードをドロ―してそのレベルにあった怖い話をしていたら大徳寺先生が来て廃寮の話をしてくれた。興味が出たので行って見たが、

「あ、アニキ。怖いッス。」

「こ、怖いんだな。」

「怖がるなよ二人とも。」

翔と隼人が怖がっている。俺は大丈夫なんだけどな。でも何か出るかもな、と思った時だった。

「きゃー！ー！」

誰かの悲鳴が聞こえた。

「「きゃー！ー！ー！」」

「二人とも、驚きすぎだ。えっと、こっちから聞こえたな。」

「あ、アニキ！ま、待って欲しいッスよー！」

「じ、十代！待ってくれなんだなー！」

悲鳴が聞こえた方に俺は向かった。翔と隼人はあとから着いてきた。

「こ、このカードは?!」

「アニキー!どうしたんすか?!」

「十代。そのカードは?」

「これは、明日香の《エトワールサイバー》だ!じゃあ、さっきのは明日香の悲鳴か!?!」

俺はそのまま真っ直ぐ走った。そしたら開けた場所に出た。そこには若m、じゃなくてタイタンと気を失った明日香がいた。

「いようこそ、ここへ!わあたしはタイタン。闇のデュウエリストだ。」

「お前、明日香に何をした!」

「くおの者の意識は闇の中だ。遊城十代!わあたしとデュウエルしてもらおう。」

「俺が勝ったら明日香は返して貰うぜ。」

「いいだろう。」

「」「デュエル!」

十代LP4000

タイタンLP4000

「わあたしのターン、ドロォー！私はフィールド魔法《万魔殿―悪魔の巣窟―》を発動！このフィールドは《デーモン》と名のつくモンスターをコントロールするプレイヤーはスタンバイフェイズにライフを支払わなくてよい。そして戦闘以外で《デーモン》と名のつくモンスターが破壊された時、破壊された《デーモン》と名のつくモンスターのレベル以下の《デーモン》と名のつくモンスターを手札に加えることができるのだ！さらに私は《インフェルノクイーンデーモン》を召喚！そしてカードを二枚伏せてターンエンド。」

インフェルノクイーンデーモン ATK900

タイタン

モンスター インフェルノクイーンデーモン

魔法、罫 万魔殿―悪魔の巣窟―、伏せ二枚

デーモンか、厄介だな。眠いしさっさと終わらせるか。

「俺のターン、ドロォー。俺は魔法カード《ハリケーン》を発動！フィールド上の魔法、罫カードを全て持ち主の手札に戻す。」

「な、何！」

不気味だったデュエルフィールドが元に戻った。

「俺はフィールド魔法《摩天楼―スカイスクレイパー》を発動！そして《E・HEROキャプテンゴールド》を召喚！」

キャプテンゴールド ATK 2100

「レベル4で攻撃力2100だとお！」

「《キャプテンゴールド》は《摩天楼―スカイスケレイパー》がフィールド上に存在しない時、破壊されるモンスターだ。そして魔法カード《HERO'sボンド》を発動！このカードは《E・HERO》と名のつくモンスターが存在する時に発動することができる。《E・HERO》と名のつくモンスターが存在する時に発動することができる。手札からレベル4以下の《E・HERO》と名のつくモンスターを二体特殊召喚する。《エアーマン》と《スパークマン》を特殊召喚する！《エアーマン》の効果は発動しない。」

エアーマン ATK 1800

スパークマン ATK 1600

「《キャプテンゴールド》で《インフェルノクイーンデーモン》を攻撃！」

「くうう！」

タイタン LP 4000 2800

「《スパークマン》と《エアーマン》で直接攻撃！」

「うわぁぁー！」

タイタン LP 2800 0

呆気なく終わったな。



「く、くそ！」

タイタンは走り去って行った。闇のゲームやらなかったな、まあいいか。

「明日香、大丈夫か！？しっかりしろ。」

「……十代、なんでここに？私は一体？」

「気を失っていたんだろう、立てるか？」

「ええ。」

俺達は寮に帰った。

十代 side out

第七話 廃寮でのデュエルVSタイタン（後書き）

次は制裁デュエルまで時間を飛ばします。

第八話 制裁デュエルVS迷宮兄弟(前書き)

第八話です。遅くなつてすみません。

## 第八話 制裁デュエルVS迷宮兄弟

十代 side

廃寮でタイタンとデュエルした翌朝、俺と翔は倫理委員会に連れていかれ、退学と勧告された。まあ、クロノスが制裁タッグデュエルで勝つことが出来たら退学は無しにしてくれると言った。

その後、翔とデュエルして翔が行方不明になったり、カイザーとデュエルしたりなどあったけど何とか制裁タッグデュエル当日を迎えた。カイザーとのデュエルはカイザーを追い詰めたものの、最後は《サイバー・エンド・ドラゴン》に《パワー・ボンド》と《リミッター解除》を発動し、攻撃されて負けた。リスペクトデュエルと言いながら本気と感じたのは俺だけか？

話がそれたな。俺と翔のデッキはこの日のために調整している。ちなみに、神からもらったアタッシュケースを漁っていたら、あるカードが出てきたのでびっくりした。そのカードを中心にもうひとつのデッキを作って、今は持っている。

「今回一八、不屈き者を倒すべく、伝説のデュエリスト武藤遊戯と戦ったデュエリストを呼んでいるノ〜ネ。」

クロノスがそう言うのと会場の端から二人の男がバク転しながら出てきた。

「我ら流狼の番人。」

「迷宮兄弟。」

「お主達に恨みはないが」

「故あり、対戦する。」

「我らを倒さなければ」

「道は開けん。」

「「いざ、尋常に勝負!!!」」

来たな、迷宮兄弟。息合いすぎだろ。あの双子姉妹も驚くだろうな。

「あ、アニキ。伝説のデュエリストと戦った人達に、僕達勝てるかな？」

「翔、何弱気になっているんだ。そんなんじゃ勝てないぜ。落ち着いてやれば大丈夫だ。」

「う、うん。」

翔が弱気になっていたが、俺の言葉で何とか持ち直したみたいだ。

「タッグデュエルのパートナーへの助言は禁止なノ〜ネ。ライフは共通で8000、パートナーのフィールドと墓地は自分のフィールドと墓地として使用可能なノ〜ネ。それでは始めなノ〜ネ！」

「「「デュエル!!」」」

十代、翔LP8000

迷宮兄弟LP8000

「僕のターン、ドロー!」

ちなみに順番は翔 迷宮兄 俺 迷宮弟の順番で最初のターンは全員攻撃できない。

「僕は《サブマリノイド》召喚。カードを一枚伏せてターンエンド。」

サブマリノイドATK800

十代、翔

モンスター サブマリノイド

魔法、罫 伏せ一枚

「私のターン、ドロー!私は《地雷蜘蛛》を召喚!」

地雷蜘蛛ATK2200

「ターンエンドだ。」

迷宮兄弟

モンスター 地雷蜘蛛

魔法、罨 なし

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROフォレストマン》を召喚！」

フォレストマンDEF2000

「カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代、翔

モンスター サブマリンロイド、フォレストマン

魔法、罨 伏せ二枚

「私のターン、ドロー！私は《カイザー・シーホース》を召喚！」

カイザー・シーホースATK1700

「さらに、私は魔法カード《生け贄人形》を発動！自分の場のモンスターを一体生け贄にして、手札の通常召喚可能なレベル7のモンスター一体を特殊召喚する。私は兄者の場の《地雷蜘蛛》を生け贄に《風魔神 ヒューガ》を特殊召喚！」

風魔神 ヒューガATK2400

さっそく、三魔神の一体を出してきたか。

「すまぬ、兄者。」

「構わぬ、お前のためならば犠牲にでもなろう。」

「それでは私の気がおさまらぬ、私は兄者を対象に魔法カード《闇の指名者》を発動！カード名を一枚選択し、そのカードが相手のデッキに入っていれば相手はそのカードを手札に加える。私が選択するのは《雷魔神 サンガ》。」

「ありがたい、勿論私のデッキには《雷魔神 サンガ》は入っていない。」

《闇の指名者》ってタッグデュエル専用のカードだな。

「私はターンエンドだ。」

迷宮兄弟

モンスター 風魔神 ヒューガ、カイザー・シーホース

魔法、罫 なし

「僕のターン、ドロー！僕は《スチームロイド》を召喚！」

スチームロイド ATK1800

「バトル！《サブマリンロイド》は直接攻撃することができる！《サブマリンロイド》で直接攻撃！」



「1」のくらい、くっ！」

「兄者！」

《サブマリノイド》が地面に潜り、そのあと兄の目の前の地面から魚雷が飛び出して兄に当たった。

迷宮兄弟LP8000 7200

「《サブマリノイド》は攻撃したあと、守備表示にすることができる。そして、《スチームロイド》で《カイザー・シーホース》に攻撃！この瞬間の<sup>スチームロイド</sup>効果発動！《スチームロイド》が相手モンスターを攻撃するとき攻撃力を500ポイントアップする。」

サブマリノイドATK800 DEF1600

スチームロイドATK1800 2300

「この瞬間、《風魔神 ヒューガ》の効果発動！相手モンスターの攻撃力を一度だけ0にすることができる！ストーム・バリケード！」

「しまった！」

スチームロイドATK2300 0

《スチームロイド》が《カイザー・シーホース》に向かうが《風魔神 ヒューガ》の起こした風によって止まり、《カイザー・シーホース》に攻撃され、破壊された。

十代、翔LP8000 6300

「……アニキ、ごめん。」

「翔、気にするな。まだまだデュエルは始まったばかりだ。」

「う、うん。僕はターンエンド。」

十代、翔

モンスター サブマリンロイド、フォレストマン

魔法、罨 伏せ二枚

「私のターン、ドロー！私は魔法カード《天使の施し》を発動！デッキからカードを三枚ドローし、その後カードを二枚墓地に送る。そして、《カイザー・シーホース》は光属性モンスターを生け贄召喚するとき、一体で二体分の生け贄にすることができる。私は《カイザー・シーホース》を生け贄に《雷魔神 サンガ》を召喚！」

雷魔神 サンガATK2600

「さらに、魔法カード《死者蘇生》を発動！墓地の《水魔神 スーガ》を特殊召喚！」

水魔神 スーガATK2500

迷宮兄弟の場に三魔神が揃った。

「えっ！？そんなモンスターいつの間に！」

「《天使の施し》の時だな。後、まだ何かやる気だな。」

「いかにも、我等兄弟の場に三魔神が揃った！」

「今こそ見せてしんぜよう、我等兄弟の究極のモンスターを！」

「私は《雷魔神 サンガ》、《風魔神 ヒューガ》、《水魔神 スーガ》を生け贄に、出でよ！《ゲート・ガーディアン》！！」

ゲート・ガーディアン ATK 3750

《ゲート・ガーディアン》の出現に会場がざわめいている。：しかし、何か微妙。《ゲート・ガーディアン》ってただ単に三魔神が重なっただけだし、攻撃力が7500から半分の3750になっただけかな。

「さらに私は<sup>メテオ・ストライク</sup>装備魔法を発動！《ゲート・ガーディアン》に装備する。このカードを装備したモンスターは、守備表示モンスターを攻撃したとき、攻撃力が守備力を上回っていればその数値分相手にダメージを与える。バトル！《ゲート・ガーディアン》で《サブマリノロイド》に攻撃！魔神衝撃波！」

「させない！畏れカード発動！《和睦の使者》。このターン、俺達のモンスターは戦闘によって破壊されず、俺達が受ける戦闘ダメージは0になる。」

《ゲート・ガーディアン》が《サブマリノロイド》に攻撃するが、《和睦の使者》によって防がれた。

「アニキ！何でそのカードを《スチームロイド》の時に使ってくれなかったの！」

「ごめんな、翔。忘れてた。」

「ちょっと！何で忘れてるんスか！」

「まあ、いいじゃないか。《ゲート・ガーディアン》の攻撃を防げただし。」

「そ、そうっスね。」

「ふん、たかがその場しのぎのこと！」

「我等兄弟の《ゲート・ガーディアン》は倒せん！」

「私はターンエンドだ。」

迷宮兄弟

モンスター      ゲート・ガーディアン

魔法、罫      メテオ・ストライク（ゲート・ガーディアンに装備）

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《フォレストマン》の効果発動！デッキまたは墓地から《融合》を手札に加えることができる。俺はデッキから《融合》を手札に加える。」

そう言えば、翔は《フォレストマン》の効果を使っていなかったが、融合素材となるモンスターが揃っていなかったみたいだな。

「俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《バブルマン》とフィールドの《フォレストマン》を融合。来い！《E・HEROガイア》！」

ガイア ATK 2200

「そんなモンスターを出したところで！」

「我等兄弟の《ゲート・ガーディアン》は倒せんぞ！」

「このターンで倒せるぜ。」

「何だと！！！」

「《ガイア》の効果発動！このモンスターが融合召喚に成功した時、相手モンスター一体を選択し、選択したモンスターの攻撃力を半分にし、このターンのエンドフェイズまでその半分にした攻撃力分の攻撃力をアップする。俺は《ゲート・ガーディアン》を選択する！」

「何！！！」

ゲート・ガーディアン ATK 3750 1875

ガイア ATK 2200 4075

何か、中途半端な攻撃力になったな。別に構わないけど。

「《サブマリンロイド》を攻撃表示に変更、そしてバトル！《ガイア》で《ゲート・ガーディアン》に攻撃！コンチネンタルハンマー

「！」

「くっくうう！」「」

《ガイア》が右手を振りかざし《ゲート・ガーディアン》に叩きつけて破壊した。

迷宮兄弟LP7200 5000

「くっくく おおおお！……！！」「」

《ガイア》が《ゲート・ガーディアン》を破壊したと同時に観客から歓声が上がった。

「《サブマリノイド》で直接攻撃！」

「くっくつ！」「」

迷宮兄弟LP5000 4200

「俺は魔法カード《融合回収》を発動！墓地の《融合》と《フォレストマン》を手札に加える。そして、《融合》を発動！《サブマリノイド》と《ガイア》を融合。来い！《E・HEROアブソル―トZero》！さらに《フォレストマン》を召喚！」

アブソルトZero ATK2500

フォレストマンDEF2000

「俺はターンエンドだ。」

十代、翔

モンスター      アブソルートZero      フォレストマン

魔法、罨      伏せ二枚

「…油断したな。」

「まさか、我らの《ゲート・ガーディアン》が敗れるとはな。」

「だが！」

「!？」

「我らの切り札を使わせてもらおう。私のターン、ドロー！私は魔法カード《ダークエレメント》を発動！このカードは墓地に《ゲート・ガーディアン》が存在する時、発動することができる。ライフを半分支払い、デッキから《闇の守護神ダーク・ガーディアン》を特殊召喚する！」

迷宮兄弟LP4200      2100

闇の守護神ダーク・ガーディアンATK3800

「こ、攻撃力3800!!！」

「翔、何驚いているんだ？」

「だってアニキ！《ゲート・ガーディアン》より攻撃力が高いんだよ！」

「……攻撃力3800だぜ、大丈夫だろ。攻撃力がそれくらいで驚いてどうするんだ。」

「えっ！」

「何！」

俺の発言に翔や迷宮兄弟だけでなく会場全体が驚いている。迷宮兄弟はともかく、翔、お前はこの前攻撃力16000の《サイバー・エンド・ドラゴン》を見ていたんだろ！

「そんなことを言えるのも今のうちだ！」

「《闇の守護神ダーク・ガーディアン》は戦闘によっては破壊されない！」

「このモンスターこそ、我ら兄弟の切り札だ！！！」

戦闘によって破壊されないなら、効果によっては破壊されるよな。

「《闇の守護神ダーク・ガーディアン》で《アブソルートZero》に攻撃！ダーク・ショック・ウェーブ！！！」

「畏カード発動！《くず鉄のかかし》。相手モンスターの攻撃を無効にする！そしてこのカードは発動後墓地に送らずそのままセットする！」



「毎ターン使用できる通常罨だと！」

《ダーク・ガーディアン》が放った衝撃波が《くず鉄のかかし》によって防がれた。

「くつ、私はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

迷宮兄弟

モンスター 闇の守護神ダーク・ガーディアン

魔法、罨 伏せ一枚

「翔、次はお前のターンだけ、頑張れよ！」

十代 side out

翔 side

「翔、次はお前のターンだけ、頑張れよ！」

アニキが僕のことを応援してくれる、けど最初は僕で大丈夫か不安だった。でもアニキと一緒になら勝てるかもしれない、僕はそう思った。

「僕のターン、ドロー！（こ、このカードは！？）」

僕は引いたカードを見て戸惑った。

「翔！」

アニキが叫んで僕がアニキの方を見ると、頷いていた。分かったよ、アニキ。行くよ！

「僕は魔法カード《パワー・ボンド》を発動！このカードは機械族専用の融合カード。手札の《ユーフォロイド》とフィールドの《アブソルトZero》を融合。《ユーフォロイド・ファイター》を召喚！」

《ユーフォロイド》に《アブソルトZero》が乗ったモンスターが僕たちの場に召喚された。

ユーフォロイド・ファイター ATK？

「攻撃力が決まっていな！？」

「《ユーフォロイド・ファイター》の攻撃力は融合素材としたモンスターの攻撃力の合計した数値となる。《ユーフォロイド》の攻撃力は1200、《アブソルトZero》の攻撃力は2500、《ユーフォロイド・ファイター》の攻撃力は3700になる。さらに《パワー・ボンド》の効果により攻撃力は二倍になる。よって《ユーフォロイド・ファイター》の攻撃力は7400になる！」

ユーフォロイド・ファイター ATK？ 7400

「ここ、攻撃力7400だと！！！」

「それだけじゃないぜ、《アブソルトZero》の効果発動！このカードがフィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊す

る！」

「何！」

迷宮兄弟の《ダーク・ガーディアン》が凍りついて破壊された。

「さらに、僕は魔法カード《ハリケーン》を発動！互いのフィールドの魔法、罫カードを全て持ち主の手札に戻す。」

「くっ！」

よし、これで！

「《ユーフォロイド・ファイター》で直接攻撃！フォーチュン・ブリザード！」

「うわぁぁー！！！」

迷宮兄弟LP21000

やったー！勝った！

「素晴らしいデュエルでした。遊城十代君、丸藤翔君。」

「じゃあ、僕達は？！」

「君達の退学は取り消します。よろしいですね、クロノス教諭？」

「……か、構いませんー。」

良かった！頑張った甲斐があったよ。

翔 side out

十代 side

良かった、退学にならなくて。ちなみに迷宮兄弟は去っていった。会場を見ると隼人や明日香、三沢達は喜んでいる。逆に万丈目やその取り巻き、俺のことを良く思っていない生徒達は悔しがっている。

【クリ〜！】

【やったな、十代！】

【やりましたね、十代さん！】

【僕は十代なら勝てると思っていたよ。】

（みんな、ありがとな。あ、そういえばこのデッキ使わなかったな。）

【別にいいんじゃないかな。】

（そうだな、機会があったら使うか。）

俺は喜んでいる翔の所に行った。

十代 side out

## 第八話 制裁デュエルVS迷宮兄弟（後書き）

もうひとつのデッキは後々使います。十代にはいくつかのデッキを使わせてみたいと思っています。

## 第九話 予想外のデュエル、十代の第二のデッキ（前書き）

第九話です。グダグダです。十代がE・HERO以外のデッキを使います。

## 第九話 予想外のデュエル、十代の第二のデッキ

十代 side

制裁デュエルから数日後、俺は翔と一緒に三沢の部屋にいる。三沢の部屋から机などを運びだし、壁をペンキで塗っている。三沢が

「明日、寮の入れ替え試験があるんだ。部屋を掃除したいから手伝ってくれ。」

と俺と翔に言ってきたからだ。

「……しかし三沢、何で壁に数式を書いたんだ？」

「これくらい書かないと気がすまないからな。」

「三沢君は勉強熱心だね。」

「そつえば三沢、今夜はどうするんだ？」

「それなんだが、十代の部屋に泊めさせてくれないか？」

「俺の部屋に？」

ちなみにレッド寮の改築は粗方終わっていて、俺は一人部屋に移動している。だけどな、

「ごめんな、まだ俺の部屋の整理が終わってないんだ。」

「あ、じゃあ三沢君、僕達の部屋に来ればいいよ。アニキが一人部屋に移動したからベッドが1つ空いているんだ。」

「済まないな。ありがとう。」

部屋の整理が終わってないのは事実だが、本当は別の理由があるんだよ。三沢、ごめんな。その後俺達は、壁のペンキ塗りを終えた。

「さて、終わったことだしレッド寮に戻るか。」

「そうだね、アニキ。」

「今夜はお世話になるよ。」

「そうだ、三沢。デッキは持っているか？」

「ちょっと待ってくれ、えっと、確か……………あ、あった!」

三沢が外に出してあった机の引き出しからデッキを取り出した。

「三沢君、そのデッキは何スか？」

「これか？これは調整用のデッキだよ。ありがとう十代。危うく忘れるところだったよ。」

「盗まれたら大変だからな。三沢、カードは大事にしろよ。」

「分かってる。」

「……………そ、そうだよ三沢君、か、カードは大事にしないとね。」



「わ、分かってるが翔、大丈夫か？」

「ぼ、僕は大丈夫だよ。」

まあ、これで万丈目にカードを捨てられることはないな。良かった。

「三沢、デッキの調整に付き合っていていいか？」

「構わない。いや、むしろ助かるよ。」

俺は翔と三沢と一緒にレッド寮に歩いて行った。レッド寮に戻った後、大徳寺先生に事情を話したら了承してくれた。その後は、翔達と三沢のデッキ調整に付き合ったりなどして、寝る時間になり俺は部屋に戻った。

【お帰り、十代。】

「ただいま。あれ、ハネクリボー達は？」

【ハネクリボー達はもう寝てるよ。】

俺が部屋に入るとユベルが実体化していた。

「そつえばこの部屋に誰か来たか？」

【誰も来ていないよ。】

「分かった。じゃあ、俺は寝るから。」

ユベルにそう言って着替えてベッドに入って寝た。が、

「……………ユベル。」

【十代、何かな？】

「……………分かってて言ってるだろ。」

【そうだけど。】

「……………あのな、何で入って来てるんだよ。」

【いいじゃないか、別に。アカデミアに入る前までこうしてたんだからさ。】

「……………もう勝手にしてくれ。」

【分かったよ。】

これが三沢を部屋に入れられなかった本当の理由だ。俺が一人部屋に移動してからユベルが俺と一緒に寝てくるようになった。まあ、ユベルには今まで実体化するのを我慢してたからな。ちなみに翼は俺の邪魔にならないようにしてくれている。ユベルなりの配慮なんだろうけど、やっぱり何故か勝てない気がした俺だった。

十代 side out

三沢（空気男） side

「だから！俺は空気男じゃない！！」

「三沢君、今は夜遅いッスから静かにして！」

「う、ごめん。」

俺は空気男じゃない、三沢大地だ！あれ？俺は一体誰に言っているんだ？

「三沢君、大丈夫？」

「俺は大丈夫だ。そういえば聞きたいことがあるんだが。」

「何スか？」

「十代は何であんなに強いんだ？」

「それは分からないッス。」

「俺も分からないんだな。」

「そうか。」

十代の強さは二人でも分からないのか。でもいつか十代を倒してみせる。そのためには明日の万丈目とのデュエル、絶対に負ける訳にはいかない！

三沢（空気男） side out

「だから、空気男じゃない！」

十代 side

翌日

俺が三沢の調整用のデッキを三沢に持たせたので万丈目がカードを捨てることはしなかったみたいだ。そういえば昨日の夜、何か聞こえたが気のせいか？それよりも、

「……………ユベル、起きてくれ。」

【……………ん、……………】

「……………おい。」

【……………ん、あ、十代おはよう。】

「おはよう、じゃなくてまずは離れてくれ。」

【……………分かったよ。】

俺が起きたらユベルが抱きついていて。ユベルと寝るとユベルが俺に抱きついていてことが多い。もう慣れたことだけだな。

【……………そういえば今日は何かあるの？】

「今日は三沢の寮の入れ替え試験があるんだ。」

【じゃあ、今日は観戦するんだね。】

「そういうこと。」

俺は着替えて部屋を出た。

その後は、三沢と万丈目がデュエルし三沢の《ウォーター・ドラゴン》が攻撃力が0になった万丈目の《炎獄魔神ヘル・バーナー》に攻撃して三沢が勝った。デュエルが終わった後のセリフまでカードを捨てたことを指摘した以外は原作と同じだった。まあ、俺も三沢とデュエルしたいし、負ける気はない。そう思って帰ろうとした時だった。

「遊城十代！ここで俺とデュエルしろ！」

「せ、セニョール万丈目！いきなりどうしたノーネ！」

「クロノス先生！お願いします。遊城十代とデュエルさせて下さい！」

俺が帰ろうとしたら万丈目がデュエルしろと言って来た。

「……し、しかし、セニョール万丈目、あなたはセニョール三沢に負けたノーネ。」

「クロノス先生、俺は構いませんよ。」

「で、ですーが、」

「じゃあ、セカンドチャンスということでしょうか。万丈目が勝つたら退学は取り消すということだ。」

「……セニョール万丈目、どうするノーネ？」

「俺は構いません！遊城十代！今度こそ貴様を倒してみせる！」

「ここでの万丈目とのデュエルは予想外だったが、ちょうどいい。もうひとつのデッキを使うことができる。」

「俺は今回は、HERO以外のデッキでいかせてもらおうぜ。」

「えっ！アニキがE・HERO以外のデッキを！」

「これは興味深いな。」

「何！まあ、いいだろう。」

俺がE・HERO以外のデッキで戦うと言ったら万丈目達が驚いていた。だが、万丈目はすぐに笑った。E・HERO以外のデッキならば俺に勝てると思っているんだろうな。

「デュエル！」

十代LP4000

万丈目LP4000

「俺の先攻、ドロー！俺は《地獄戦士》を召喚！さらにカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

地獄戦士 ATK1200

万丈目

モンスター 地獄戦士

魔法、罨 伏せ一枚

《地獄戦士》を一ターン目で出してくるとはな。

「俺のターン、ドロー！俺はフィールド魔法《天空の聖域》を発動！モンスターをセットし、カードを二枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター セット一枚

魔法、罨 天空の聖域、伏せ二枚

「十代のデッキは天使族デッキだな。」

「三沢君、何で分かるんすか？」

「《天空の聖域》は天使族モンスターをコントロールするプレイヤーへの戦闘ダメージを0にするのよ。」

そう、三沢の言う通りこのデッキは天使族デッキだ。だが、ただの天使族デッキじゃないからな。

「俺のターン、ドロー！俺は《地獄戦士》を生け贄に《地獄將軍メフィスト》を召喚！」地獄將軍メフィスト ATK1800

攻撃力が微妙だな。

「バトル！《地獄將軍メフィスト》でセットモンスターに攻撃！このモンスターは貫通能力を持っている！」

「俺のセットモンスターは《ジェルエンデュオ》。このモンスターは戦闘によつては破壊されない。俺がダメージを受けた時に破壊される。だが《天空の聖域》が発動しているので俺が受ける戦闘ダメージは0になる。」

《地獄將軍メフィスト》がセットモンスターを切り裂くが、光の粒子が集まり二体の小さな天使が現れた。

ジェルエンデュオDEF0

「くそ！俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ！」  
万丈目

モンスター 地獄將軍メフィスト

魔法、罫 伏せ三枚

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間、罫カード発動！《砂塵の大竜巻》。《天空の聖域》を破壊する！」



《天空の聖域》が《砂塵の大竜巻》によって破壊された。だが、予想の範囲内だ。さて、あのカードを出す時が来た！

「《ジェルエンデュオ》は天使族モンスターを生け贄召喚する時、一体で二分とすることができる。俺は《ジェルエンデュオ》を生け贄に、降臨せよ、《時械神ラフィオン》！」

俺の場に神の名を持つ天使が現れた。その天使は金属の鎧と翼を持ち、胴体に鏡があり、その鏡に顔が写っているが、その写っている顔こそ、この天使の本体。俺が見つけたあるカードとは、5D'sでゾーンが使っていた全ての時械神と関連するカードだった。ちなみに地縛神や機皇帝のカードなどもあったがそのデッキは作っていない。使って大丈夫なのかと思っていたが、同じく見つけた神からの手紙に「使っても問題ないです。」と書いてあったから大丈夫だと思う。

時械神ラフィオンATK0

「な、何だそのモンスターは！レベル10で攻撃力0だと！？ふざけているのか！」

「ふざけてなんかいない。バトル！《時械神ラフィオン》で《地獄將軍メフィスト》を攻撃！」

「あ、アニキ！何してるの！？」

「攻撃力0のモンスターで攻撃を！？」

「馬鹿だな！迎撃しろ！」

《時械神ラフィオン》が《地獄將軍メフィスト》に向かって風を放つがあっさりと消され、逆に《地獄將軍メフィスト》が《時械神ラフィオン》に斬りかかるが弾かれた。

「な、何故だ！何故破壊されない!?」

「《時械神ラフィオン》は戦闘及びカード効果によっては破壊されない。また、このカードが表側攻撃表示で存在する限り、このモンスターによつて発生する俺への戦闘ダメージは0になる。」

「ならば何故攻撃した!?!」

「そして、《時械神ラフィオン》は戦闘後、このモンスターと戦闘した相手モンスターを手札に戻し、戻したモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える。」

「何だと!?!くっ!」

《時械神ラフィオン》が風を起こし《地獄將軍メフィスト》を吹き飛ばして、その風が万丈目を直撃した。

万丈目LP4000 2200

「俺はターンエンドだ。」

十代

モンスター 時械神ラフィオン

魔法、罨 伏せ二枚

「くそ、ならば戦闘を行わなければ良いことだ！俺のターン、ドロ！俺は罨カード《リビングゲッドの呼び声》を発動！墓地の《地獄戦士》を特殊召喚する！さらに、装備魔法《団結の力》発動！《地獄戦士》に装備する。《団結の力》を装備したモンスターは俺のフィールドのモンスター一体につき、攻撃力が800ポイントアップする。そして攻撃力2000となった《地獄戦士》とこのカード以外の全ての手札を生け贄に《炎獄魔神ヘル・バーナー》を特殊召喚！《炎獄魔神ヘル・バーナー》は相手モンスター一体につき、攻撃力が200ポイントアップする。」

炎獄魔神ヘル・バーナー ATK2800 3000

「俺はターンエンドだ！」

万丈目

モンスター 炎獄魔神ヘル・バーナー

魔法、罨 一枚

「俺のターン、ドロ！スタンバイフェイズに《時械神ラフィオン》の効果が発動する。このカードは俺のスタンバイフェイズにデッキに戻る。」

《時械神ラフィオン》が光の粒子となって消えた。

炎獄魔神ヘル・バーナー ATK3000 2800

「レベル10で一ターンしか存在出来ないとはな。」

三沢が何か言っているが仕方のないことなんだよ。まあいい、次だ。

「俺は畏カード《虚無械アイン》を発動する。」

「何だその畏カードは!？」

「そして俺は《虚無械アイン》の効果を発動!このカードは自分フィールド上にモンスターが存在しない時、手札のレベル10以上のモンスター一体を生け贄なしで召喚することができる。降臨せよ、《時械神サンダイオン》!《虚無械アイン》の効果で召喚したモンスターは攻撃力が0になる。」

時械神サンダイオン ATK4000 0

「またそのふざけたモンスターか、いいかげんにしろ!俺を舐めているのか!」

「だから、ふざけてなんかいないって言っただろ。バトル!《時械神サンダイオン》で《炎獄魔神ヘル・バーナー》に攻撃!」

「この瞬間、畏カード発動!《攻撃の無力化》。攻撃を無効にしバトルフェイズを強制終了させる!」

「それにチェーンしてカウンター畏発動!《トラップ・ジャマー》。バトルフェイズに発動した畏カードの発動を無効にし破壊する!」

《時械神サンダイオン》が雷を《炎獄魔神ヘル・バーナー》に放つが、これもまたあっさり消え失せ、《炎獄魔神ヘル・バーナー》が炎を出す!《時械神サンダイオン》に当たる前に消えた。

「そして《時械神サンダイオン》の効果発動!このモンスターは戦

闘後、相手プレイヤーに4000ポイントのダメージを与える！」

「何！？ぐわああー！！！」

万丈目LP22000

《時械神サンダイオン》が放った雷が万丈目を直撃し、ライフを0にした。

「まさか、十代がE・HERO以外のデッキを使うとはな。」

「悪いな。まだ他のデッキもいくつか作っているところだ。」

「面白い。この七番目のデッキはE・HEROだけでなく複数のデッキにも対応できる様にする。そのデッキが完成したら本気で勝負だ！」

「いいぜ、俺もだ！」

三沢はいつたいどんなデッキを使うのか楽しみだ。

十代side out

第九話 予想外のデュエル、十代の第二のデッキ（後書き）

色んなデッキを使わせてみたいと思います。

第十話 冬休みの日常（前書き）

第十話です。短いです。

## 第十話 冬休みの日常

十代 side

万丈目とのデュエルがあつた後、いろいろなことがあつた。万丈目がアカデミアを出ていたり、ジュンコとももえがSALに誘拐され、俺がそのSALとデュエルしたり、《人造人間サイコショック》とデュエルしたりなどあつたりして、俺は冬休みを過ごしている。

で、俺は今自分の部屋にいる。何をしているかというとユベルとデュエルをしているんだけど、

【十代、早くしてよ。】

ユベルがせかしているのだが、何せ場が悪い。ユベルの場にはモンスターが《E HEROワイルド・サイクロン》と《E HEROマリシヤス・デビル》の二体、魔法、罫は伏せ二枚。対して俺の場にはモンスターはおろか、魔法、罫カードもない。ライフはユベルが4000だけどこっちはたったの400。

俺が先行で《E・HEROエアーマン》を召喚し、効果で《E・HEROクレイマン》を手札に加えカードを二枚伏せてターンエンドしたのだが、ユベルが《天使の施し》を発動し、《ダーク・フュージョン》で《ワイルド・サイクロン》を、《ダーク・コーリング》で《マリシヤス・デビル》を召喚した。ちなみに《マリシヤス・デビル》の融合素材は《マリシヤス・エッジ》と《ユベル》だった。一ターン目でこの展開はありか？



バトルは《ワイルド・サイクロン》で《エアーマン》が攻撃され、効果で伏せカードが破壊され、その後は《マリシヤス・デビル》に攻撃された。カードを二枚伏せてターンエンドなのだが、これ詰んでるよな？ 次の俺のターンでモンスターを召喚しても《マリシヤス・デビル》の効果で必ず攻撃しなければならぬし、魔法、罠カードを伏せても相手のバトルフェイズでは《ワイルド・サイクロン》の効果で使えなくなるし破壊される。今の俺の手札には罠カードは一枚あるけど《魔法の筒》、魔法カードは《ツイスター》と《O オーバースウル》の二枚。最初に伏せた二枚は《くず鉄のかかし》と《聖なるバリアーミラーフォース》だった。次のドロウでどうなるかが決まるな。

「俺のターン、ドロウ。」

俺はドロウしたカードを見た。よし、《命削りの宝札》だ、これで何とかなる！

【罠カード発動、《はたき落とし》。そのドロウしたカードを墓地に捨ててもらおうよ。】

「ちょ、ちよつと待てユベル!？」

【十代、待ったはなしだよ。】

そ、それはないだろ……。このデュエル俺の負けだな。

「……………お、俺はカードを一枚伏せてターンエンド。」

【僕のターン、ドロウ。バトル。《ワイルド・サイクロン》で十代に直接攻撃。《ワイルド・サイクロン》の効果発動。このモンスターが攻撃するとき相手はダメージステップ終了時まで魔法、罠を発

【 動することは出来ない。僕の勝ちだね。】

負けた。俺もまだまだだな。

【ユベルさん、強いですね。】

【今回は運が良かったからね。】

良すぎだろ。

「ユベル、伏せてあったもう一枚のカードは何だったんだ？」

【《神の宣告》だよ。】

「……………《はたき落とし》を使われなくても俺は負けてたのかよ。」

【そっだよ。】

強力なドロー補助カードが無効化されるとは、精神的に辛いよな。

【クリ〜。】

【十代、大丈夫か？】

「……………大丈夫だ。」

本当は大丈夫じゃないけどな。

こうして冬休みの一日が過ぎていった。

十代  
side  
out

**第十一話 偽者の逆襲、ジャック本人登場（前書き）**

第十一話です。噛ませを処分します。

## 第十一話 偽者の逆襲、ジャック本人登場

ユベルside

デュエルアカデミアは今冬休み、だいたいの生徒は家に帰っているけど何人かの生徒はアカデミアに残っている。十代はアカデミアに残っている。十代とデュエルしたり、テレビを見たりして冬休みを過ごしていた。

【暇だね。】

「確かにな。」

僕達は今は十代の部屋にいますが、暇だよ、何か起こらないかな。

【そういえば《ダークリゾネーター》は今頃どうしているんですしょうか？】

【確かに、《ダークリゾネーター》は大丈夫なのか？】

【クリ〜。】

そういえば確かアイツには《ダークリゾネーター》の精霊がいたんだよね。アイツには見えていなかったけど。

「助けたいけど、アイツは今どこにいるか分からないからな。」

【そうなんだよな。】

【クリ〜。】

《ダークリゾネーター》、君は不憫だね、と思っていた時だった。

「ん?」

【どうしたの十代。】

「メールが来てる。」

【本当だ、誰から?】

「え〜と、『遊城十代、今すぐ灯台に来い!待っているからな!』  
…だって、差出人は分からないけど。」

差出人が不明だなんて怪しいね。

「ちよっと思って行く。」

【僕も行くよ。】

【私も行きます。】

【俺も行くぜ。】

【クリ。】

十代が外に出て行って、僕達についていった。もちろん実体化はしていないけどね。

しばらくして僕達は指定された灯台についたけど、誰もいない。

「呼び出したのは一体誰なんだよ、あー、寒い。」

十代が寒がっている、早く出て来なよ。

「来たな、遊城十代！」

「お、お前は!？」

そんな声をして灯台の方を見ると影から何故かアイツが出てきた。

「お前は偽者！」

「誰が偽者だ!？」

「お前以外いないだろ！」

何でここにアイツがいるの？確かデュエルアカデミアを自分から退学した筈だよな？しかも、服が所々ボロボロになっているし。

「……成程、やっぱりな。」

「何がだ？」

「お前、俺と同じ転生者だろ。」

「……………そうだが。」

ちよ、ちよっと十代！それを言っただ大丈夫なの！？秘密にしたことでしょ！？周りに他の人がいないから良かったけど。

「何故遊城十代になってるんだよ！」

「……………十代として転生させられたんだよ。ところで、アカデミアに一体何の用だ？」

「お前を倒す、それだけだ！！」

「成程、分かった。」

「「デュエル！！」」

十代LP4000

偽者LP4000

「俺のターン、ドロ！。俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROフォレストマン》と《沼地の魔神王》を融合。来い！《E・HEROジ・アース》！さらに《E・HEROエアーマン》を召喚！効果で《E・HEROフェザーマン》を手札に加える。俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ。」

ジ・アースATK2500



エアーマン ATK1800

十代

モンスター エアーマン、ジ・アース

魔法、罫 伏せ二枚

十代はいつも通りだね。

「俺のターン、ドロー！」

さて、アイツはどう動くのかな？

「そんなモンスターなど蹴散らしてやる、俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！さらに魔法カード《サンダーボルト》を発動！お前のモンスターをすべて破壊する。」

「おい！《サンダーボルト》は禁止カードだろ！」

《サンダーボルト》は禁止カード、アイツ、勝つために手段を選ばなくなつたね。

「さらに魔法カード《ハーピィの羽根箒》を発動。お前の伏せカードをすべて破壊する！」

「《ヒーローシグナル》と《リミットリバーズ》が、てか《ハーピィの羽根箒》も禁止カードだろ！」

まずい、これじゃあ十代の場はがら空きだ！

「俺は《ダークリゾネーター》を召喚！」

ダークリゾネーター ATK1300

【はあ、何でこいつみたいなのに使われなきゃなんないんだよ。】

あ、《ダークリゾネーター》だ。見た感じ疲れきってるね。

「俺はレベル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《ダークリゾネーター》をチューニング！」

《ダークリゾネーター》が三つの輪になりその中を《バイス・ドラゴン》が通過した。

「王者の鼓動、今ここに列をなす、天地鳴動の力を見るがいい！」

5 + 3 = 8

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK3000

「バトル！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で直接攻撃！アブソリュートパワーフォー스！」

「うわあぁー！...！」

十代 LP4000 1000

偽者の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が十代に炎を放った。

【ユベルさん！十代さんが！】

【な、何で服が焦げているんだよ！】

何でダメージが実体化してるの！？これは闇のデュエルではないはず。もしかして、アイツはサイコデュエリストなのか？

「……………うう、ど、どうして、ダメージが？」

「俺のデュエルディスクはダメージを実体化させることができるんだよ！俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

偽者

モンスター レッド・デーモンズ・ドラゴン

魔法、罫 伏せ一枚

「……………そ、そんなことまでして、俺に勝ちたいのかよ、お前は。」

「俺はお前に勝てればいい、それだけだ！」

こいつ、デュエリスト失格だよ。

【……………十代。】

【クリ〜。】

「…へっ、このくらい大丈夫だ。俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《強欲な壺》を発動！カードを二枚ドローする。そして、《フレンドック》を守備表示で召喚！カードを一枚伏せて、ターンエンド。」

フレンドックDEF1200

十代

モンスター フレンドック

魔法、罫 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は永続罫《王宮のお触れ》を発動。このカード以外の罫カードの効果が無効にする！」

「くっ、《ガードブロック》が。」

「そして、《ランサーデーモン》を召喚！《ランサーデーモン》の効果発動！自分のモンスターに貫通能力を与えることができる。俺は《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を選択する！そしてバトル！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で《フレンドック》を攻撃！灼熱のクリムゾンヘルフレア！」

「うっ、うわぁー！！」

十代LP10000

十代のライフが0になった。

「ふん、終わりだな。」

「……………お前、こ、こんなことして、う、嬉しいのかよ……………」

「当たり前だ！お前に勝てたのだからな！今俺はデュエルアカデミア、いや、この世界最強のデュエリストだ！！」

何だよ、アイツ。一回勝ったくらいであんなこと言って。

「そういえばお前、俺のことを偽者と言ってたな。」

「……………そ、そうだが。」

「偽者はお前なんだよ！」

「……………お、俺が……………偽者……………」

「そつだー！」

「……………。」

十代が黙ってしまった。

「お前は最低なやつだな！アカデミアの全員を騙しているんだからな！おい、何か言ってみろよ！」

「……………。」

こいつ、言わせておけば!!

「あゝそうだよな。自分で騙していることを分かっているんだよな  
!!」

もう我慢の限界だ!こいつだけには僕の姿を見せたくなかったけど  
仕方ない!

【違う!十代は偽者なんかじゃない!!】

「お、お前はユベル!?何でここにいるんだよ!お前は宇宙に行っ  
たはずだろ!」

【悪いけど僕は宇宙には行ってないよ。】

「成程な、この偽者g【十代は偽者じゃないって言ってるだろ!!  
!】な、何を!?!」

「…………ゆ、ユベル。俺は…………。」

【十代、僕は十代が転生者で良かったと思ってるよ。こうしてみん  
なに会えたからね。】

十代の他に、翔や隼人、三沢に明日香、ハネクリボーにターボシン  
クロンにエフェクトヴェーラー達に会えたから僕は嬉しかった。仲  
間といることがこんなにも楽しいことが分かったからね。

「…………ユベル…………。」

【十代、君は君でしょ。】

【そうですね。十代さんは十代さんです！】

【アイツの言ってることなんか気にすんな！】

【クリ！】

「……………みんな……………」

僕の言葉に実体化したハネクリボー達が続く。

「《ハネクリボー》に《エフェクトヴェーラー》、それに《ターボシンクロン》の精霊だと！？そんな雑魚ばかりとは笑えるな！」

「……………俺の仲間は雑魚じゃない！」

「雑魚を雑魚と言って何が悪いんだよ！」

「……………成程、俺の偽者がこんなにも馬鹿とはな。」

え？この声ってまさか！？

「誰だお前は！」

「…本人か。」

ジャック・アトラス、確かに本人だね。でもどうしてここに？

ユベルside out

十代side

何でここに本人がいるんだ？ここは5D・sの世界ではないはずだよな、それにアイツのことを知っているみたいだ。

「何でお前がここにいるんだよ！？」

「お前を倒してくれと頼まれたのでな。」

「まあいい、この俺に勝てると思うなよ！」

「「デュエル！」「」

ジャックLP4000

偽者LP4000

「俺のターン、ドロー！俺は《マッド・デーモン》を召喚！カードを一枚伏せてターンエンドだ！」



マッド・デーモン ATK 1800

ジャック

モンスター マッド・デーモン

魔法、罾 伏せ一枚

「そんなモンスター、出したところで意味はねえよ！俺のターン、ドロー！ちっ、俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！そして《ダークリゾネーター》を召喚！」

バイス・ドラゴン ATK 2000 1000 DEF 2400  
1200

ダークリゾネーター ATK 1300

【また俺かよ！あゝ、もういやだ！何で俺だけこういつ目に会うんだよー！！】

…………… 《ダークリゾネーター》、後で必ず助けてやるからな……………。

「俺はレベル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《ダークリゾネーター》をチューニング！」

【俺は行きたくないよ！あつ、か、身体が勝手にー！！？】

……………。

「王者の鼓動、今ここに列をなす、天地鳴動の力を見るがいい！」

5 + 3 = 8

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！！！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK 3000

「《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で《マッド・デーモン》を攻撃！アブソリュートパワーフォー스！」

「この瞬間、《マッド・デーモン》の効果発動！このモンスターが攻撃対象になった時に守備表示にする。」

マッド・デーモン ATK 1800 DEF 0

《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が放った炎が《マッド・デーモン》を破壊した。

「お前じゃ俺には勝てねーよ！ターンエンドだ！」

偽者

モンスター レッド・デーモンズ・ドラゴン

魔法、罫 なし

身体中が痛いジャック本人に言わなきゃならないことがある。

「……気をつける！そいつは禁止カードを使うぞ！あと、ダメージ

が実体化するぞ！」

「お前、余計なことを言うんじゃないやねえよ!!!」

「……………成程な、俺のターン、ドロー！俺は《バイス・ドラゴン》を特殊召喚！さらに《トラスト・ガーディアン》を召喚！そしてレベル5の《バイス・ドラゴン》にレベル3の《トラスト・ガーディアン》をチューニング！」

《トラスト・ガーディアン》が三つの輪になり、その中を《バイス・ドラゴン》が通過した。

「王者の鼓動、今ここに列をなす、天地鳴動の力を見るがいい！」

5 + 3 = 8

「シンクロ召喚！我が魂、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK 3000

お互いの場に《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が現れた。

「おい！俺のまねすんな！」

「それはこっちの台詞だ！さらに俺は手札の《バリアリゾネーター》を捨て、《パワー・ジャイアント》を特殊召喚！このモンスターはレベル6だが手札のモンスターカード一枚を墓地に捨てることで特殊召喚できる。この効果で特殊召喚した場合、墓地に捨てたモンスターのレベル分のレベルが下がる。《バリアリゾネーター》のレベルは1、よって《パワー・ジャイアント》のレベルは5になる。」

パワー・ジャイアント ATK 2200 LV 6 5

「バトル！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で貴様の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を攻撃！」

「迎え撃て、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》！」

お互いの《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が殴り合うが偽者の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》だけが破壊された。

「なっ、何でお前の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》は破壊されないんだよ！」

「《トラスト・ガーディアン》をシンクロ素材としたシンクロモンスターは、一ターンに一度まで、戦闘によっては破壊されない。だが、攻撃力が400ポイント下がる。そして、《パワー・ジャイアント》で直接攻撃！」

「くっ！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK 3000 2600

偽者 LP 4000 1800

「俺はターンエンドだ！」

ジャック

モンスター レッド・デーモンズ・ドラゴン（攻撃力2600）、  
パワー・ジャイアント

魔法、罨 伏せ一枚

「ふざけやがって、俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《天よりの宝札》を発動！互いのプレイヤーは手札が六枚になるようにドロ―する。やつと来たか！俺は魔法カード《サンダーボルト》を発動！お前のモンスターをすべて破壊する。」

《サンダーボルト》がジャック本人の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》と《パワー・ジャイアント》を破壊した。

「そして魔法カード《死者蘇生》を発動！俺の墓地の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を墓地から特殊召喚する。バトル！《レッド・デーモンズ・ドラゴン》で直接攻撃！」

「ぐわぁー！！」

ジャックLP4000 1000

偽者の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》がジャック本人に攻撃した。

「……………くっ、どうやら、ダメージが実体化するのは本当のようだな。」

「俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ！」

偽者

モンスター レッド・デーモンズ・ドラゴン

魔法、罨 伏せ二枚

「俺の勝ちは決まりだな！さっさとサレンダーしろ！」

「……これくらいで勝った気でいるとは笑わせてくれる。」

確かに、ジャック本人はあきらめていない。むしろ楽しんでいる。

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間、永続罨発動！《王宮のお触れ》。このカード以外の罨カードの効果を無効にする！」

このタイミングで何でアイツは《王宮のお触れ》を発動するんだ？

「お前の伏せカードは罨カード《ロスト・スター・ディセント》だつてことは分かっているんだよ！俺のデュエルディスクは相手の伏せカードが分かるようにできているからな。」

「卑怯だぞ、それは！」

「勝てればいいんだよ！」

こいつ、どこまで卑怯な手を使う気だよ！

「フン、俺はお前の《王宮のお触れ》を墓地に送り、《トラップ・イーター》を特殊召喚！」

偽者の《王宮のお触れ》のカードが《トラップ・イーター》に食われた。

「何!」

「さらに《アタック・ゲイナー》を召喚!そして罫カード《ロスト・スター・ディセント》を発動!自分の墓地のシンクロモンスター一体をレベルを一つ下げ、守備力を0にし、守備表示で特殊召喚する!甦れ、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》!」

レッド・デーモンズ・ドラゴンDEF2000 0 LV8 7

この展開は、あのモンスターが来るな。

「どうやらモンスターを並べるだけで精一杯のようだな、俺のターン、……誰がターンエンドだと言った!」な、何だよ!《セイヴァー・デモン・ドラゴン》以上のシンクロモンスターなんかお前は持っていないだろ!」

えっ?この展開を知らないのかよ。

「見せてやろう、荒ぶる魂!バーニングソウル!俺はレベル7となつた《レッド・デーモンズ・ドラゴン》にレベル1の《アタック・ゲイナー》とレベル4の《トラップ・イーター》をダブルチューニング!」

《アタック・ゲイナー》と《トラップ・イーター》が5つの炎の輪になり、《レッド・デーモンズ・ドラゴン》が通過した。

「王者と悪魔、今ここに交わる。荒ぶる魂よ!天地創造の叫びをあ

げよ！」

7 + 1 + 4 = 12

「シンクロ召喚！いでよ、《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》！  
ジャック本人の場に禍々しい竜、《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》が現れた。」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK 3500

「な、何だよそのモンスターは！？俺は知らねーぞ！」

ま、まさかアイツ、《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》を知らないのかよ！

「《アタック・ゲイナー》の効果発動！このモンスターがシンクロ素材として墓地に送られた時、相手モンスター一体を選択し、このターンのエンドフェイズまで選択したモンスターの攻撃力を1000ポイントダウンさせる！俺はお前の《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を選択する！」

レッド・デーモンズ・ドラゴン ATK 3000 2000

「さらに《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》の攻撃力は墓地のチューナーモンスター一体につき、攻撃力を500ポイントアップする！俺の墓地のチューナーモンスターは四体、よって《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》の攻撃力は2000ポイントアップする！」

スカーレット・ノヴァ・ドラゴン ATK 3500 5500



「攻撃力5500!!（だが大丈夫だ。伏せカードは《炸裂装甲》、  
返り討ちだ!）」

「行くぞ、偽者!バトル!《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》で  
《レッド・デーモンズ・ドラゴン》を攻撃!バーニング・ソウル!  
!」

「畏カード発動!《炸裂装甲》。攻撃したモンスターを破壊する!  
お前は終わりだ!」

終わるのはお前だよ。

「甘い!《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》は相手の魔法、畏、  
モンスター効果によっては破壊されない。消え去れ、偽者!」

「うわぁーーーーー!!この俺がーーーー!!」

《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》が炎をまとい、《レッド・デ  
ーモンズ・ドラゴン》に体当たりし、そのまま偽者を焼き尽くした。

偽者LP18000

炎が消えるとアイツのカード以外消えていた。

「……貴様が遊城十代だな、お前に一つだけ言うておく。」

「……………何だよ。」

「お前はお前だ!」

ジャックは俺を指を差してそう言った。その後、腕の赤き龍の痣が光りジャックは光りに包まれて消えていった。

「……………俺は俺、か。」

そうだよな、俺は俺だ。俺はこの世界に転生した時から十代として生きていくと決めていたのを忘れていたよ、ありがとな。……………さてと、

「……………カード、拾っておこう。」

俺はアイツのカードを拾って中身を確認した。…だが、

「……………あれ？おかしいな？」

【十代、どうしたんだ？】

【クリ〜？】

「……………いや、……………ないんだ。」

【何がないんですか？】

「……………《ダークリゾネーター》のカードだけがないんだ！」

【え—————！！ほ、本当ですか！？】

「……………ま、まさか、……………《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》の攻撃で、アイツと一緒に……………」

【…不憫だね。】

確かに、不憫だな。

「……そうだ、みんな。」

【十代、どうしたの？】

「これからもよろしくな。」

【クリクリ。】

【はい。】

【ああ。】

【もちろんだよ。】

俺はこの時、仲間の大切さを改めて感じた。

十代 side out

おまけ

「そういえばアイツ、5D・Sはどこまで知っているか分かるか？」

【……え〜と、確か、WRGPでチーム5D・Sがチームカタストロフと戦った所と言っていたような気がする。】

「あゝ、だから《スカーレット・ノヴァ・ドラゴン》を知らない訳だ。」

## 第十一話 偽者の逆襲、ジャック本人登場（後書き）

ジャック本人はゾーンとの戦いが終わり、武者修行中にGXの世界に  
来た設定です。

番外編 霸王VS魔王+ (前書き)

番外編です。ユタさんの小説《遊戯王》幻想を抱きし者》より、  
なのはと転生者の暁高谷を出演させました。ユタさんから出演と痛  
めつける許可はもらっています。

## 番外編 霸王VS魔王+

冬休みのある日の出来事

十代 side

「……………はあ、なかなかこのカード達は癖があるな。デッキを組むのが難しい。」

【十代さん、考えこんでどうしたんですか？】

「あ、《エフェクトヴェーラー》か、今デッキを作っているんだけどな。」

【どんなデッキですか？】

「機皇帝デッキ。シンクロ召喚を使う転生者とかが現れてもいいよっにな。」

【あ、機皇帝って？】

【機械族のモンスターだよ。本体の（インフィニティ）、<sup>トップ</sup>アタック、<sup>ガード</sup>、<sup>キャラ</sup>、G、Cの五体のモンスターが合体するんだよ。三種類あって効果はパーツによって違うけど、の共通した効果は相手のシンクロモンスターを自分に装備することができる。いわば、シンクロモンスターを吸収するのさ。】

【つまり、対シンクロモンスターのモンスターってことだな。】

「そういつこと。」

こうすれば、シンクロモンスターに対して大丈夫だと思う。ただ、俺が転生者だってバレることは確実だけだな。ユベル、説明ありがとう。その後は悩みながらも何とか機皇帝デッキを三種類組むことができた。

その後、俺達は気分転換に海岸に来ていた。海風が気持ちいいと感じた。

【ねえ、実体化してもいいかな？】

「……………（小声）誰かが見ていたらどうするんだよ……………」

【そうだね、ごめん。】

今は冬休みだから生徒は少ないけど、ここでユベル達が見られたら大変だからな。そう思って少し歩こうとした時だった。

「止まりなさい！」

誰だよ、って思いながら後ろから声が出たので振り返ると、

「えっ！？十代君？」

何故か俺を見て驚いているのは（魔王）がいた。腕にはデュエルディスクをつけて、バリアジャケットだっけ？を展開していた。て



か、驚くのはこっちだよ！何でこの世界にお前がいるんだよ！

「何で俺の名前を知っているんだ？……てかお前は誰だよ。」

「わ、私は時空管理局の高町なのはです。あなたの持っているロス  
トロギアを渡して下さい。」

じ、時空管理局！？

「……………悪いけど俺はロストロギアっていう物は持っていない。」

「あなたの持っているカードから4つほど反応がありました。それは危険なんです！渡して下さい！！」

4つ？……………まさか、ユベル達がロストロギアだと！？

「……………何で渡さなきゃいけないんだよ。」

「それは危険な物なんです。私達、時空管理局がそれを保護し保管  
します。だからこちらに渡して下さい。」

「……………くだらない。」

「えっ？」

「くだらないって言ったんだ。だいたい、ロストロギアってなんだ  
よ。何の基準でロストロギアって決めつけるんだ？」

「そ、それは反応があったからです！」

……た、たったそれだけ？

「……俺が持っているカードのどこが危険なんだ？」

「そのカードは危険ですから早くこちらに渡して下さい！」

……話を聞けよ……。

「分かった。デュエルをしてお前が勝てたら渡してやるよ。だが、俺が勝ったら素直に諦めるよ。」

「わ、分かりました。」

さて、なのははどんなデッキを使うんだ？

(みんな、俺は絶対に勝つから安心してくれ。)

【分かったよ。】

【クリ〜。】

【頑張ってください。】

【絶対負けんなよ。】

「デュエル！！」

十代LP4000

なのはLP4000

「私の先行、ドロー。私は《神獣王バルバロス》を召喚！このモンスターは生け贄なしで召喚できるの。この効果で召喚した場合、元々の攻撃力は1900になるよ。」

神獣王バルバロス ATK 3000 1900

「私はカードを一枚伏せてターンエンドだよ。」

なのは

モンスター 神獣王バルバロス

魔法、罫 伏せ一枚

バルバロスか、ということはデメリットを消してくるパターンか？  
それとも、

「俺のターン、ドロー！俺は《グランド・コア》を召喚！」

グランド・コア ATK 0

「E・HEROじゃない!？」

悪いけど俺は他にもいくつかのデッキを持っている。てか、なのは別の世界の俺のことを知っているみたいだ。

「俺はカードを三枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター グランド・コア

魔法、罨 伏せ三枚

「（十代君がHERO以外のデッキを使うなんて驚いたの。でも、それなら勝てる！）：私のターン、ドロー！」「スタンバイフェイズに罨カード発動！《覇者の一喝》。相手はこのターン攻撃できない。」「私は《魔導騎士ブレイカー》を召喚！このモンスターが召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを一つのせるよ。そして《魔導騎士ブレイカー》の効果発動！このカードにのっている魔力カウンターを一つ取り除くことで相手の魔法、罨カードを一枚破壊するの。私は右の伏せカードを選択します！」

「チエーンして罨カード発動！《ボム・ブラスト》。自分フィールドの機械族モンスターを三体まで破壊し、破壊したモンスターの数×400のダメージを相手プレイヤーに与える。俺は《グランド・コア》を破壊する！」

「きゃー！！」

なのはLP4000 3600

《魔導騎士ブレイカー》が俺の伏せカードに魔法を放つが、その前に伏せカードが発動して《グランド・コア》が爆発し、その爆風がなのはに当たった。

「じ、自分のモンスターを破壊したの！？」

「そしてこの瞬間、《グランド・コア》の効果発動！このモンスターがカード効果によって破壊された時、自分フィールドのモンスターをすべて破壊し、自分の手札、デッキ、墓地より、《機皇帝グラ

ンエル』、《グランエルT》、《グランエルA》、《グランエルG》、《グランエルC》を特殊召喚できる！俺はデッキから特殊召喚し、そして、合体し現れる、《機皇帝グランエル》！！！」

俺の場に五個のパーツが現れ合体し、《機皇帝グランエル》となった。

「《機皇帝グランエル》の攻撃力は自分のライフと同じ数値になる。よって、《機皇帝グランエル》の攻撃力は4000になる！」

機皇帝グランエル ATK 4000

「こ、攻撃力4000！！！」

攻撃力4000は確かに高いほうだが、5D・sでは《機皇帝グランエル》は攻撃力20000になったことがあるぞ。

「わ、私は魔法カード《二重召喚》を発動します。私はチューナーモンスター《カオスエンドマスター》を召喚！」

カオスエンドマスター ATK 1500

チューナーモンスター、ということはシンクロ召喚か！

「私はレベル4の《魔導騎士ブレイカー》にレベル3の《カオスエンドマスター》をチューニング！外套に刻まれしは大魔術師の証！悪を貫くは魔力の弾丸！シンクロ召喚！打ち砕いて、《アーカナイト・マジシャン》！」

アーカナイト・マジシャン ATK 400

やっぱりシンクロ召喚を使ってきたか。それより、魔法の法って法律の法であっているよな？砲撃の砲に見えたのは俺だけか？

「《アーカナイト・マジシャン》の効果発動！このモンスターがシンクロ召喚に成功した時、このカードに魔力カウンターを二つつけるよ。《アーカナイト・マジシャン》はこのカードにのっている魔力カウンター1つにつき攻撃力が1000ポイントアップするの。」

アーカナイト・マジシャン ATK400 2400

「（攻撃できないし、伏せカードが気になるの。《アーカナイト・マジシャン》の効果を使いたいけど攻撃力は下げたくない。）…私は魔法カード《魔力掌握》を発動します。魔力カウンターをのせることが出来るカードに魔力カウンターを一個のせ、その後同名カードを手札に加える。私は《アーカナイト・マジシャン》にのせます。カードを一枚伏せてターンエンドだよ。」

アーカナイト・マジシャン ATK2400 3400

なのは

モンスター 神獣王バルバロス、アーカナイト・マジシャン

魔法、罨 伏せ二枚

さてと、フェイトやはやて達が来る前に終わらせないと。いろいろとややこしくなるし。

「俺のターン、ドロー！伏せてある魔法カード発動！《大嵐》。フィールド上の魔法、罨カードをすべて破壊する！」

「《魔法の筒》と《聖なるバリアーミラーフォース》が!!」

「バトル! 《機皇帝グランエル》で《アーカナイト・マジシャン》を攻撃! グランド・スローター・キャノン!」

「あ、《アーカナイト・マジシャン》が!!」

なのはLP3600 3000

《機皇帝グランエル》に合体している《グランエルA》のキャノン砲からレーザーが発射され、《アーカナイト・マジシャン》を攻撃した。

「《グランエルA》の効果発動! と名のつくモノスターがシンクロモンスターを戦闘によって破壊した時、そのシンクロモンスターを装備する!」

《機皇帝グランエル》の本体の の部分が開き、中から光の触手が飛び出し、《アーカナイト・マジシャン》を捕まえて、自分の中に閉じ込めた。

「そんな!!」

「そして、《機皇帝グランエル》は装備しているシンクロモンスターの元々の攻撃力分、自分の攻撃力がアップする!」

機皇帝グランエル ATK4000 4400

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター 機皇帝グランエル、T、A、G、C

魔法、罨 伏せ一枚、アーカナイト・マジシャン（装備カード扱い）

「私のターン、ドロー！私は魔法カード《ライトニング・ボルテックス》を発動します。手札を一枚捨てて、相手モンスターをすべて破壊します！」

逆転の一手か、だが、容赦はしない！

「カウンター罨発動！《マジック・ジャマー》。手札を一枚捨て、魔法カードの発動を無効にし破壊する！」

次のターンで終わるな。

「……わ、私は《神獣王バルバロス》を守備表示に変更して、ターンエンド。」

なのは

モンスター 神獣王バルバロス

魔法、罨 なし

「俺のターン、ドロー！バトル！《機皇帝グランエル》で《神獣王バルバロス》を攻撃！グラント・スローター・キャノン！」



《機皇帝グランエル》が《神獣王バルバロス》にレーザーを放ち、破壊した。

「《グランエルA》の効果発動！ と名のつくモンスターが守備表示のモンスターを戦闘によって破壊した時、もう一度攻撃することができる。とどめだ！ 《機皇帝グランエル》で直接攻撃！ グランド・スローター・キャノン！」

「ぎゃあああー！！」

なのはLP30000

《機皇帝グランエル》が攻撃して、なのはのライフを0にした。

「……………さてと、約束通り諦めてもらっぞ。」

俺がそう言うとなのはは俺にデバイスを向けてきた。

「どっいつつもりだ？」

「あ、あなたを公務執行妨害、及びロストロギア不法所持の罪で拘束しますー！！」

……………呆れた。約束は守らない、公務員でもないのに公務執行妨害って言う、ロストロギアは持っていないのに不法所持、おまけに非殺傷という名の暴力……………

……………もっいいい。

(……………ユベル、モンスターを実体化させてくれ。)

【(霸王モードになる寸前まで来てるね。これは容赦はしないみただ。)…分かったよ。どのモンスターがいい?】

(……ユベルに任せる。)

十代 side out

ユベル side

さてと、どのモンスターを実体化させようかな?

【………十代さん、霸王モードになったんですか?】

【なりかけてるんだよ。ところで、どのモンスターを実体化させる?】

【俺は何でもいい。とにかく強い奴であいつをぶっ飛ばしたいんだ!】

【クリ!】

【私もです!】

【みんなも? ……よし、これかな。十代、決めたよ。】

(……ああ。)

僕が選んだモンスターを実体化させようとした時だった。

「なのは！大丈夫か！」

「高谷君！」

いつの間にか変な男がなのはの隣に現れていた。あれ？何か変な感じがする。

「……転生者か。」

高谷って奴も転生者なんだね。

「なのは、ここは俺にまか……せ……ろ……。」

「どうしたの、高谷……くん……。」

二人とも十代を見て怯え出してるね。

(……ユベル。)

【分かってるよ。現れる！《E・HEROフレイム・ウィングマン》！《E・HEROアブソルトZero》！《E・HEROマリシヤス・デビル》！《時械神サンダイオン》！《機皇帝グランエル》！】

さてと、これくらいでいいかな。ちなみに《機皇帝グランエル》は全てのパーツと合体しているから。

「じ、十代だと！それに、き、機皇帝に時械神……！」

「……お前達、おとなしく帰るなら攻撃はしない。……どうする？」

二人とも、まだ間に合うよ。

「誰が帰るか!!」

.....あ、何かスイッチが入った音がした。終わったね、あいつら。

「.....攻撃。」

二人が逃げようとしてるけど逃がさないよ。

【畏カード二枚発動!《デモンズ・チェーン》。】

「なんだこれ!」

「う、動けない!」

二人は飛んで逃げようとするが鎖が二人を拘束した。攻撃がもう少しで当たるね。

「ぎゃああああああああああああああああああああ!!」

!.....!!」

数分後

攻撃が終わって二人を見るとあちこち傷だらけで、高谷は気絶していた。非殺傷？なにそれ？死なないように本気は出さなかったから大丈夫。本気を出せばあいつらなんか消せるけど僕が疲れるから。

「…………おい、まだやるか？」

「ひい！！ごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさいごめんなさい！！！！！！」

この後、二人は消えた。絶対トラウマになったね、あれは。

「ふう〜、帰ったか。俺達も帰るとするか。」

【そうだね。】

ユベルside out

番外編 霸王VS魔王+ (後書き)

ユタさんの小説《遊戯王》幻想を抱きし者》も面白いので読んでみて下さい。

## 第十二話 テツキ盗難事件VS神楽坂（前書き）

第十二話です。いつの間にかお気に入り登録が300件を越えていました。これからも頑張って書いていきますのでよろしくお願います。

## 第十二話 デッキ盗難事件VS神楽坂

十代 side

いろいろあつた冬休みが終わり、アカデミアが始まった。明日は武藤遊戯のデッキの展示会。で、俺は今、どこにいるかというところ、

「アニキ、いいのかな？こんなことして。」

「大丈夫だ、明日の朝は混むし、今の時間ならデッキは展示されているはずだ。」

「なんか、楽しみなんだな。」

俺は翔と隼人と一緒に展示室の近くにいます。フライングでデッキを見ようとしていた。以前あのデッキを作って回してみたが、難しかった。種族や属性やバラバラだったりとか。まあ、遊戯さんが一生懸命考えて組んだデッキだから俺は何とも言えないけど。ちなみに俺は《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》のカードは持っている。

「あら、あなた達も来ていたのね。」

「あ、明日香さんにお兄さん。」

俺達が話していると、明日香と亮が出てきた。

「ここに来たということは、考えていることは二人も同じか。」



「ああ、そつだ。」

「みんな、考えていることは同じなんだな。」

まあ、明日は混むし、ゆっくり見ることができなさそつからな。と、思っていたら、

「マンマミ〜ヤ〜!!」

「今の声は!?!」

「クロノス先生の声だ!」

展示会場からクロノスの悲鳴が聞こえた。……つてあれ?

「三沢君、いつからそこに?」

「いたよ!明日香とカイザーと一緒に!」

「いたの?私は気づかなかつたわ。」

「済まない。俺も気づかなかつた。」

「俺もなんだな。」

「……………」

……………三沢、落ち込むな。……………元気になるまで放っておこう。三沢

を置いて展示会場に入ると割れたガラスケースとクロノスがいた。

「クロノス先生！どうしてここに！？」

「ガラスケースが割られているわ！」

「あーデッキがないんだな！」

「……まさか、クロノス教諭が！？」

「ち、違うノーネ！私じゃないノーネ！！」

この状況では真っ先に疑われるのは確実だな。まあ、身から出た錆だな。でも仕方ないから助けるか。

「……クロノス先生、ガラスケースの鍵は持ってますか？」

「か、鍵ならここにあるノーネ。」

「鍵を持っているクロノス先生ならこんな荒っぽいことはしない。」

「じゃあ、誰が……。」

「みんなで探そう！」

「まだ近くにいるはずだ！クロノス先生はこの部屋の付近をお願いします。」

「……わ、分かりましたノーネ。あなた達だけが頼りでスーノ。」

あ、三沢が復活した。回復するのが早いな。その後、俺達は別れて犯人探しをした。

【十代、どこだったか覚えてないの？】

「海の近くだったことは覚えているんだけど、同じところがたたくさ  
んあるから探さないと分からない。」

【確かにそうだな。】

しばらく探したが見つからなかった。何でこういう時に限って思い  
出せないんだよ！

【十代さん。こうなったらしらみ潰しに探しましょうー！】

「……………いや、今やってるからな。」

早くしないと大変なことになる。そう思って走ろうとした時だった。

「うわぁー！ー！ー！！」

こゝこの声はまさか！？

【今の声って！？】

「翔の声だ！あっちだ！」

俺は声のした方へ走った。

俺が着いた時には、落ち込んでいる翔と高笑いしている神楽坂がいた。手遅れだったか……。

「翔、大丈夫か！」

「……………あ、アニキ！ごめん、犯人を見つけたんだけど……………」

「ああ、大体分かった。」

翔が神楽坂を見つけて、デッキを取り返すためにデュエルしたが負けたみたいだ。

「これが俺の求めていたデッキだ！このデッキさえあれば武藤遊戯のデュエルを100%再現できる！俺は最強だ！」

神楽坂がなんか言っているが、あいつは自分が何をしているのかが分かっていないようだ。目を覚まさせるには勝つしかない。

「神楽坂、俺とデュエルしろ。俺が勝ったらそのデッキをおとなしく返してもらっぞ。」

「この俺に勝てるのか？」

「あ、アニキ無理だよ！いくらアニキでもあのデッキには勝てないよー！」

「……………大丈夫、勝てるさ。他人のデッキを盗んで勝った奴なんか

に、俺は負けない！」

俺は俺の信じたデッキで勝つ、それだけだ！！

「デュエル！！」

十代LP4000

神楽坂LP4000

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROエアーマン》を召喚！効果で《E・HEROザ・ヒート》を手札に加える。カードを一枚伏せてターンエンドだ。」

エアーマンATK1800

十代

モンスター エアーマン

魔法、罫 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《幻獣王ガゼル》と《バフォメット》を融合。出でよ、《有翼幻獣キマイラ》！」

有翼幻獣キマイラATK2100

1ターン目からいきなり正規融合か、俺も人のこと言えないけど。

「バトル！《有翼幻獣キマイラ》で《エアーマン》を攻撃！」

《有翼幻獣キマイラ》が《エアーマン》に体当たりして破壊した。

十代LP4000 3700

「くつ、だが、この瞬間罫カード発動！《ヒーローシグナル》。《E・HERO》と名のつくモンスターが戦闘によって破壊された時、デッキからレベル4以下の《E・HERO》と名のつくモンスターを一体特殊召喚する。俺は《E・HEROオーシャン》を特殊召喚  
！」

オーシャンATK1500

「俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ！」

神楽坂

モンスター 有翼幻獣キマイラ

魔法、罫 伏せ二枚

「アニキ！」

「翔、俺は大丈夫だ。俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《オーシャン》の効果発動！フィールドか墓地のHEROと名のつくモンスターを一体、手札に戻すことができる。俺は墓地の《E・HEROエアーマン》を手札に戻す。俺は《エアーマン》を召喚！効果発動！自分フィールドのこのカード以外のHEROと名のつくモンスターの数だけフィールド上の魔法、罫カードを破壊することができる。俺のフィールドには《E・HEROオーシャン》が存在する。俺は左の伏せカードを破壊する！」

《エアーマン》が起こした風が神楽坂の伏せカードを破壊した。：  
……《魔法の筒》だったか、危なかった。

「魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札を一枚墓地に送りデッキからレベル1のモンスターを一体特殊召喚する。俺はデッキから《ターボシンクロン》を特殊召喚する！」

ターボシンクロン ATK100

【十代、あいつが犯人か！】

（そうだ。）

【……………で、俺は何をすればいいんだ？……………十代はシンクロは使わないんだろ。】

（ああ、だけどお前の力を貸してくれ！）

【分かったぜ！】

「そんなモンスターを出してどうするつもりだ？」

「こつするのさ、俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROザ・ヒート》とフィールドの《ターボシンクロン》を融合。  
来い！《E・HERO Great TORNADO》！」

Great TORNADO ATK2800

「《Great TORNADO》の効果発動！融合召喚に成功した時、相手フィールドに存在する全てのモンスターの攻撃力と守備

力を半分にする。タウンバースト！」

「何だと!?!」

下降気流が発生し、《有翼幻獣キマイラ》の動きが鈍くなった。

有翼幻獣キマイラ ATK 2100 1050

「バトル! 《Great TORNADO》で《有翼幻獣キマイラ》を攻撃! スーパーセル!」

「くっ!」

神楽坂 LP 4000 2250

「だが、この瞬間《有翼幻獣キマイラ》の効果発動! 墓地の《幻獣王ガゼル》か《バフォメット》を特殊召喚できる! 俺は《バフォメット》を守備表示で特殊召喚する!」

バフォメット DEF 1800

「プレイングミスしたか……、先に《エアーマン》か《オーシャン》で《有翼幻獣キマイラ》を攻撃すれば良かったな。まあいいか。」

「俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター Great TORNADO、エアーマン、オーシヤン



魔法、罨 伏せ二枚

「俺のターン、ドロー！俺は《バフォメット》を生け贄に《ブラック・マジシャン・ガール》を召喚！」

ブラック・マジシャン・ガール ATK2000

「ぶ、《ブラック・マジシャン・ガール》だ！………どうしよう、僕、アニキには勝って欲しいけど、……あっちを応援しようかな……」

翔、お前はどっちの味方なんだよ！！

「さらに魔法カード《賢者の宝石》を発動！デッキから《ブラック・マジシャン》を特殊召喚する！」

ブラック・マジシャン ATK2500

《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》、良く出したな。

「俺は伏せてある魔法カード《千本ナイフ》を発動！このカードは自分フィールド上に《ブラック・マジシャン》が存在する時に発動することができる。相手モンスターを一体破壊する。《Great

TORNADO》を破壊する！」

《ブラック・マジシャン》の周りに現れたナイフが《Great TORNADO》を貫き破壊した。

「バトル！《ブラック・マジシャン》で《エアーマン》を、《ブラ

ツク・マジシャン・ガール』で『オーシャン』を攻撃！ブラック・マジック！ブラック・バーニング！」

「くっ、うわぁ！」

十代LP3700 2500

「俺はターンエンドだ！」

神楽坂

モンスター ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン・ガール

魔法、罫 なし

まずいな、……だけと諦めたりはしない！

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード『命削りの宝札』を発動！手札が五枚になるようにドローする。五ターン後に手札を全て墓地に送る。俺には手札はない、よって五枚ドローする！」

「ここで強力な手札補助カードだと!？」

自分でも驚いたよ。まさかここで来るとは思っていなかったからな。

「俺は魔法カード『強欲な壺』を発動！デッキからカードを二枚ドロウする。そしてカードを一枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター なし

魔法、罨 伏せ三枚

ここが正念場だ。

「俺のターン、ドロー！バトル！《ブラック・マジシャン》で直接攻撃！」

「この瞬間、手札の《バトル・フェーダー》を効果発動！このモンスターは相手が直接攻撃した時に手札から特殊召喚できる。そしてバトルフェイズを強制終了させる。」

バトル・フェーダー ATK0

《ブラック・マジシャン》が魔力を自分の杖に集中させるが、俺の場に《バトル・フェーダー》が現れ鐘をならし、《ブラック・マジシャン》が魔力を集中させるのを中断した。

「くそっ！ターンエンドだ！」

神楽坂

モンスター ブラック・マジシャン、ブラック・マジシャン・ガール

魔法、罨 なし

「……………神楽坂、言い忘れたがお前が遊戯さんのデッキを使っても最強にはなれない。」

「どついう意味だ！俺は武藤遊戯のデュエルを研究しつくしている。」

「このデッキがあれば俺は最強なんだ！」

……………分かっていないな。

「それはお前のデッキではないからだ！そのデッキは遊戯さんが悩んで、考えて、いろんなことを乗り越えてできたデッキだ！お前が使っても本来の力は発揮できない！」

「ならば、俺に勝ってみろ！」

「勝つてやるよ、俺のターン、ドロー！永続罫発動、《リミットリバース》。俺は墓地の《E・HEROフェザーマン》を攻撃表示で特殊召喚する！」

フェザーマン ATK1000

「そんなモンスター、いつの間に墓地に送ったんだ!？」

「《ワン・フォー・ワン》の時だ。そして罫カード発動！《ギブ&テイク》。俺は墓地の《E・HEROオーシャン》をお前のフィールドに守備表示で特殊召喚し、《フェザーマン》のレベルをエンドフェイズまで《オーシャン》のレベル分アップする。」

フェザーマン LV3 7

「何がしたいんだ!？」

「面白いものを見せてやるよ、俺は速攻魔法《超融合》を発動！手札を一枚墓地に送り、自分フィールドのモンスターと相手フィールドのモンスターを融合する。俺は俺のフィールドの《フェザーマン

《とお前のフィールドの《オーシャン》を融合！来い、《E・HE ROアブソルトZero》！」

「あ、相手モンスターを融合素材に！まさか、このために自分のモンスターを！？」

《超融合》は使いづらいが、《アブソルトZero》や《ガイア》などの比較的融合素材の縛りが緩い融合モンスターを融合召喚するには使いやすい。

アブソルトZero ATK2500

「そして《アブソルトZero》を生け贄に《ターレット・ウォーリアー》を特殊召喚！」

俺のフィールドの《アブソルトZero》が消え、《ターレット・ウォーリアー》が現れた。

ターレット・ウォーリアー ATK1200

「《ターレット・ウォーリアー》は戦士族モンスターを一体生け贄にすることで手札から特殊召喚できる。そして、生け贄にした戦士族モンスターの元々の攻撃力分、《ターレット・ウォーリアー》の攻撃力がアップする！」

ターレット・ウォーリアー ATK1200 3700

「そして、《アブソルトZero》の効果発動！このカードがフィールドから離れた時、相手フィールドのモンスターを全て破壊する！」

神楽坂のフィールドの《ブラック・マジシャン》と《ブラック・マジシャン・ガール》が凍りつき破壊された。

「……………さよなら、《ブラック・マジシャン・ガール》……………」

……………進めよう。

「バトル！《ターゲット・ウォリアー》で直接攻撃！」

「俺は手札の《クリボー》の効果発動！このカードを墓地に送り、この戦闘によって発生するダメージを0にする！」

「させるか！畏カード発動《威風堂々》。バトルフェイズに発生したモンスター効果の発動を無効にし破壊する！」

「うわぁー！！！」

《ターゲット・ウォリアー》が肩にあるバルカン砲で神楽坂を攻撃した。

神楽坂 LP 2250 0

「……………負けた。……………強いデッキを使っても俺は勝てないのか……………。俺には才能がないんだ。」

「……………そのデッキは遊戯さんが使っただけ、真の力を発揮することができない。お前はただ遊戯さんの真似をしているだけだ。それはお前の本当の強さじゃない。」

「俺の……、本当の強さじゃない……。」

「ああ、でもあのデッキをあんなんにも使えたのはすごかったぜ。俺でも難しかったからな。………ところで、いつまで隠れているつもりだよ。」

俺がそういうと明日香や三沢、亮に他の生徒達や先生達が出てきた。

「なんで止めなかったんだ？」

「止めるには惜しかったデュエルだったからな。」

「………確かにな。」

その後、神楽坂はデッキを盗んだことを謝り、校長先生は許してくれた。

「そつえば十代、ひとつ気になったんだが。」

「三沢、どうした？」

「あのデッキを使ったことがあるのか？」

「あるぞ。あと、《ブラック・マジシャン・ガール》のカードは一枚持ってるから………あ。」

し、しまった！！口が滑った！！

「本当か！？俺のカードと交換してくれ！」





「…あの、大徳寺先生。部屋に戻ってm「ダメですよ！」……  
ですよね。」

口は禍の元、だな。あ、言わなきゃよかった！

【すごい熱気ですね。】

【クリ。】

もういい、どうにでもなってくれ。

「……………不幸だ。」

そう眩くしかできなかった。ちなみにトーナメントを優勝したのは  
神楽坂だった。後でどんなデッキを作るのか聞いたら、

「自分にしか出来ないデュエルが出来るようなデッキを作ってみせ  
る！」

と言っていた。

十代 side out

第十二話 テツキ盗難事件VS神楽坂（後書き）

最後の方は面白そうだったので書いてみました。

**第十三話 恋する乙女の登場（前書き）**

第十三話です。今回はデュエルはありません。

## 第十三話 恋する乙女の登場

十代 side

俺は今、レッド寮の食堂にいる。大徳寺先生から編入生がレッドに来たと言っていたが、確かレイが亮に会いたいがために男の格好をしてアカデミアに来るんだよな。で、今は大徳寺先生から紹介されているところだ。

「この度、編入テストを受けてオシリスレッドに編入してきた早乙女レイ君だにゃ。」

「……………」

大徳寺先生がレイのことを紹介するがレイは黙っている。まあ、あまり喋ると自分が女の子だってバレる可能性が高くなるからな。

「女の子みたいに綺麗なこなんだな。」

「そうだね。」

隼人、女の子みたい、じゃなくて正真正銘女の子だからな。って、今レイが女の子だって分かっているのは俺だけか。

【十代さん、あのレイって子は男の子ではないですよね。】

（そうだ。）

「……………レイ君。十代君を見てどうしたんだにゃ〜？」

「あ、い、いえ、何でもありません。」

何で俺のことを見ていたんだ？……………まあ、別にいいけど。そのあとは何事もなく進んでいった。レイは翔達の部屋に泊まることになった。

時間は飛んで次の日の夜、昼間は全校集会があり、校長先生からノース校との友好デュエルがあることを告げられた。このままでいけば亮が選ばれるけど辞退して俺と三沢がデュエルして代表を決めることになるはずだ。

【僕は十代なら選ばれると思うよ。】

まあ、選ばれたなら選ばれたで頑張るしかないけど。

【選ばれたとしたらどのデッキで行くんだ？】

「俺が信じるデッキだ。」

【クリ。】

さてと、デッキの調整でもしますか。

【……………十代さん、レイさんが部屋を出ましたよ。】

「…本当か？分かった。」

俺は部屋を出た。

俺はブルー男子寮の近くで隠れているレイを見つけた。

「レイ、こんなところで何してるんだ？」

「十代！な、なんでここに！？」

「レイが部屋を出たのを見ていたから気になってな。」

レイが動揺しているな、なんか見えていて面白い。

「じ、十代には関係ないだろ。」

男の子の口調で話しているが俺には無理をしているのが分かるんだよね。

「……………全く、こんな時間にブルーの男子寮に入ろうなんて変な趣味してるな。それでも男か？」

「ぼ、ボクは男じゃない！！あ！」

自分から男じゃないって言ったな、今。

「……やっぱりな、道理でなんか変だと思ったよ。」

「……いつから気づいていたの？」

「最初っから。」

本当のことだ。レイが驚いているが気にしない。そのあとはレイの話聞いた。やっぱり亮に会いたくてアカデミアに来たみたいだ。

「……全く、自分が何をしているのか分かっていいるのか？親とか友達とかが心配しているんじゃないのか。いくら子供だから、恋だからってやっていいことと悪いことがあるぞ。」

「……うう、ごめんなさい。」

「ごめんなさいで済めば警察も裁判所も拘置所もいらない。」

【…拘置所は別にいいんじゃないのか？】

【その前に裁判所も別にいいと思います。……それよりも十代さん、そろそろ許してあげた方がいいと思いますよ。】

（そっだな。）

そろそろ可哀想になってきたし許してやるか。

「レイ、これくらいにしておくから反省しておけよ。」

「……うん、分かったよ。」

さてと、レッド寮に戻るとするか。

「ねえ、十代。」

「レイ、どうした?」

「さっきから気になっていたんだけど、十代の肩の辺りにいるのって誰?」

えっ?まさか!?

「まさかレイもみんなが見えるのか!?!」

「うん。」

……………マジかよ、まさかレイがカードの精霊を見ることができるなんてな。

「紹介しておくよ、ユベルとハネクリボーとエフェクトヴェーラーとターボシンクロンだ。」

【クリ〜。】

【よろしくな。】

【はじめまして。】

【よろしく。まさか十代の他に僕達が見えるなんて驚いたよ。】

後で万丈目も精霊が見えるようになるからな。



「そういえば、レイには精霊はいるのか？」

「いや、いないよ。」

「そうか、それよりレッド寮に戻ろうぜ。」

「うん、分かった。」

十代 side out

レイ side

まさかボクが女の子ってバレるとは思ってもしなかった。でも十代は、次の定期船で帰ることを条件にそれまではみんなには黙っていてくれるって言うてくれた。……………でもなんだろう、十代がかっこよく見える。

「《恋する乙女》は光属性で魔法使い族だからこのカードを中心として行くなら……………、《魔導騎士ディフェンダー》の効果は使えるし、表側攻撃表示では戦闘によっては破壊されないから、《魔法族の里》の効果で相手に魔法カードを使わせないことも簡単にできる。ただ、攻撃力が低いから《レインボーライフ》などのライフを回復するカードも入れておいた方がいいし、魔法使い族で行くなら《マジシャンズ・ヴァルキリア》の二体でロックもできるし、魔力カウンターを貯めたいなら《魔法都市エンデュミオン》や《魔力掌握》、《漆黒のパワーストーン》のカードが使える。それに《魔導騎士ブレイカー》や《神聖魔導王エンデュミオン》はアタッカーになるし、《ディメンション・マジック》とかで特殊召喚が可能だし、

自身の効果で相手フィールド上の魔法、罠カードを破壊することができる。他には、……………どうしたんだ？」

「……………え、な、なんでもないよ。」

今は十代の部屋にいる。ボクのデッキを見せて、ボクのデッキに合  
いそうなカードをボクに見せてくれた。

「ねえ、十代って本当にオシリスレッドなの？」

「そうだけど、俺がレッドじゃいけないのか？」

「いや、別に……………」。

十代ならプロのデュエリストにも勝てる気がするのはボクだけかな  
？それより、

「こんな珍しいカードをたくさんもらっているの？」

「大切に使うてくれればそれでいい。……………そうだ、あとこれも  
やるよ。」

十代が渡してくれたカードを見てみた。……………ってこれは！？

「こ、こ、こ、これって、ぶ、《ブラック・マジシャン》！？」

「レイ、声大きい。」

「い、い、い、い、い。」

な、なんで十代が《ブラック・マジシャン》を持ってるの！？確かこれって武藤遊戯しか持っていない筈だよ。本当に十代って何者なのかな？

「あ、ありがとう。」

……………十代なら《青眼の白龍》も持っているのかも。

「ちなみに《青眼の白龍》は持っていないからな。」

「ええ！？何で分かったの？」

「そう思ってると思ったから。」

そ、そうなんだ……………。

「ボクはそろそろ部屋に戻るから。」

「ああ、分かった。」

そう言っただけで部屋に戻った。……………十代、カッコいいし優しかったな。

レイside out

ユベルside

レイが部屋に戻っていったあと、気になることがあった。

【十代。】

「ユベル、どうかしたのか？」

【レイは十代に惚れたのかもね。】

「……………本当か？まあ、確かに顔が少し赤かったなような気がする。

【十代、これだけは言っておくよ。】

「何だよ。」

【十代が誰かを好きになるのなら僕は誰でもいいけど、一緒に寝ることだけは譲らないからね。】

「それかよ。まあ、自重はしてくれよ。」

十代が誰かを好きになるのは僕にはどうすることもできないけど、それだけは譲れないことだ。でも、十代が困らない範囲でね。

「……………眠いし寝るか。」

【そうだね。そういえばさ、《ブラック・マジシャン》のカードはあれだけだったの？】

「……………探したら二枚あった。あとの一枚は後で神楽坂にあげるか。

【《ブラック・マジシャン・ガール》は？】

「あれだけ。」

まあ、もう一枚あることがアカデミアに知れたら大変なことになるね。そんなことより早く寝よう。もちろん十代と一緒にね。

翌日

レイが部屋に訪ねてきた。どうやら精霊がいたみたいだ。

「《カードエクスクルーター》と《マジシャンズ・ヴァルキリア》か。」

【うんっ、よろしくね〜。】

【…よろしく。】

精霊ってたくさんいるんだね。

【あのね、レイはね〜、じゅうだいのことがすきになったんだよ〜。】

「ちよ、ちよっど!?!?」

【…駄目でしょ、マスターを困らせてはいけないって言ったでしょ。

】  
【だって〜、ほんとうのことだもん。】

【…全く。】

こう見ると二人は姉妹だね。物静かな姉と天真爛漫な妹って感じの。

「十代、ボクは……………」

「……………分かってるよ。」

何かいい雰囲気だね。

「……………今度はきちんと受けてくるから、待っててね。」

「……………あ、ああ、待ってるからな。」

【アツアツでラブラブだ〜。】

【…お仕置き。】

グリグリグリグリグリグリ。

【いたいたいいたいたい〜い！やめて！あたまグリグリはいたいたいからやめて〜！】

【…私は痛くないから大丈夫。】

グリグリグリグリメキョゴリグキグリ。

【メキヨとかゴリとかいってるよ～～～！～！～！】

【…気にしない。】

……………凄く痛そう。

「ヴァルキリア、そこまでにしてあげて。」

【…はい。】

【うう～～～、頭が痛いよ～～～。】

せねせね。

「……………いっぱい勉強して早く来れるようにするから。」

「……………レイなら出来るぞ。」

こっちはいい雰囲気だね。

【二人きりにさせてあげようぜ。】

【そっぴすね。】

【クリ～。】

【…どこに行くの？】

【外にだよ。】

【あたまいたい〜、あ、まってよ〜。】

ユベルside out

十代side

数日後、レイが戻る日が来た。少し名残惜しいが仕方のないことだ。でも、レイなら本当に早く来れそうだ。で、今は翔や明日香達とレイを見送っている。二人きりになった時に俺が「亮に会わないのか？」と聞いたら、「ボクは十代がいいの！」って言われた。俺もレイがいいし、それに好きになっちゃったからな。あと、《カードエクスクルーダー》がいるいと茶化してくるが、その度に《マジシヤンズ・ヴァルキリア》にグリグリ攻撃を受けていた。その時にメキョとかゴリとか変な音が聞こえていたが多分気のせいだろう。

「十代、待っててねー!!」

「ああ、待ってるからなー!!」

レイ達は船に乗って帰っていった。さてと、俺達も戻るとする……ん？

「あ、明日香さん？」

「じ、ジュンコさん。明日香さんがな、何か変ですわ。」

なんだろう、明日香から物凄い殺気を感じる。……いやな予感が……。



「……十代、そういうことなのね。」

……明日香の目から光が消えた!?

「………お、おい、明日香!?!、いったいどうしたんだよ!?!  
て、翔達がいらない!?!」

に、逃げたのか!?!?

「………。」

「あ、明日香。ま、まずは話を聞いせ」問答無用よ!?!」「ぐぶつ!  
」!

が、顔面!しかもグーで殴られた!

「もう知らない!?!」

そう叫んで明日香は走り去っていった。あれ?まさかこの展開って  
……、

【十代!アイツが!】

【ちょっとユベルさん!落ち着いて下さい!】

【ユベル!少し落ち着けよ!】

【クリ〜!?!】

ユベルが明日香を追いかけようとしているが、ハネクリボー達が必死に止めている。

(……………ユベル、俺は大丈夫だからな。)

【十代が大丈夫でも僕は嫌だよ！】

【……………その前に十代、顔がすごいことになってるぞ。】

(え?)

明日香に殴られた所を触ると凄く腫れていた。……………それより、明日香は俺のことが好きだったのか。

【十代さんは罪な男ですね。】

【十代に罪はないよ！罪があるのはアイツだよ！！】

【だから落ち着けて！！】

【クリ〜〜！！！！】

……………カオス混沌だ。

そのあと、ユベルと明日香をなだめるのに結構疲れた。ユベルは何か危ないことをしようとしていたし、明日香は明日香で本当に大変だった。いろいろと奢らされたから。それより、ジュンコやももえ

はともかく、何で翔や隼人や亮にまで奢らなきゃなんないんだよ！

「アニキ、ゴチになるッス。」

「ありがとうなんだな。」

「……………済まない。」

「明日香さんを怒らせたんだから当然のことですよ！」

「そうですね！」

「……………俺に拒否権は……………あるわけないよな。」

もういい！自棄だ自棄！

「……………勝手にしてくれ。」

その後、明日香と話し合い何とか許してもらえた。明日香は俺のことが好きになっていたのだが、俺は断った。明日香も分かってくれたみたいだ。

十代 side out

第十三話 恋する乙女の登場（後書き）

ヒロインはレイにしました。レイは十代達が二年生になったら合流させます。

## 第十四話 代表決定戦VS三沢（前書き）

第十四話です。デュエル内容を濃くするのは難しいですが頑張りました。

## 第十四話 代表決定戦VS三沢

十代 side

レイがアカデミアを去ってから数日後、ノース校とのデュエルがあるのでその代表を決めるために、俺と三沢がデュエルすることになった。

「本来なら確実に《封魔の呪印》で《融合》を防ぐはずなんだけど、《時械神》を出したから変わるかもな。……………でも、これでいいか。」

【決まったんだね。】

「ああ、明日はこれでいく。」

とりあえず大丈夫だと思う、三沢がどんなデッキでくるのかは分からないが自分の信じたデッキでくるだろう。

【……………ねえ、そういえばさ、他にも転生者っているのかな？】

「……………分からない、それより、いきなりどうしたんだ？」

【何だかここ最近変な感じがするんだ。】

「変な感じって？」

【詳しくは分からないけど変な感じなんだ。】

ユベルがそう言うなら一応警戒はしておこう。この世界は平行世界だからどんなイレギュラーが発生してもおかしくはない。

「そんな詳しく分からないことはいいから、まずは明日だ。」

【そうだね。十代、頑張ってね。】

「分かってるよ。」

明日が楽しみだ。

翌日

代表決定戦の日が来た。準備は万端、後は全力でデュエルするだけだ。

「それデーハ、ただいまより、代表決定戦を始めるノーネ！」

時間になりクロノスが現れて司会を始めた。

「ライイエローからはセニョール三沢大地、そしてオシリスレッドからはセニョール遊城十代なノーネ。」

なんかやる気がないな。

「三沢、七番目のデッキは完成したのか？」

「ああ、自分がもつとも信じるデッキ、これこそが七番目のデッキだ！」

台詞が変わってるな、別にいいけど。

「十代、勝つても負けても恨みっこなしだ！」

「分かってる、俺も全力でいくぜ！」

「デュエル！！！」

十代LP4000

三沢LP4000

「俺の先行、ドロー！俺は《ハイドロゲドン》を召喚！」

ハイドロゲドン ATK1600

「カードを二枚伏せてターンエンドだ。」

三沢

モンスター ハイドロゲドン

魔法、罫 伏せ二枚

俺はいつも通りにいくか。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《融合》を発動！」



「罨カード発動！《封魔の呪印》。手札の魔法カードを一枚捨てて、魔法カードの発動を無効にし破壊する。そしてその魔法カードはこのデュエルでは使用できない！」

三沢のデッキは俺のE・HEROデッキを研究して作ったものだな。

「十代、これで君の融合モンスターはこのデュエルでは現れることはない！」

「……………それはどうかな。俺はフィールド魔法、《フュージョン・ゲート》を発動！」

「このフィールド魔法は!？」

「《融合》が使えなければ他のカードで融合召喚をすればいい。《フュージョン・ゲート》は《融合》のカードを使わなくても融合モンスターを融合召喚することができる。だが、融合素材となったモンスターはゲームから除外されるけどな。俺は手札の《E・HEROレディ・オブ・ファイア》と《E・HEROボルテック》を融合。来い！《E・HEROノヴァマスター》！」

ノヴァマスター ATK2600

「バトル！《E・HEROノヴァマスター》で《ハイドロゲドン》を攻撃！瞬間炎上！」

《ノヴァマスター》の放った炎が《ハイドロゲドン》を蒸発させた。

三沢 LP4000 3000

「《ノヴァマスター》の効果発動！このモンスターが戦闘によって相手モンスターを破壊した時、デッキからカードを一枚ドローする。魔法カード《天使の施し》を発動！カードを三枚ドローし、その後、二枚墓地に捨てる。そしてカードを一枚伏せてターンエンドだ。」

十代

モンスター ノヴァマスター

魔法、罨 フュージョン・ゲート、伏せ一枚

やっぱり手札の消費が激しいな。

「俺のターン、ドロー！魔法カード《強欲な壺》を発動！デッキからカードを二枚ドローする。もう一体の《ハイドロゲドン》を召喚！カードを一枚伏せてターンエンドだ！」

三沢

モンスター ハイドロゲドン

魔法、罨 伏せ二枚

「俺のターン、ドロー！」

……………難しいな。

「バトル！《ノヴァマスター》で《ハイドロゲドン》を攻撃！」

「罨カード発動！《和睦の使者》。このターン僕のモンスターは戦闘によっては破壊されず、戦闘によって発生するダメージは0になる。」

再び《ノヴァマスター》が《ハイドロゲドン》に向けて炎を放つが防がれた。

「カードを一枚伏せて、ターンエンドだ！」

十代

モンスター ノヴァマスター

魔法、罨 フュージョン・ゲート、伏せ二枚

十代 side out

三沢 side

やはり一筋縄ではいかないか。だが、負ける訳にはいかない！

「俺のターン、ドロー！」

勝利の方程式の一つが完成した。

「俺は《オキシゲドン》を召喚！さらに罨カード発動！《リビングデッドの呼び声》。墓地の《ハイドロゲドン》を特殊召喚する。そして、魔法カード、《ボンディングH2O》を発動！僕のフィールドの《ハイドロゲドン》二体と《オキシゲドン》一体を墓地に送り、《ウォーター・ドラゴン》を特殊召喚する！」

俺のフィールドの水素の《ハイドロゲドン》二体と酸素の《オキシゲドン》が合わさり、《ウォーター・ドラゴン》が現れた。

ウォーター・ドラゴン ATK 2800

「《ウォーター・ドラゴン》の効果により、フィールド上の炎属性及び炎族モンスターの攻撃力は0となる。」

「くっ、《ノヴァマスター》は炎属性のモンスターだから効果は受ける。」

ノヴァマスター ATK 2600 0

「バトル! 《ウォーター・ドラゴン》で《ノヴァマスター》を攻撃! アクア・バニッシャー!」

「うわぁぁー!」

十代 LP 4000 1200

《ウォーター・ドラゴン》が津波を起こし、その津波に十代の《ノヴァマスター》が巻き込まれた。《ノヴァマスター》の攻撃力は0だからほぼ直接攻撃が通ったのと同じだ。

「俺はカードを一枚伏せて、ターンエンドだ!」

三沢

モンスター ウォーター・ドラゴン

魔法、罫 伏せ一枚

三沢 side out

十代 side

やっぱり三沢は強いな。

でも、絶対に勝ちたい！

「俺のターン、ドロー！俺は伏せてある速攻魔法、《クリボーを呼ぶ笛》を発動！デッキから《ハネクリボー》を守備表示で特殊召喚する！頼むぜ、ハネクリボー！」

【クリクリ〜！】

ハネクリボー DEF 200

「さらに《フュージョン・ゲート》の効果でフィールドの《ハネクリボー》と手札の《E・HEROザ・ヒート》をゲームから除外し融合。現れる、《E・HERO Theシャイニング》！」

Theシャイニング ATK 2600

「《Theシャイニング》の攻撃力はゲームから除外されているE・HEROと名のつくモンスターの数×300ポイントアップする！」

Theシャイニング ATK 2600 3500

「攻撃力3500!？」

デュエルの後半になればもっと攻撃力をあげられるんだけどな、《フュージョン・ゲート》を使うと簡単に攻撃力をあげられるけど手

札の消費が激しいのが欠点だ。

「バトル！《Theシャイニング》で《ウォーター・ドラゴン》を攻撃！オプティカル・ストーム！」

「罨カード発動！《聖なるバリアーミラーフォース》。相手の攻撃表示のモンスターを全て破壊する！」

ここで《ミラーフォース》かよ！？

「……………ターンエンドだ！」

十代

モンスター　なし

魔法、罨　伏せ一枚

「このままだとアニキが負けちゃうよ！」

「十代！諦めちゃだめなんだな！」

二人とも、分かってるよ。

「俺のターン、ドロー！バトル！《ウォーター・ドラゴン》で十代に直接攻撃！」

そのまま攻撃してきたか、俺にとっては好都合だ！

「手札の《速攻のかかし》のモンスター効果を発動！相手が直接攻撃してきた時、手札のこのカードを墓地に捨てることでバトルフェ

イズを強制終了させる!」

危なかった、さっきの俺のターンでドロウしたカードがこれだったから助かったぜ。

「そんなカードがあったとはな、だけど十代、次のターンがラストだ!俺はターンエンド!」

三沢

モンスター 《ウォーター・ドラゴン》

魔法、罫 なし

さてと、このドロウで全てが決まる。次のドロウはまさにデステイニードロウってやつだな、……………頼むぜ!

「俺の、ターン、ドロウ!!」

会場全体が静寂に包まれた。そして、ドロウしたカードをゆっくりと見た。

「俺は魔法カード《強欲な壺》を発動!デッキからカードを二枚ドロウする。」

来たぜ!

「……………三沢、このデュエル、俺の勝ちだ!」

「何!?!」

会場全体が驚いている。まさか、この状況をひっくり返すことはできないと思っっているのだろうか。

「俺のHERO達の絆を見せてやるぜ！俺は魔法カード、《平行世界融合》を発動！ゲームから除外されている《E・HEROザ・ヒート》と《E・HEROレディ・オブ・ファイア》をデッキに戻し融合。来い！《E・HEROフレイム・ブラスト》！」

フレイム・ブラストATK2300

「十代、そのモンスターも炎属性みたいだな。よって、《ウォータ・ドラゴン》の効果によって攻撃力は0になるぞ！」

フレイム・ブラストATK2300

「分かっているさ、手札より装備魔法、《ジャンク・アタック》を発動！《フレイム・ブラスト》に装備する。そして永續罫、《幻想の呪縛》を発動！俺は《ウォーター・ドラゴン》を選択する！選択されたモンスターは攻撃力が500ポイント下がり、効果は無効化される！《ウォーター・ドラゴン》の効果が無効化されたことにより《フレイム・ブラスト》の攻撃力は元に戻る！」

「それは！一番最初に伏せてあったカードか！？」

ウォーター・ドラゴンATK2800 2300

フレイム・ブラストATK0 2300

「さらに墓地の罫カード《スキルサクセサー》をゲームから除外して発動！自分フィールドのモンスターを一体選択し、このターンの



エンドフェイズまで攻撃力を800ポイントアップさせる！」

「その畏カードはいつ墓地に送ったんだ!？」

「《天使の施し》の時だ。」

ちなみに、もう一枚は《E・HEROネクロダークマン》だ。

フレイム・ブラスト ATK 2300 3100

「バトル!《フレイム・ブラスト》で《ウォーター・ドラゴン》を攻撃!バーニング・ファイア!そしてこの瞬間、《フレイム・ブラスト》の効果が発動する!《フレイム・ブラスト》が水属性モンスターを攻撃する時、攻撃力が1000ポイントアップする!」

フレイム・ブラスト ATK 3100 4100

《フレイム・ブラスト》の炎が三沢の《ウォーター・ドラゴン》を蒸発させた。……………すごい水蒸気の量だな。

三沢 LP 3000 1200

「くっ!だが、《ウォーター・ドラゴン》は戦闘によって破壊された時、墓地の《ハイドロゲドン》二体と《オキシゲドン》一体を特殊召喚でき!」《ジャンク・アタック》の効果発動!装備したモンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの元々の攻撃力の半分の数値の分だけ相手ライフにダメージを与える。《ウォーター・ドラゴン》の元々の攻撃力は2800、よって1400のダメージを受けてもらっぜ!」何!?!うわぁー!ー!ー!ー!」

三沢LP12000

十代side out

ユベルside

決着がつくと会場から歓声が上がった。

「おめでとう！遊城十代君！君が我がアカデミアの代表です！」

校長がそう告げると歓声がさらに大きくなった。

「十代、俺の完敗だ。まさか逆転されるとは思っていなかった。」

「三沢もすごかったぜ、俺も負けると思ってたからな。でもこれだけは言わせてもらっぜ。」

「なんだ？」

「自分が望みさえすればデッキは必ず自分に答えてくれるぞ。」

なかなかいいこと言っね。

【流石、十代さんですね。】

【俺は勝てると思ってたぜ。】

【クリ。】

見ると十代と三沢が固く握手していた。さてと、僕達も……………  
ん？誰かに見られてる感じがする。

【ユベル、どうしたんだ？】

【……………今、誰かに見られてなかった？】

【そうか？気のせいじゃないのか？】

【……………そうだね。】

気のせい、と思いたいけどなんか気になる。まあ、いいか。

ユベル side out

???? side

十代君強くてかつこよかったな。この世界に来て正解だったよ。……でも、なんで？なんでなの？なんでユベルが十代君の側にいるの？おかしいでしょ、ユベルは宇宙にいったはずなのに。どうして？

「それに《エフェクトヴェーラー》と《ターボシンクロン》は5D  
から出てくるはずなのにどうしてこのGXの世界にいるの？」

なんで？なんでなんでなんで？

「……………そうか、そういうことなんだね！十代君！」

私に救って欲しいからユベルがいるんだね、そうだよ。だから待  
つててね、十代君。私があこのヤンデレ悪魔から必ず救ってあげるか  
らね。

??? side out

第十四話 代表決定戦VS三沢（後書き）

最後に出てきたキャラはセブンスター編でデュエルさせます。

第十五話 ノース校とのデュエルVS万丈目（前書き）

第十五話です。少しやり過ぎたかもしれません。

## 第十五話 ノース校とのデュエルVS万丈目

十代 side

いよいよ明日はノース校とのデュエルの日だ。代表は多分万丈目だ  
と思う、だが、どん底から這い上がってきたから強くなっているの  
は確実だ。俺も負けないようにしないと。……………でも、何か  
とてつもなくどうでもいいようですごく大事なことを忘れている気  
がする。

【……………十代、取り込み中悪いけどいいかい？】

「ユベルか、どうしたんだ？」

【ここ最近僕達は誰かに見られてる感じがするんだ。】

「ユベル達が、か？でも、翔達は見えていないし、人前では実体化  
してはいないから大丈夫だと思うが。」

【違うよ。僕達が精霊化しても見えるやつがいるんだ。】

精霊が見える人はあまりいないが、一体誰なんだ？

「……………まあ、警戒はしておこうな。」

【分かったよ。】

さてと、明日の準備の続きをしないとな。

翌日

港にノース校の移動手段である潜水艦が現れ、その中からノース校の校長先生や生徒が出てきた。

「よくいらしたな、一之瀬校長。」

「しばらくの間うちの悪童共々お世話になりますよ。………ところでトメさんはいますかな？」

「もちろんですとも。」

この二人、何を話しているんだ？

【何でトメさんが出てくるんですか？】

【さあな。】

その後、黒い制服に身を包んだ万丈目が現れ、それとほぼ同時に万丈目の二人の兄がTV局と現れた。このデュエルを生中継するみたいだ。そうだ、レイに連絡しておこう。

少し時間は進んで対抗デュエルの時間の直前になった。あの後、レイに連絡したら、『絶対に見るから皆で応援するね！』と嬉しそう



に言っていた。

【レイ、嬉しそうだったね。】

「そうだな。」

【負けるわけにはいきませぬね。】

【クリ〜。】

対抗デュエルの時間になり、アカデミア本校、ノース校の校長先生の二人による開会宣言が行われた。デュエルリングの周りには何台ものカメラがスタンバイしている。生中継というのは嘘じゃなかったのか。

『ま、まず紹介するノ〜ハ、アカデミア本校代表、遊城〜十代なノ〜ネ。』

クロノスの何かぎこちない紹介がされ、本校生徒のボルテージが高まる。……………緊張するのは無理はないか。俺は大丈夫だけど。

『対するノース校の代表〜は、「要らん！俺の名は俺自身で告げる！引っ込んでいろ！」な、何をするノ〜ネ！』

万丈目がクロノスからマイクを奪った。

「お前達、俺のことを覚えているか！俺が消えて清々したと思っっている奴！俺が退学になったことを自業自得だと思っっている奴！知らない奴には聞かせてやる！地獄の底から不死鳥の如く復活した俺の名は！！！」

万丈目が右手を天に上げる。

「一！十！」

「百！千！」「」「」「」「」

「万丈目サンダーッ！！」

「」「」「」「」万丈目サンダーッ！！」「」「」「」

ノース校の生徒はすごくテンション高いな……。そういえば、潜水艦で現れた時からだったな。「最初から最後までクライマックスだぜ！」ってやつか？

「行くぞ十代！俺はこのデュエル、負けるわけにはいかない！」

「ああ、かかってこい万丈目！」

「万丈目サンダーッ！」

「デュエル！！」「」

十代LP4000

万丈目LP4000

「俺の先行、ドロー！俺は《仮面竜》を守備表示で召喚！」

仮面竜DEF1100

ドラゴン族専用のリクルーターか。

「ターンエンドだ！」

万丈目

モンスター 仮面竜

魔法、罨 なし

………無警戒だな。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード、《テイクオーバー・ファイブ》を発動！デッキの上からカードを五枚墓地に送る。」

「自分のデッキを自分で削るのか！？」

生徒からは「何やっているんだ？」とか聞こえてくる。………無視しよう。墓地に行ったカードは、《E・HEROワイルドマン》、《E・HEROクスノペ》、《E・HEROレディ・オブ・ファイア》、《E・HEROオーシャン》、《聖なるバリアーミラーフォース》の五枚。《ミラーフォース》が落ちたのは痛いな。

「俺は《E・HEROバブルマン》を守備表示で召喚！効果発動！《バブルマン》が召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、自分フィールドに他のカードが存在しない場合、デッキからカードを二枚ドローできる。」

バブルマンDEF1200

「魔法カード、《融合》を発動！手札の《E・HEROフェザーマン》と《E・HEROバーストレディ》を融合。来い！《E・HEROフレーム・ウィングマン》！」

フレーム・ウィングマン ATK 2100

「バトル！《フレーム・ウィングマン》で《仮面竜》を攻撃！フレームシュート！」

「くっ！」

「《フレーム・ウィングマン》の効果発動！相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！《仮面竜》の攻撃力は1400、その分のダメージを受けてもらっぜ！」

「ぐわぁー！！！」

万丈目 LP 4000 2600

「だがこの瞬間、《仮面竜》の効果発動！デッキから攻撃力1500以下のドラゴン族モンスターを特殊召喚できる！俺は《アームド・ドラゴンLV3》を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLV3 ATK 1200

レベルモンスターか。

「あ、あのカードは！？」

「今年の褒美は私の物だ!!」

「負けるな十代君!今年も褒美は私の物だ!」

「……………わ、分かってますよ。」

褒美って何だっけ?

「俺はカードを一枚伏せてターンエンドだ!」

十代

モンスター フレイム・ウィングマン、バブルマン

魔法、罫 伏せ一枚

「強がれるのも今のうちだ!俺のターン、ドロー!くくくくくつ、これから恐怖のターンが始まる。俺のスタンバイフェイズに《アームド・ドラゴンLV3》の効果発動!自分のスタンバイフェイズにフィールド上に存在するこのカードを墓地に送ることで、手札・デッキから《アームド・ドラゴンLV5》を特殊召喚する。」

アームド・ドラゴンLV5 ATK2300

「進化したのか……………」

《アームド・ドラゴンLV5》が召喚されたことによりノース校の生徒のテンションが上がった。

「《アームド・ドラゴンLV5》の効果発動!手札のモンスターカードを一枚墓地に捨てて、そのモンスターカードの攻撃力以下の表

側表示で存在する相手モンスターを一体破壊する。俺は手札の《仮面竜》を墓地に捨てる。《仮面竜》の攻撃力は1400、よって俺は攻撃力800の《バブルマン》を破壊する！デストロイド・パイ  
ル！」

《アームド・ドラゴンLV5》の体にある棘が発射され《バブルマン》を破壊した。

「バトル！《アームド・ドラゴンLV5》で《フレイム・ウィングマン》を攻撃！アームド・バスター！」

「くっ！」

十代LP4000 3800

「俺はカードを一枚伏せてターンエンド！そしてこの瞬間、《アームド・ドラゴンLV5》の効果が発動する！このカードがバトルによって相手モンスターを破壊したターンのエンドフェイズにこのカードを墓地に送ることで、手札又はデッキから《アームド・ドラゴンLV7》を特殊召喚できる！俺はデッキから特殊召喚する！現れる！《アームド・ドラゴンLV7》！」

《アームド・ドラゴンLV5》が消え、代わりに成長した《アームド・ドラゴンLV7》が出現した。

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

「「「「「サウダー！サウダー！」「「「「「」

「……万丈目サンダー！」

「どうした十代、俺の《アームド・ドラゴンLv7》を見て怖じ気づいたか？」

「……万丈目、レベルモンスターって珍しいのか？」

「万丈目サンダー！そうだ、これは伝説のレベルモンスターなんだ！」

……俺、《サイレント・ソードマン》とか《ホルスの黒炎竜》などのレベルモンスターは全部持っているんだよな。

「……気を取り直して、俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに墓地の魔法カード、《テイクオーバー・ファイブ》の効果発動！このカードがスタンバイフェイズに墓地に存在する時、このカードをゲームから除外することでデッキからカードを一枚ドローする！さらに魔法カード、《天使の施し》を発動！デッキからカードを三枚ドローし、その後二枚墓地に送る。」

墓地に送ったのは《E・HEROネクロダークマン》と《E・HEROアイスエッジ》だ。

「手札の《沼地の魔神王》の効果発動！このカードを墓地に送ることでデッキから《融合》を手札に加える。そして発動！手札の《E・HEROエッジマン》と《E・HEROフォレストマン》を融合。来い！《E・HEROガイア》！」

ガイア ATK 2200

「だが、俺の《アームド・ドラゴンLV7》の攻撃力は2800、そんなモンスターを出したところで無意味だ！」

「……………どうかな？《ガイア》の効果発動！融合召喚に成功した時、相手モンスターを一体選択し、その選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで半分にし、その半分にした数値の分だけ《ガイア》の攻撃力がアップする。俺は《アームド・ドラゴンLV7》を選択する！」

ガイア ATK 2200 3600

アームド・ドラゴン LV7 ATK 2800 1400

「何！？」

「バトル！《ガイア》で《アームド・ドラゴンLV7》を攻撃！コンチネンタル・ハンマー！」

「うわぁー！！！」

万丈目 LP 2600 400

「十代君！その調子だー！！」

「十代、きばるんだなー！！」

「アニキーー！！」

校長、なんでそんなに興奮しているんだ？



「立て！立つんだ！サンダー！！」

「……………立つんだ！！サンダーアアツツ！！……………」

結束力が高いな。それだけノース校の皆は万丈目を信頼しているってことだな。

「俺は、……………負けるわけには行かない！」

「俺はターンエンド！そして《ガイア》の攻撃力は元に戻る。」

ガイア ATK 3600    2200

十代

モンスター    ガイア

魔法、罨    伏せ一枚

「俺のターン、ドロロー！俺は魔法カード、《強欲な壺》を発動！デッキからカードを二枚ドロローする！そして魔法カード、《四次元の墓》を発動！墓地のレベルモンスターを二体選択し、デッキに戻してシャッフルする。《アームド・ドラゴンLV3》と《アームド・ドラゴンLV7》をデッキに戻す。そして永続罨発動！《リビンググデッドの呼び声》。墓地の《アームド・ドラゴンLV5》を特殊召喚する！」

《アームド・ドラゴンLV5》、どうするつもりだ？

「手札より魔法カード、《レベルアップ》を発動！自分のフィールドに存在するレベルモンスターを一体墓地に送り、手札又はデッキ

からそのレベルモンスターより上のレベルモンスターを召喚条件を無視して特殊召喚する！《アームド・ドラゴンLV5》を墓地に送り、デッキより《アームド・ドラゴンLV7》を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLV7 ATK2800

「そして《アームド・ドラゴンLV7》を生け贄に《アームド・ドラゴンLV10》を特殊召喚する！」

アームド・ドラゴンLV10 ATK3000

《アームド・ドラゴンLV10》！？マジかよ！

「これが《アームド・ドラゴン》の究極体だ！《アームド・ドラゴンLV10》は《アームド・ドラゴンLV7》を生け贄にした時のみ特殊召喚できる！そして《アームド・ドラゴンLV10》の効果発動！手札を一枚墓地に送ることで、相手モンスターをすべて破壊する！俺はこの雑魚を墓地に送り、貴様の《ガイア》を破壊する！」

まずい！

【アニキ、おいらをもっとそばに居させてくれよ。】

「えーい、早くいけ！」

【あ〜れ〜！】

あ、《おジャマ・イエロー》だ。……って、そんなことを考えている場合じゃない！



プリズマー ATK1700

「《プリズマー》の効果発動！融合モンスターを一体相手に見せ、その融合モンスターに記されている融合素材モンスターを一体墓地に送り、このターンのエンドフェイズまで、《プリズマー》は墓地に送ったモンスターと同名カードとして扱う。俺は《E・HERO ダーク・ブライトマン》を選択し、デッキから《E・HEROスパークマン》を墓地に送る。そして《プリズマー》は《スパークマン》として扱う。リフレクト・チェンジ！」

これで準備は整った！

「そんなモンスターを出したところで無意味だ！」

「そして俺は魔法カード、《ミラクル・フュージョン》を発動！フィールドの《スパークマン》として扱う《プリズマー》と墓地の《沼地の魔神王》をゲームから除外し融合。来い！《E・HERO シャイニング・フレア・ウィングマン》！」

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK2500

「伏せてある速攻魔法、《異次元からの埋葬》を発動！ゲームから除外されている《E・HEROプリズマー》を墓地に戻す！そして《シャイニング・フレア・ウィングマン》の攻撃力は墓地に存在するE・HEROと名のつくモンスターの数×300ポイントアップする。俺の墓地に存在するE・HEROと名のつくモンスターは15体、よって攻撃力は4500ポイントアップする！」

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK2500 7000

「こ、攻撃力が7000だと!？」

ちよっとやり過ぎたかな……。会場がざわめいているし、てか、俺もこの攻撃力を出したのは始めてだ。

「バトル!《シャイニング・フレア・ウィングマン》で《アームド・ドラゴンLV10》を攻撃!シャイニング・シュート!…」

『まずい!カットだ!カット!』

「うわぁー!…」

万丈目LP4000

《シャイニング・フレア・ウィングマン》が《アームド・ドラゴンLV10》を攻撃し、万丈目のライフを0にした。

十代side out

レイside

「ちよつと!…十代はどうなったの!…」

【うつらないね〜。】

何でいいところで画面が切り替わるの!?

【…マスター、落ち着いて下さい。】

「でも。」

【…十代さんなら勝ったと思います。】

そんなこと分かってるよ。

【…後で連絡してみたらどうですか？】

「……………そうするよ。」

よし、それまで勉強しよう！

レイside out

十代side

決着がついた後は原作通りだった。で、今は表彰式が行われている。

『これより、表彰式を始めます〜ノ！勝者の校長はこちら〜へ。  
そしてご褒美をあげるノ〜ハ、ミス・デュエルアカデミ〜アなノ〜  
ネ！』

クロノスの声とともに現れたのは、トメさんだった。……………しかも、  
何故か《ブラック・マジシャン・ガール》の格好で……………。

「なんでトメさんが？」

「ミス・デュエルアカデミアっていたんだ。」

トメさんが鮫島校長にキスをした。…………ほ、褒美ってまさか!?

「アニキ、どうしたの?」

「……………ったのかよ。」

「えっ?」

「褒美ってこれだったのかよ……!……!」

そう叫ばずにはいらなかった。

十代 side out

第十五話 ノース校とのデュエルVS万丈目（後書き）

次からはセブンスターズ編に入ろうと思います。



**第十六話 セブンスターズ編始動！そして現れる転生者（前書き）**

第十六話です。セブンスターズ編が始まります。ラストは大変なこ  
とになります。

## 第十六話 セブンスターズ編始動！そして現れる転生者

十代 side

俺は昼間三沢や万丈目達と共に校長に呼び出され、この島に眠る三幻魔、七星門の鍵、そしてそれを狙うセブンスターズについて話された。………ついに来たか。これからセブンスターズとデュエルする際にはダメージが実体化する闇のデュエルが行われることが多くなるから気をつけないな。

【十代さん。】

【誰かが後をつけてくるぞ。】

(………分かってるよ。)

放課後、レッド寮に戻っている途中のことだった。誰かが俺達のことをつけていることが分かった。

【………クリ〜。】

(………ハネクリボー、心配するな。)

この時期だとセブンスターズの誰かだな。俺はしばらく歩き、俺達以外は誰もいないことを確認した。

俺はしばらく歩き、俺達以外は誰もいないことを確認した。

「………ところで、いつまで俺についてくるつもりだよ。」

「……へえ、よく分かったね。」

俺が振り返ってそう言つと木の陰からオベリスクブルーの制服を着た女子が出てきた。

「始めましてかな、遊城十代君。私はね、原田真理奈っていうの！よろしくね。」

「……で、何か用か？」

原田真理奈か、髪の色は紫でポニーテールだ。……でも、なんだこの気味悪い感じは？

「十代君にはね、すごく危険な悪魔が憑いているの。だから、その悪魔を私が追っ払おうと思つてね。」

「俺に悪魔が憑いているのか？」

「うん、そうだよ。……十代君の隣にいるユベルがね!!」

こいつ、ユベル達が見えるのか!?

【十代、最近僕達を見ていたのは多分あの女だよ。】

「……成程な。」

「十代君、君の側にユベルがいるとね、君は不幸になるんだよ!」

何言っているんだ？

「どついつ意味だ？」

「ユベルがいるとね、ユベルが他の人達を傷つけてね、その人達が十代君から離れていっちゃうんだよ。」

「なんだ、……それだけのことか。」

俺はそう言つとレッド寮に向かおうとした。

「待つてよー！」

真理奈に呼び止められた。

「これは本当のことなんだよ！このままだと十代君は本当に不幸になるんだよー！」

……馬鹿馬鹿しい。

「……じゃあ俺はどうすれば幸せになれるんだ？」

「簡単なことだよ。私といれば幸せになれるんだよ！十代君に危害を加える奴は私が懲らしめるから十代君は何も心配しなくていいんだよー！」

本当に馬鹿馬鹿しい。

【十代、こいつ何言ってるんだい？】

「……一つだけ分かる、馬鹿馬鹿しいことだ。」

【……馬鹿なんだね。】

ユベルが呆れている。無理もないか。

「馬鹿じゃないよ!」

相手にするだけ時間の無駄になるな、早く戻って休みたいし。

「……私とデュエルしてよ。デュエルくらいならいいでしょ!」

デュエルくらいなら構わないか、そう思ってデュエルディスクを構えようとした時だった。

【十代、こいつの相手は僕にやらせてくれないかな?】

突然ユベルがそう言ってきた。

「……別にいいけど。」

【ありがとう。】

そう言ってユベルは実体化した。ちなみに左腕には自分の腕から出したデュエルディスクがある。

「本当にユベルなんだね。十代君から離れてよ!この悪魔!」

【まあ、否定はしないよ。僕の種族は悪魔族だからね。】

確かに本当のことだ。

【「デュエル!!」】

ユベルLP4000

真理奈LP4000

十代side out

ユベルside

さてと、あの女はどんなデッキを使ってくるんだろうか？

「私のターン、ドロー！私は《キラー・トマト》を召喚するよ！カードを一枚伏せてターンエンドだよ！」

キラー・トマトATK1400

真理奈

モンスター キラー・トマト

魔法、罫 伏せ一枚

【僕のターン、ドロー！僕は魔法カード、《ダーク・フュージョン》を発動！手札の《E・HEROフェザーマン》と《E・HEROバーストレディ》をダーク・フュージョン。現れる！《E HER Oインフェルノ・ウィング》！】

「い、《E HERO》!?!」

インフェルノ・ウイング ATK 2100

【バトル！《インフェルノ・ウイング》で《キラー・トマト》を攻撃！インフェルノブラスト！】

「くうう！」

真理奈 LP 4000 3300

【《インフェルノ・ウイング》の効果発動！相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！】

「きゃあ！」

真理奈 LP 3300 1900

「《キラー・トマト》の効果発動！戦闘によって破壊された時、デッキから攻撃力1500以下の閥属性モンスターを一体攻撃表示で特殊召喚できる。私は《クリッター》を特殊召喚するよ！」

クリッター ATK 1000

【僕はカードを一枚伏せてターンエンド。】

ユベル

モンスター インフェルノ・ウイング

魔法、罫 伏せ一枚

十代があの子とデュエルする時に対策が出来るようにしておかないとね。

「何でユベルがE HEROを使っているの？」

【知る必要はないと思うけどね。】

「別にいいよ！私が勝つんだから私のターン、ドロー！私は魔法カード、《苦渋の選択》を発動！選ぶのはこの五枚だよ！」

えくと、《シャイン・エンジェル》が二枚、《コーリング・ノヴァ》が二枚、《キラール・トマト》が一枚、か。この女は何がしたいんだ？

【じゃあ、僕は《シャイン・エンジェル》を選択するよ。】

「残りは墓地に送るよ。そして墓地に存在する光属性の《シャイン・エンジェル》と闇属性の《キラール・トマト》をゲームから除外して《混沌帝龍 終焉の使者》を特殊召喚！」

「か、《混沌帝龍 終焉の使者》だと!？」

確か禁止カードだったはず、こいつもあの偽物と同じく勝つためには手段を選ばないのか。でも、よりによって《混沌帝龍 終焉の使者》とはね。

【それは禁止カードのはずだよ、何で入れているんだい？】

「禁止カード？禁止カードっていうのは私以外は使っちゃいけないカードのことなんだよ！」



………何言ってるんだい、こいつは？

「《混沌帝龍 終焉の使者》の効果発動！ライフを1000ポイント支払って自分と相手の手札とフィールドのカードを墓地に送り、その枚数×300ポイントのダメージを相手に与える。墓地に送るカードの枚数は10枚だから3000ポイントのダメージだよ！」

「ぐわあぁー！！！」

《混沌帝龍》が咆哮を上げると全てのカードが破壊された。

真理奈LP1900 900

ユベルLP4000 1000

「そして《クリッター》の効果で私はデッキから《八汰鳥》を手札に加えて召喚するよ！」

確かこのパターンって、八汰ロックだね。

「バトル！《八汰鳥》でユベルに直接攻撃！」

【墓地の《ネクロ・ガードナー》の効果発動！墓地に存在するこのカードをゲームから除外することで攻撃を無効にする。】

《八汰鳥》が僕に攻撃してくるが、半透明になった《ネクロ・ガードナー》が現れ、攻撃を防いだ。

「ちよっと！？いつ墓地に送ったのよ！」

「……………《混沌帝龍》の効果の時だな。」

「十代君、君はどっちの味方なの!？」

「俺はユベルの味方だよ。」

「十代君!目を覚ましてよ!君はユベルに騙されているんだよ!！」

「……………あいな、お前さつきから何言ってるんだよ。」

十代が怒りを通り越して呆れているね。

「私はターンエンド!」

【そして《八汰鳥》はエンドフェイズにお前の手札に戻る。】

真理奈

モンスター なし

魔法、罫 なし

【僕のターン、ドロー!】

《混沌帝龍》を使って来たことには驚いたけど、この女は所詮卑怯者だ。

【僕は《E・HEROバブルマン》を特殊召喚!《バブルマン》は手札がこのカードのみの場合、手札から特殊召喚することができる。そして《バブルマン》の効果発動!《バブルマン》が召喚、反転召

喚、特殊召喚に成功した時、自分フィールドに他のカードがない場合、デッキからカードを二枚ドロウする。】

これで終わりだ。

【僕は魔法カード、《ダーク・コーリング》を発動！手札の《E HEROマリシャス・エッジ》と墓地の《E HEROインフェルノ・ウィング》をゲームから除外し、ダーク・フュージョン。来い！《E HEROマリシャス・デビル》！】

マリシャス・デビル ATK3500

【バトル！《マリシャス・デビル》でお前に直接攻撃！エッジ・ストリーム！】

「きゃあーーーーー！」

真理奈 LP9000

……………終わった。

「ユベル、お疲れ様。」

【ずっとこんなもんだよ。……………でもなんか満足できない。】

「お前は鬼柳か。」

【別にいいじゃないか、それより早く戻ろつよ。】

「ああ、分かった。」

ユベルside out

十代side

さて、戻るとしますか。

「待ってよ!」

……………ああ、もう!

「待たない。」

「だから待ってよ!」

真理奈がいつの間にか目の前に来ていた。

「だから何なんだよ!」

そう言つと真理奈は俺に近づいてきた。

「な、何するつもりだよ?」

「……………」

ブスッ!グチュ!ドスッ!

「……………えっ?」

何かが刺さる音がしたと同時に腹に痛みが走った。

「……………な、何を……………、したんだ……………」

「……………十代君がいけないんだよ。……………私の言うことを聞かないからこうなるんだよ。」

真理奈の手には血の付いたナイフがあり、俺の腹から血が流れていた。

「……………っ、これは……………、俺の……………、血？」

しかも……………、量が多い……………。

「……………うう、……………はあ、……………くっ……………」

まずい……………、意識が……………。

【お前！よくも十代を！！】

【ユベルさん！十代さんを助けるのが先ですよ！！】

【クリ〜、クリ〜！！】

【十代が死んだらどうするんだ！】

……………みんな……………な。

「アニキー！どっどこにいるのー……………」

「十代！どこにいるんだ、返事をしろ！」

「……まずい！誰か来た！」

……しょ……う……まん……じょう……め……。

「……め……ん……。」

俺の意識は途切れた。

十代 side out

## 第十七話 冥府の官吏者と新たな転生者（前書き）

第十七話です。ナハトさんよりオリキャラの提供がありましたので出してみました。

第十七話 冥府の官吏者と新たな転生者

万丈目 side

校長からセブンスターズについて聞いた。どんな奴等かは知らんがこの万丈目サンダーが蹴散らしてくれる！

「万丈目君、ちゃんと探してるツスカ？」

「万丈目サンダー！今探してるだろ！」

全く………、十代の奴はどこにいるんだ？

「アニキー！どこにいるのー！！」

「十代！どこにいるんだ、返事をしろ！」

森の中まで俺達は探しに来ているが、十代は見つからない。………  
全く、どこに………ん？なんだ、この臭いは？

「なんか臭うツスね。」

「これは………血の臭いだ！」

まさか、もつこの島にセブンスターズが！？あっちから臭うな。



「な、なんだこれは!？」

「アニキ!しっかりして!！」

血の臭いがした方に向かうと十代が腹から血を流して倒れていた。

「万丈目君、どうしよう!？」

「お前は鮎川先生にこのことを知らせて来い！」

「う、うん、分かったよ!！」

くそっ、出血の量が多い!……………おかしい、何故傷がないんだ!？

……………この手紙は？

『十代君の傷は何か消しましたが血の方は無理なので早く輸血してください。それと後は死なないで下さい。それとおまけで大自然の加護も渡したときだったので悪意ある人間には大自然が少しいたずらをしますので、その間に逃げるなり何なりして下さい。レイちゃんに渡しとくと言うよりも十代君が選んだ好きな人なら加護はもらえますが、その分闇の存在などの戦いにはきつくなるかもしれないかもしれませんね。』

……………途中から訳の分からんことが書いてあるが早くすれば助かるということだな。

【万丈目のアニキ。】

「この大変な時に出てくるな!！」

【おいらと同じ精霊がいるんだよ。】

「何だと!?!」

周りをよく見ると確かにいた。十代の精霊か？

【あ、あの、私達が見えるんですか？】

「ああ、一体何があったんだ!?!」

【後で何があったか話すからまずは十代を助けて!?!】

【クリ〜!?!】

【頼む!】

「言われなくても分かっている!」

十代、死んだら許さんぞ!!

その後、十代は一命をとりとめた。鮎川先生によると「万丈目君達があと少しでも遅かったら助からなかった。」「らしくとても危ない状態ということだった。その後、俺は人気のない所に行き、十代の精霊達に話を聞くことにした。十代のデッキは俺が持っている。こ  
うしなければ精霊と話すことが出来ないからな。

「……さて、何があったか詳しく聞かせてもらおうぞ。」

【……………分かったよ。君は原田真理奈っていう女を知っているかい？】

「知っているが……………」

【知っているなら話が早いよ。……………あの女が十代を刺したんだ！】

「何！それは本当か!?!」

【その人とデュエルをしたんですけど、《混沌帝龍 終焉の使者》を使っていたんですよ。】

「《混沌帝龍 終焉の使者》だと!?!それは禁止カードのはずだ!?!」

【それが、禁止カードは私以外が使っちゃいけないカードだ、って言うっていたんだ。】

【……………クリ〜。】

……………何だ、その言い訳は？

「……………とにかく、真理奈という女が十代を刺したのは本当のことなんだな?」

【……………そうだよ。】

くそっ！見つけたらただじゃおかない！

【万丈目さん、頼みます!】

「任せろ！……そういえば、十代の傷を治したのは誰なんだ？」

【……それが、十代の傷を治した後、すぐにどこかに行ったから分からないんだ。】

【……あの女じゃないからね。】

「……そうか。十代が持っている鍵は俺が預かる。ところで、お前達はどうする？」

【十代が目覚めるまで僕達は十代の側にいるよ。】

「じゃあ、この十代のデツキは鮎川先生に預けておく。」

万丈目 side out

???? side

俺は天川零、元人間で今は冥府の官吏をやっている。簡単に言うと地獄の門番だ。年は確か1500歳だった気がする。まあ、んなこととはどうでもいい。

「………で、あの転生者がやり過ぎているから俺が直々に行つてこい、って訳だな。」

「は、はい！」

「………つたく、テメエら頭の中は空っぽか！俺の仕事を増やすん

「じゃねーよ!」

「す、すみませんでした!い、以後、気をつけます!」

「テメエ、そのセリフ何回も俺の前で言ってるよな?」

【ま、まあ御主人。そこまでにしてあげて下さいよ。】

「チツ、分かったよ。テメエ、俺が行ってやるからとっとと帰りやがれ!」

「は、はい!!--!」

そう言つと神の使いは帰っていった。

「……全く、あのジジイやババア達は何やってたんだよ!あいつらの頭は動物以下か!？」

【……自分の上司達に容赦ないですね。でも御主人、よく仕事引き受けましたね。】

「俺の仕事だからだよ。まあ、後でジジイやババア達からボロ雑巾になるまでいろいろと絞りとってやるがな。」

【あの、顔が怖いんですけど……。】

【カイエン、主人はいつものことだ、気にしたら負けだ。】

【グルウ。】

俺の部下は《冥府の使者ゴーズ》と《冥府の使者カイエン》、《冥王竜ヴァンダルギオン》の三人。三人とも精霊だ。二人と一匹じゃねーぞ。間違えんなよ。

「最近は何鹿な転生者どもが原因でアテムとのデュエルがろくに出来てねーんだよな。」

【でも御主人、その原因の根本は上ですよ。】

【確かに。】

【グルウ。】

ちなみに三幻神とかの全てのカードは持っている。アテムに見せた時の驚いた顔は面白かったぜ！

【主人、アテムとのデュエルの勝敗数は？】

「確か、140勝140敗20引き分けだ。次は俺が勝つ！」

【僅差ですね。】

「アテムはチートドロイを持つてるからな。」

俺も持つてるけど、アテムは元祖チートドロイなんだよ。俺なんか二番煎じだ。

「さて、長話もこれくらいにして、お前らさっさと仕事に行くぞ！」

【【はいー！】】

【グルウ！】

仕事しますか。

零 side out

??? side

私は早乙女ユキ、レイの姉で転生者です。前の世界では交通事故にあつたことまでは覚えていたけど気づいたらこの遊戯王の世界にいたんです。最初は楽しめると思っていました。……でも小さい頃、お父さんとデュエルした時に、自分がサイコデュエリストだということが分かると状況が変わってしまいました。私の力でお父さんや友達を傷つけてしまいお父さんとお母さんは私のことを嫌いになり、友達はみんな私から離れて行きました。でも妹のレイだけは私のことを嫌いにはなりませんでした。……で今はレイとデュエルしています。

「私は魔法カード、《闇の誘惑》を発動。デッキからカードを二枚ドロローして、その後、手札から闇属性モンスターを一体ゲームから除外する。私は《ネクロフェイス》をゲームから除外する。《ネクロフェイス》の効果発動。このカードがゲームから除外された時、お互いのプレイヤーはデッキの上からカードを五枚ゲームから除外する。ゲームから除外されたもう一体の《ネクロフェイス》の効果が発動するよ。」

「ボクのデッキがなくなっちゃたよ！」

「私の勝ち、だね。」

私のデッキは除外とデッキ破壊を組み合わせたデッキにしている。最初は植物族バーンなどのデッキを使っていたけど、サイコデュエリストの力に気づいた後、私はこのデッキに変えた。私はいろんなカードは持っているけど、《宝玉獣》とかの特定の人しか持っていないカードはなかった。

「……………ねえ、レイ。」

「お姉ちゃん、どうしたの?」

「そのカードって前に話してくれた人から貰ったの?」

「うん、そうだよ!十代はね、デュエルは強いし頭もいいし、かっこいいんだ!」

「……………そうなんだ。」

……………おかしいな?原作では十代はデュエルは強いけど学力は低いはず。……………なんでだろう?

「……………ねえ、何かされなかった?」

「大丈夫だよ。もう、お姉ちゃんってば心配しすぎ。」

「……………ごめん。」

レイがアカデミアから帰って来た時はレイを抱きしめて、一緒にお風呂に入ったり、寝たりもした。



「お姉ちゃん、謝るのはボクの方だよ。」

「レイが無事でよかったから大丈夫。」

「……………お姉ちゃん、ボクはどんなことがあってもお姉ちゃんの味方だからね。」

「……………レイ、ありがとね。」

ユキ side out

## 第十七話 冥府の官吏者と新たな転生者（後書き）

次はオリキャラの設定を書きます。ナハトさん、十代の治療とオリキャラの提供ありがとうございます！

## オリキャラ設定(前書き)

出てきたオリキャラの設定です。

## オリキャラ設定

天川零（ナハトさん提供）

性別：男

年齢：1500歳（本人曰く）

性格：完璧な仕事主義、仲間思い

使用デツキ：カウンター罨主体

精霊：冥府の使者ゴーズ、冥府の使者カイエン、冥王龍ヴァンダル  
ギオン

備考：元人間で現在は冥府の官吏者。見た目はグレンラガンのカミナ。カードは全て持っている。転生者ではなく、もともと遊戯王の世界にいた人物。冥府の官吏者の仕事は現世に迷い混んだ悪性の鬼を元の場所に戻したり、地縛霊や浮遊霊などを輪廻の輪に入れたりなど色々な仕事をする。それに関した書類を作成して上司（閻魔大王）に提出しているが、最近は上（神とか）が色々とやらかしているため仕事が多くなっている。やり過ぎた転生者にはデュエルを申し込み、彼に負けたものは地獄に行くか輪廻の輪に強制的に入れられ、全ての記憶を無くされてから転生させる。が、たまに無罪放免もある。上司には容赦なく毒舌を吐くが、実は仲間思いで仲間が傷つくぐらいなら自分が傷ついた方がいいと思っっている。仕事の合間に冥界にいるアテムとデュエルしているが、勝敗数は僅差である。チートドローは持っている。

早乙女ユキ（ナハトさん提供）

性別：女

年齢：13歳（初登場時）

性格：物静か、心配性

使用デッキ：デッキ破壊＋除外、植物族デッキ

精霊、（）内は呼び名：ブラック・マジシャン・ガール（マナ）、  
ブラック・ローズ・ドラゴン（サクヤ）、凜天使クイーン・オブ・  
ローズ（ユウカ）、魔天使ローズ・ソーサラー（マリサ）

備考：レイの姉で転生者。見た目は真・恋姫無双の関羽。どんなルールも守る良心的な存在。カードは特定の人物しか持っていないカード以外は持っている。モンスターエクシーズやエクシーズ召喚は知っているがゼアルは一話も見えていない。小さい頃の父親とのデュエルでサイコデュエリストの力が覚醒し、その力で父親や友達を傷つけてしまい、両親や友達からは嫌われてしまうが妹のレイは嫌いにはならなかった。レイから十代について言われ、十代のことを不思議に思う。植物族デッキはサイコデュエリストの力が覚醒した時から使っておらず、デッキ破壊と除外を組み合わせたデッキでレイと（レイしかデュエルする人がいない）デュエルしている。少しシスコン気味。男性恐怖症だが十代は大丈夫。

原田真理奈

性別：女

年齢：16（初登場時）

性格：ヤンデレ

使用デッキ：禁止カードを沢山入れているデッキ

精霊：見えるがない

備考：転生者。アニメを見て十代が好きになった。だが、ユベルは大の嫌いで十代をユベルから救おうと考えている。ヤンデレなので頭がおかしく、禁止カードは自分以外は使ってはいけないカードだと思っっている。

301

彩輝<sup>サイキ</sup>（ナハトさん提供）

性別：男

年齢：不明

性格：優しいがやるときはやる

備考：零の上司で閻魔大王の長男。零を冥府の官吏者にスカウトした張本人。見た目は烈火の炎の紅麗の顔の傷がない姿。二十歳くら

いに見えるが実際は不明。性格は優しいが罰するときには罰する。結婚はしているがいまだに新婚の雰囲気を出している（周りが砂糖を吐くぐらい）。

玻凜<sup>ハリシ</sup> （ナハトさん提供）

性別：女

年齢：不明

性格：忠義より愛

備考：零の上司ではないが、それなりの権限を持っている。彩輝の奥さんで見た目は烈火の炎の音遠だが、胸は大きい。趣味は料理と仙薬作りであり、零が仙薬の実験台になっている。

## オリキャラ設定（後書き）

こちらに変更があったら追加しておきます。



## 第十八話 冥府の官吏者の制裁（前書き）

第十八話です。早くも真理奈に鉄槌をくだします。セブンスターズの出す順番を変えました。

## 第十八話 冥府の官吏者の制裁

十代 side

「……………ん、……………あれ？ここは？」

気がつくともベットに寝ていた。……………そういえば、俺はあの時真理奈に刺されて気を失ったんだよな。俺はどのくらいの時間寝ていたんだ？……………みんなはどこに？……………ユベル達は？

「……………十代君、気づいたのね。」

「鮎川先生、……………俺は、……………どうしてここに？」

「万丈目君が倒れていたあなたを運んだのよ。出血が多いのに何故か傷がなかったけど。……………あとこれ、十代君のデッキと倒れていた所に置いてあった手紙よ。」

万丈目が運んだのか。……………後でお礼言っとかないとな。手紙は後で読んでおこう。

「……………どのくらい俺は寝てたんですか？」

「六日間よ。」

「む、六日間も！」

……………道理で長いと思ったよ。

「……………鮎川先生、俺を刺したのはh「真理奈さんでしょ。」え?」

「十代君を刺したのは原田真理奈さんよ。」

何で知っているんだ?

「万丈目君が問い詰めて真理奈さんがすぐに認めたのよ。」

「……………そ、そうですか。」

……………すぐに認めたのかよ。普通はやっていないって言うだろ。

「真理奈はどうなったんですか?」

「……………退学になったわよ。」

まあ、当たり前だよな。

「十代君、しばらくは激しい運動は禁止、でも、出歩いてても大丈夫よ。……………今は夕方だから寮に戻ってもいいわよ。」

「ありがとうございます。」

さてと、レッド寮に戻るか。

「アニギー、本当によがっただー！！！」

「……翔、頼むから泣かないでくれ。」

「本当に良かったんだな。十代、大丈夫か？」

「激しい運動は控えてくれだつてさ。」

レッド寮に戻るとみんなから声をかけられた。……… 本当に俺は幸せ者だよ。

「やっと戻ってきたか、十代。全く、俺がいなかったらお前は死んでいたんだぞ！」

「ありがとな、万丈目。」

「万丈目サンダー！！！」

……… こんなときまでこだわるのかよ。まあ、別にいいか。

「そういえば、セブンスターズは誰か来たのか？」

「ああ、二人来た。」

……… 二人？

「ダークネスという男とタニヤという女だ。ダークネスは天上院君

が、タニヤは三沢がデュエルして勝った。」

「……………そうか。」

……………本来と順番が違う。平行世界だから違うのか。

「これは預かっていた鍵だ。お前が持っている。」

「ああ、ありがとな。」

十代 side out

零 side

今夜。さて、仕事だな。

「カイエン、今回の標的は？」

【はい、名前は原田真理奈。この世界の遊城十代を殺そうとした女です。】

「……………やり過ぎた転生者っていうのはそいつか。ゴーズ、この世界の遊城十代って確か……………」

【はい主人、転生者ですが彼は問題ありません。】

【グルウ、グルウ！】

……お詫びとして後で会っておくか。……どうやらヴァンダル  
ギオンが見つけたようだな。

「……………何で私は退学になったの？なんで？私はユベルから十代  
君を救おうとしただけなのに！！どうして！！！」

……………全く、コイツ頭おかしいんじゃないのか？

「見つけたぜ！」

「誰？」

「テメエだな、原田真理奈っていうやつは！」

「そうだけど…………。」

よし、お仕事開始だ。…………と、その前に、

「テメエ、自分が何をしたか分かってるのか？」

「……………私は十代君を救おうとしただけ。…………それなのに、それ  
なのに！！どうしてこうなったの！？」

……………ダメだ、救いようがない程の馬鹿だな、こいつは。

「テメエは十代を殺そうとしたんだ。あいつは生きているが下手し  
たら死んでいたんだぞ！！」

「……………十代君が私の言うことを聞かないのが悪いんだよ。だ

から刺したの。その何が悪いの!？」

……………もういい。

「俺とデュエルしてもらっぜ。俺が勝ったら俺の言うことを大人しく聞いてもらっぜ!」

「デュエルね、分かったよ。でも私が勝つんだから!」

「「デュエル!」!」

零LP4000

真理奈LP4000

「俺のターン、ドロー!俺は《豊穰のアルテミス》を召喚!カードを四枚伏せて、ターンエンド!」

零

モンスター 豊穰のアルテミス

魔法、罫 伏せ四枚

いろいろと仕事を立て込んでいるからさっさと終わらすか。

「四枚も伏せてどうしたの?私のターン、ドロー!」

「カウンター罫発動!《強烈なはたきおとし》。そのドローしたカードを墓地に捨ててもらっぜ。そして、《豊穰のアルテミス》の効果発動!カウンター罫が発動した時、俺はデッキからカードを一枚ドローする。」

「くっ、私は《処刑人 マキユラ》を召喚！」

処刑人 マキユラ ATK1600

それは禁止カードだろ！……でも、関係ねーな。

「カウンター罠発動！《キックバック》。モンスターの召喚、反転召喚を無効にし、手札に戻す！《豊穰のアルテミス》の効果によりデッキからカードを一枚ドロウする。」

「……こうなったら魔法カード、《王家の神殿》を発動！」

……こいつのデッキには禁止カードしか入ってねーのかよ！

「カウンター罠発動！《マジック・ジャマー》。手札を一枚捨て、魔法カードの発動を無効にし、破壊する！《豊穰のアルテミス》の効果によりデッキからカードを一枚ドロウ。」

「ちよつと！？卑怯よそんなの！！！」

「禁止カードを使っているテメエが言うな！！！」

【「もつともです。」】

【「同じく。」】

何で禁止カードを使っているんだこいつは？最低限のルールは守れよー



「カウンター罠で相手のカードを無効にした時、このカードは手札から特殊召喚できる。来い、《冥王竜ヴァンダルギオン》！」

【グルルウウウ!!】

冥王竜ヴァンダルギオン ATK 2800

「《冥王竜ヴァンダルギオン》はカウンター罠で魔法カードを無効にして特殊召喚した時、相手に1500ポイントのダメージを与える！」

「きゃあー！」

真理奈 LP 4000 2500

「……………私はカードを一枚伏せてターンエンドだよ。」

真理奈

モンスター なし

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！罠カード発動！《トラップ・スタン》。このターンのエンドフェイズまでこのカード以外の罠カードの効果を無効にする。そして、バトル！《冥王竜ヴァンダルギオン》で直接攻撃！冥王葬送！！！」

「きゃあー！！！」

真理奈 LP 2500 0

……弱いな。

【御主人、この女はどうしますか？】

「ああ、こいつは「卑怯よ！」な、なんだよ急に！」

真理奈はいきなり声をあげた。

「何でそんなにカウンター罠が多いの！？そんなの卑怯よ！！このデュエルは無効だよ！！！」

「だから、禁止カードを使っているテメエが言うな！！！」

もういい、強行手段だ！

「……いでよ、地獄の門！」

真理奈の後ろに門が現れ扉が開いた。扉が開いた門からは灼熱地獄が見える。

「こ、これは！？」

「原田真理奈、お前は灼熱地獄に行け！それがお前の受ける罰だ！」

「地獄！？なんで私が地獄に行かなきゃなんないの！私は悪いことは何もしてないんだよ！」

「……ゴーズ！カイエン！」

【【はっ！】】

「ちょ、ちよっと!?!なにをするの!?!離して!!」

ゴーズが真理奈の右腕を、カイエンが真理奈の左腕を掴み、門の中に押し込んだ。

「嫌だよ！私は十代君を助けなきゃいけないの!!」

「煩い！早く行け!!」

そう言っつて門を締めた。……………やっつと行っつたか。

「二人とも、怪我はないな。」

【【はい。】】

「よし、あいつの所に行くぞ!」

零side out

十代side

あの後、万丈目から詳しく聞いた。ダークネスの正体は明日香の兄である天上院吹雪だった。そして、タニヤの時にはクロノスと多くの生徒達が決闘場を造らされていたみたいだ。……………後で生徒達にはバイト代はきちんと支払われたらしい。夜になって部屋に戻った

ら、ユベル達が出てきて抱きついてきた。

【…………でも、十代が無事で本当によかったよ。】

【クリ〜。】

「みんな、心配かけてごめんな。」

【明日から頑張りましょう！】

【そうだな！】

「…………まだ、あまり無理はできないけどな。」

少しだるいが無理しなければ大丈夫だろう。

「…………で、これは？」

【これは《スパークマン》の人形だね。】

【こっちはアップルパイですね。食べましょうよ。】

「旨そうだな、俺にも食わせてくれよ。」

「ああ、いいぞ。……………って!?!」

声が出たので振り返ると窓の所に男と精霊が二人いた。

「誰だ!」

「はじめまして、だな。俺は天川零だ。冥府の官吏者をやってる。こいつらは俺の部下のゴーストとカイエンだ。」

【はじめまして。】

【よろしくな。】

「冥府の……官吏者？」

「まあ、簡単に言つと地獄の門番だ。ここに来た理由は2つだ、転生者の遊城十代。」

「なつ、何故それを!？」

「気にすんな、知っていることだからな。」

いや、そういう問題じゃないからな。

「まず一つ目は原田真理奈っていう女のことだ。」

【……………あの女はどうなったの。】

「俺が地獄に送ったよ。」

【……………自業自得だね。】

【そうですね。自業自得です。】

【だな。】

「……………で、2つ目はと、カイエン。」

【はい御主人。十代さん、受け取って下さい。】

「こ、これは、デュエルディスク？」

「俺が丹精込めて作ったデュエルディスクだ！大事に使えよ！」

色は使っていたのと変わらないが今まで使っていたのよりは断然軽い。

「それには、オートシャッフル機能とオートサーチ機能は着けておいたぜ。」

「本当か!？」

その2つがあるのは便利だ。

「まあ、海馬にその2つの機能のデータは渡してあるから後々出てくるぜ。」

「か、海馬に!？」

「ちなみにアテムとは知り合いだ。」

「あ、アテム!?!？」

……ちよ、ちよっと待て。知り合いがすごいな……。

「アップルパイ食べないのか？」

「……………半分持っていてくれ。」

「ああ、ありがたくもらっていっけ。」

……………衝撃が大きすぎて立ち直れない。

「じゃ、俺達は帰るわ。」

「……………あ、ああ、分かった。」

【十代さん、お気をつけて。】

そう言って零達は窓から帰っていった。

【クリ〜。】

【なんか……………、嵐が去っていったような……………。】

【そう……………だね……………。】

【ユベルさん？】

ユベルを見ると眠たそうな顔をしていた。

「眠いのか？」

【……………うん。】

【ユベルさん、無理が出てきましたね。】

【……………ごめん、……………でも……………。】

【いくら心配だからって、六日間ずっと起きていたからだよ。】

【クリ〜。】

「……………ユベル。」

【……………何？】

「一緒に寝るか？」

【……………うん。】

その後、ユベルはすぐに寝てしまった。……………ユベルに無理をさせちゃったな。

「……………ごめんな、心配かけて。」

俺は一緒に寝ているユベルの頭を撫でながらそう言った。ユベルの寝顔は安らいでいた。

「……………俺も寝るか。」

十代 side out



**第十八話 冥府の官吏者の制裁（後書き）**

次も頑張つて書いていきます。

第十九話 満足（前書き）

第十九話です。今回は自重はしません。

## 第十九話 満足

十代 side

「…………アレを飲んでから体が楽になったな。」

俺が目覚めてから数日後、ユベルは元気になった。ちなみにアレとは、俺が目覚めた日の翌日に零が俺の部屋に来た時に、零が持ってきた仙薬のことだ。人間界の薬よりは効能は高いと言っていた。……………ただ、色が緑色で味は殺人的に苦かったけど……………。良薬は口に苦しはこのことだな。零とはデュエルしたり、話もした。零は転生者ではないこと、アテムが知り合いの理由などを零は話してくれた。

【……………何かいろいろとありましたね。】

【十代、セブンスターズは後何人いるんだ？】

「ダークネスとタニヤが出たからあと五人……………かもしれない。」

【かもしれない？】

「本来とは違う展開になっているから詳しくは俺でも分からない。」

【……………そうかい。】

【クリ〜。】

これからどうなるのかは分からない。……………ただ、やるしかないな。

「どんなことがあってもいいように準備はしておくか。」

【でも、無理は駄目ですよ。】

「分かってるよ。」

翌日

今は体育の授業だが俺は見学している。あと数日したら運動しても大丈夫と言われた。

「……………にしても、零は強かったな。」

【カウンター罠って使い方次第で相手に何もさせずに勝てるんだね。

】  
零とデュエルした時、零が先行の時は全く手も足も出なかった。モンスターを召喚したら破壊されるわ手札に戻されるわ、魔法や罠を使うと無効化されて《冥王竜ヴァンダルギオン》を特殊召喚されるわ、から空きの状態で直接攻撃すると《ゴーズ》と《カイエン》を出されるわで散々な結果だった。一番精神的につらかったのは《魔宮の賄賂》と《強烈なはたきおとし》と《豊穣のアルテミス》のコンビだった。まあ、俺が先行の時は《王宮のお触れ》や《トラップ・スタン》を使って何とか凌いだけど。

【午後から実技の授業だけど大丈夫かい？】

「……………そういえばそうだった。」

デッキ調整はしておこう。

午後の実技の授業の時間になった。内容はやりたい人とデュエルすること、要は自由にデュエルしていいってこと。……………で、俺の相手はというと、

「ちょっとももえ！相手は私よ！」

「ジュンコさん、相手は私がいたしますから下がっててくださいましー！」

……………何故かジュンコとももえ。しかもどっちがやるか言い争っている。なんでだ？

「……………面倒だから二人いっぺんに相手してやるよ。二人はタッグで初期ライフは8000、俺は4000でいいから。」

「えっ!?!」

驚くなよ。

「いいわよ、絶対に倒してやるんだから!」

「覚悟してくださいませ!」

……さあ二人とも、俺を満足させてくれよ!

「デュエル!」

十代LP4000

ジュンコ、ももえLP8000

十代side out

明日香side

十代は何を言っているの!? ジュンコとももえと一緒に相手にするって、しかも初期ライフポイントの差が2倍、……でも、何故か十代ならできるって思うのは私だけかしら? ちなみに最初のターンは全員攻撃できない。制裁タッグデュエルの時と同じことをするのね。だけど十代は1人。しかも順番はジュンコ ももえ 十代の順、十代が不利だけど大丈夫かしら?

「私のターン、ドロー! 私はフィールド魔法、《伝説の都 アトランティス》を発動! これによって手札のフィールドの水属性モンス

ターのレベルは一つ下がり、攻撃力と守備力は200ポイントアップする。そして、《ギガ・ガガギゴ》を召喚！」

ギガ・ガガギゴ L V 5    4    A T K 2 4 5 0    2 6 5 0

「そしてカードを一枚伏せてターンエンドよ！」

ジュンコ、ももえ

モンスター    ギガ・ガガギゴ

魔法、罨    伝説の都    アトランティス、伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は永続魔法、《黒蛇病》を発動しますわ。私のスタンバイフェイズに互いのプレイヤーは200ポイントのダメージを受けます。次のスタンバイフェイズからは受けるダメージは倍になりますわ。そして、《デス・ウオンバット》を召喚します。《デス・ウオンバット》の効果により私は効果ダメージを受けません。カードを一枚伏せてターンエンドですわ！」

デス・ウオンバット A T K 1 6 0 0

ジュンコ、ももえ

モンスター    ギガ・ガガギゴ、デス・ウオンバット

魔法、罨    黒蛇病、伝説の都    アトランティス、伏せ二枚

ジュンコとももえはいつも通りね。

「さてと、俺のターン、ドロー！魔法カード《サイクロン》を発動！《黒蛇病》を破壊させてもらっぜ！《E・HEROバブルマン》

を召喚！効果発動！《バブルマン》が召喚、反転召喚、特殊召喚に成功した時、自分フィールドに他のカードが存在しない場合、デッキからカードを二枚ドロウする。そして魔法カード、《HERO・sボンド》を発動！自分フィールドに《E・HERO》と名のつくモンスターが存在する時発動することができる。手札のレベル4以下の《E・HERO》と名のつくモンスターを二体特殊召喚する。《E・HEROオーシャン》と《E・HEROエアーマン》を特殊召喚！《エアーマン》の二つ目の効果発動！召喚、特殊召喚に成功した時、このカード以外の《E・HERO》と名のつくモンスターの数だけフィールドの魔法、罫カードを破壊する。ジュンコともえの伏せカードを一枚ずつ破壊！」

「「えっ！！」」

バブルマンLV4 3 ATK800 1000

オーシャンLV4 3 ATK1500 1700

エアーマンATK1800

十代の場に《エアーマン》が現れ、風をおこしジュンコともえの伏せカードを破壊した。ジュンコの伏せカードは《炸裂装甲》、ともえの伏せカードは《魔法の筒》みたいね。

「魔法カード、《強欲な壺》を発動！デッキからカードを二枚ドロウする。そして魔法カード、《融合》を発動！手札の《E・HEROエッジマン》と《E・HEROスパークマン》を融合。来い！《E・HEROプラズマ・ヴァイズマン》！」

プラズマ・ヴァイズマンATK2600



「魔法カード、《命削りの宝札》を発動！手札が五枚になるようにデッキからカードをドローする。五ターン後に全て捨てる。手札は0枚だから五枚ドロー！そして、《プラズマ・ヴァイズマン》の効果発動！手札を一枚捨て、相手フィールドに表側攻撃表示で存在するモンスター一体を破壊する。ちなみにこれは手札がある限り発動することができるぜ。一枚捨てて、ジュンコの《ギガ・ガガゴゴ》を、もう一枚捨て、ももえの《デス・ウォンバット》を破壊！」

「そんな！？」

………これでジュンコ達のフィールドは《伝説の都 アトランティス》だけね。

「まだまだ行くぜ！俺は魔法カード、《ミラクル・フュージョン》を発動！フィールドの《E・HEROバブルマン》と墓地の《E・HEROスパークマン》をゲームから除外し融合。現れる！《E・HEROアブソルトZero》！《E・HEROアブソルトZero》はフィールドに存在するこのカード以外の水属性モンスターの数×500ポイント攻撃力がアップする！」

アブソルトZero LV8 7 ATK2500 2700  
3200

「俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター オーシャン、エアーマン、プラズマ・ヴァイズマン、アブソルトZero

魔法、罨 伏せ二枚

「……な、………なによ、この展開力は……。1ターンで融合モンスターを二体融合召喚するし、十代のフィールドのモンスターは四体で伏せカードは二枚。あ、あり得ないわよ！」

「………まあ、こんなところか。」

「ちょっと!!何すんのよ!!」

「…悪い、少しやりすぎたか?」

「これは少しではありませんわ!!」

「………十代、これが少しというのはおかしいわよ！」

「私のターン、ドロー!私は《ジェノサイドキングサーモン》を召喚!」

ジェノサイドキングサーモン LV5 4 ATK2400 2600

「罨カード発動!《威嚇する咆哮》。このターンは攻撃はできません!さらに水属性モンスターが増えたことにより《アブソルトZero》の攻撃力が上がる!」

アブソルトZero ATK3200 3700

ジュンコのフィールドに《ジェノサイドキングサーモン》が現れるが空間が揺れた。

「わ、私はカードを一枚伏せてターンエンドよ……。」

ジュンコ、ももえ

モンスター ジェノサイドキングサーモン

魔法、罨 伝説の都 アトランティス、伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は《プロミネンスドラゴン》を召喚しますわ！」

プロミネンスドラゴンDEF500

「そしてカードを一枚伏せてターンエンド！この瞬間、《プロミネンスドラゴン》の効果が発動しますわ！エンドフェイズに相手ライフに500ポイントのダメージを与えます！」

十代LP4000 3500

ジュンコ、ももえ

モンスター ジェノサイドキングサーモン、プロミネンスドラゴン

魔法、罨 伝説の都 アトランティス、伏せ二枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《E・HEROオーション》の効果発動！フィールドか墓地のE・HEROと名のつくモンスターを一体手札に戻すことができる。俺は墓地の《E・HEROエツジマン》を手札に戻す。速効魔法、《次元誘爆》を発動！融合モンスター一体を融合デッキに戻し、互いのプレイヤーはゲムから除外されているモンスターを二体まで特殊召喚できる！」

ゲームから除外されているのは十代のモンスターだけね。

「俺は《E・HEROアブソルトZero》を融合デッキに戻し、ゲームから除外されている《E・HEROバブルマン》と《E・HEROスパークマン》を特殊召喚！さらに《アブソルトZero》の効果発動！このカードがフィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊する！」

バブルマン ATK800 1000

スパークマン ATK1600

フィールドから離れたただけであの禁止カードの《サンダーボルト》と同じ効果が発動ですって！？………そういえば私と戦った時は《サイバー・ブレイダー》だけだったわね。

「バトル！《プラズマ・ヴァイズマン》で直接攻撃！」

「させないわよ！罨カード発動！《聖なるバリアーミラーフォース》。」

「カウンター罨発動！《パラドックス・フュージョン》。自分のフィールドの融合モンスター一体をゲームから除外し、魔法、罨、モンスター効果の発動のいずれかを無効にし、破壊する！俺は《E・HEROプラズマ・ヴァイズマン》をゲームから除外し、《聖なるバリアーミラーフォース》の発動を無効にし、破壊する！この効果でゲームから除外した融合モンスターは次の俺のターンのエンドフェイズに俺のフィールドに戻る。」

こ、これってサクリフェイス・エスケープ！？なんで十代はこんな

ことを簡単にやれるのよ!?

「続くぜ!《エアーマン》、《バブルマン》、《オーシャン》、《スパークマン》で直接攻撃!」

「させませんわよ!罠カード発動!《ドレインシールド》。私は《エアーマン》の攻撃を無効にしその攻撃力分ライフを回復しますわ!」

ジュンコ、ももえLP8000 9800 5500

「俺はターンエンドだ!」

十代

モンスター バブルマン、オーシャン、スパークマン、エアーマン

魔法、罠 なし

ライフはジュンコとももえが有利なのは変わりないけど、フィールドは十代の方が有利ね。

「私のターン、ドロー!やった!私は魔法カード《ライトニング・ボルテックス》を発動!手札を一枚捨てて、相手モンスターを全て破壊する!さらに《アトランティスの戦士》を召喚!」

アトランティスの戦士LV4 3 ATK1900 2100

「バトル!《アトランティスの戦士》で直接攻撃!」

「くっ!」

十代LP 3500 1400

「私はこれでターンエンドよ!」

ジュンコ、ももえ

モンスター アトランティスの戦士

魔法、罨 伝説の都 アトランティス

「私のターン、ドロ! 私は《ボーガニアン》を召喚!」

ボーガニアン ATK 1300

「バトル! 《ボーガニアン》で直接攻撃ですわ!」

「うわあ!」

十代LP 1400 100

「これで勝ちが決まりですね、私はターンエンドですわ!」

ジュンコ、ももえ

モンスター アトランティスの戦士、ボーガニアン

魔法、罨 伝説の都 アトランティス

十代のライフは残り100、次のももえのターンが来たら十代の負けね。

「俺のターン、ドロー！……俺は魔法カード《魔法再生》を發動！墓地の《強欲な壺》を墓地から手札に加えて發動！デッキからカードを二枚ドローする。そして魔法カード《ミラクル・フュージョン》を發動！」

「……に、二枚目の《ミラクル・フュージョン》！？」「」

《強欲な壺》でそのカードを引いたの！？……まさに奇跡<sup>ミラクル</sup>ね。

「俺は墓地の《E・HEROSパークマン》と《沼地の魔神王》をゲームから除外し融合。来い！《E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン》！《E・HEROシャイニング・フレア・ウイングマン》は墓地に存在するE・HEROと名のつくモンスターの数×300ポイント攻撃力が上がる！墓地には四体のE・HEROがいる。さらに墓地の《E・HEROネクロ・ダークマン》の効果を發動！《ネクロ・ダークマン》が墓地に存在する時に一度だけ、手札のレベル5以上のE・HEROと名のつくモンスターを生け贄なしで召喚することができる。俺は《E・HEROエッジマン》を召喚！」

エッジマン ATK 2600

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 2500 3700

《沼地の魔神王》と《E・HEROネクロ・ダークマン》は《E・HEROプラズマ・ヴァイズマン》の効果のコストの時に墓地に送ったのね。

「そして手札の永続魔法、《一族の結束》を發動！墓地のモンスターの元々の種族が一種類だけの場合、俺のフィールドのその種族の

モンスターの攻撃力は800ポイントアップする！俺の墓地に存在するのは戦士族だけ、よって《エッジマン》と《シャイニング・フレア・ウィングマン》の攻撃力はアップする！」

「こ、攻撃力が800ポイントアップする永続魔法ですって!?!」

エッジマン ATK 2600 3400

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK 3700 4500

……成る程ね、このために《ミラクル・フュージョン》で《沼地の魔神王》を墓地から除外したのね。……でも《一族の結束》なんてカードは見たことも聞いたこともないわ。他にも《パラドックス・フュージョン》とかもね。

「バトル!《エッジマン》で《ボーガニアン》を攻撃!パワー・エツジ・アタック!」

「きゃあ、あんまりですわ!」

ジュンコ、ももえ LP 5500 3400

「《シャイニング・フレア・ウィングマン》で《アトランティスの戦士》を攻撃!シャイニング・シュート!」

「つつ!……でもまだよ!」

ジュンコ、ももえ LP 3400 1000



「《シャイニング・フレア・ウィングマン》の効果発動！相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！」

「「えっ！？きゃあー！ー！！！」

ジュンコ、ももえLP10000

ま、まさか二人を相手にして勝つなんて……………、夢じゃないわよね？

「……………まだ満足できないな。」

あれだけやってまだ物足りないの！？もう充分でしょ！？

明日香 side out

第十九話 満足（後書き）

《魔法再生》は原作効果です。

番外編 2 零の上司（前書き）

番外編です。甘いので気を付けてください。

番外編2 零の上司

十代 side

目が覚めた日の翌日、普通に授業を受けてきた。まだ体がだるいけど。……………で、授業は早めに終わったので部屋に戻った。

「……………で、なんで零が俺の部屋にいるんだ？」

「細かいことは気にすんなよ。」

しばらくは零と話をしたりデュエルをした。（内容は第十九話を参照）

「……………そういえば体の方は大丈夫か？」

「まだ体がだるいんだ。」

「そうだと思っていいい物持ってきたぜ。こいつを飲みな。」

そう言うと零は白磁の瓶を取りだし俺の部屋にあるコップを持ってきて注いだ。が、

「こんな緑色の飲み物なんか飲めるか!!」

「失礼だな、この仙薬は人間界よりも効能がいいんだぜ。体調不良なんかすぐ吹き飛ぶんだ。」

「……………本当に大丈夫なんだよな？」

「ああ、一気に飲めよ。その方が効能が早く出る。」

俺は覚悟を決めて一気に飲んだ。

「……………ただし、味が殺人的に苦いけどな。」

「うっ！！！」

に、苦！！

しばらくはのたうち回ったが、体のだるいのが無くなった。

「……………あ、ある意味すごいな、これは。」

「だろ、俺もこいつには世話になっているんだ。俺が原因で改良されているし、これを飲めば熊ものたうち回る代物だ。」

「酷いなそれは！そんな物を俺に飲ませたのかよ！！」

「これでもマシになった方だぞ！これになるまで俺が実験台になったんだよ！」

「わ、悪い……。」

「だいたい、あの時なんかよ……。」

十代 side out

零 side

「……やつと書類が片付いた。」

【御主人、お疲れ様です。お茶をいれてきました。】

「ああ、悪いな。」

いろいろと仕事が溜まっていたがこの書類を出せば休める。

「さてと、これを出して、零、元気にやってるかい？……あつちから来たか。」

俺が書類を持って出ようとしたら一人の男が入ってきた。

【あ、彩輝さん。お久しぶりです。】

「カイエン達も元気そうだね。」

この男は彩輝サイキ、俺を冥府の官吏者にスカウトした張本人であり、俺の上司。さらに閻魔大王の長男である。

「……………で、なんか用が会ってここに来たんだよな。」

「まあ、君達の仕事の進捗率を見に来たのさ。それと「あなた〜！」おっと、どうしたんだい、玻凜？」

「私を置いていくなんて酷いわよ！」

「ゴメンゴメン、でもこういったシチュエーションも君とだと楽しいからね。」

「もう！あなたってば、いじわる！」

……………で、彩輝に抱きついている女が玻凜。彩輝の奥さんで地獄ではそれなりの権限は持っている。

「……………で、用がないんなら帰れよ！それ以前にいつまでイチャイチャしているつもりだ！このバカップル！！！」

そう、この二人は俺と会った時からずっ……………とこんな感じなんだよ。結婚して結構な時間が経っているがいまだに新婚さんの雰囲気を出している。おかげで俺らは苦労しているんだ。

「まあ、僕達の結婚は父上も認めてくれているんだし、気にしない気にしない。」

「そういう意味じゃねえ……………！！！」

あー、変なオーラが出て来やがった。

ドスンッ！！

「な、なんだ！？」

【し、主人。ヴァ、ヴァンダルギオンが、砂糖を吐いて、倒れ……  
…ぶはっ！！】

【ゴーズ！？ヴァンダルギオン！？しっかりして下さい！】

……二人が砂糖を吐いて倒れやがった！！ヴァンダルギオンはで  
かいから吐いた砂糖の量が多い！

【御主人、二人が砂糖を………ぶはっ！！】

「カイエン！？」

カイエンまで砂糖を吐いて倒れやがった！！………ヤバい、どん  
どん甘くなってきたやがる。

「零、甘くなってきたらならこれを飲むといいよ。甘いのが一  
瞬でなくなるから。」

「………あんたらが甘くしたんだろ。早く飲ませろ！」

俺は一気に飲んだ。

「うっ！？苦！！てか、なんだよこの味は！？」

「うっん、ちょっと配分を間違えちゃったかしら」



「……………おい、これってまさか！」

「玻凜が新しく作ったした仙薬だよ。どうかな？」

「不味いに決まってるだろ！！」

「ヤバイ、甘いのと苦いのがダブルで来やがった。」

「何がいけなかったのかしら？」

「もう、君は……………でも、そんな君を僕は愛しているよ。」

「私もよ、あなた。」

【【【ぶはっ！！！】】】

俺達はしばらくは仕事ができなくなった。

零side out

十代side

「……………まあ、さっき話したことはほんの一部だ。」

「……………うっ、甘過ぎる。」

「ゴーズ達も砂糖を吐いて倒れるから大変なんだよ。」

た、大変って言葉しか見つからない。

「でも、これをこっちの世界に持ってきて良かったのか？」

「本来はいけないんだが、転生者云々で俺も仕事が忙しいし、対処させるお前の回復を早めただけだ。それとお前が知っている原作知識もある程度しか役に立たなくなるからな。」

「やっぱり俺のようなやつが原因か？」

「いいや、この世界は平行世界だから本来とは違うことが起きてもおかしくはない。」

「……………そうか。」

「まあ、お前はお前だし、お前だけの物語を作ってみな。俺は俺の仕事をするだけだ。」

そっくだよな。

「零、仕事頑張れよ。」

「……………頑張りますよ、っと。」

十代 side out

番外編2 零の上司（後書き）

オリキャラの設定も追加しました。

第二十話 降臨する究極時械神（前書き）

第二十話です。いろいろとあつて遅くなりました。

## 第二十話 降臨する究極時械神

ユベルside

この前の実技の授業の翌日、新たなセブンスターズが現れた。聞いた話だと現れたのはカミューラっていうヴァンパイアの末裔らしい。カイザー亮とクロノスが挑んだらしいが二人とも負けてしまい鍵は奪われ、二人は人形にされてしまった。

……………で、今は十代と僕達はカミューラの城の前にいる。

「一番厄介なのは《幻魔の扉》だ。」

【でも、対策はしてあるんですよ。】

「ああ。」

【……………それよりさ、そのデッキで行くつもりかい？事故ったらどうするの？】

「大丈夫だ。絶対に勝つ！」

……………まあ、十代ならなんとかなる、かな。

「ようこそ、私の屋敷へ！」

「お前がカミューラか、俺とデュエルしろ！」

ちよつと十代が怒っているね。………まあ、なっていないからましだね。

「いいわよ坊や。かかってきなさい！」

「デュエル！！！」

十代LP4000

カミューラLP4000

「先攻は坊やからでいいわよ。」

「じゃあ、遠慮なく、ドロー！俺は《時械巫女》を特殊召喚！」

時械巫女ATK0

「《時械巫女》は自分フィールドにカードがない場合、手札から特殊召喚することができる。そして《時械巫女》は天使族モンスターを生け贄召喚するとき一体で二体分の生け贄とすることができる。

俺は《時械巫女》を生け贄に《時械神ザフィオン》を召喚！」

時械神ザフィオンATK0

「レベル10で攻撃力が0？」

ステータスだけで時械神を見ない方がいいよ。

「時械神を見くびらない方が身のためだぜ。俺はカードを四枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター 時械神ザフィオン

魔法、罫 伏せ四枚

「私のターン、ドロロー！私は永続魔法、《ミイラの呼び声》を発動！私のフィールドにモンスターが存在しない場合、1ターンに一度だけ、手札からアンデッド族モンスターを一体特殊召喚できるわ。私は《ミイラの呼び声》の効果を発動し、手札から《ヴァンパイア・ロード》を特殊召喚！さらに私のフィールドの《ヴァンパイア・ロード》をゲームから除外し、《ヴァンパイア・ジェネシス》を特殊召喚！さらに《不死のワーウルフ》を召喚！」

ヴァンパイア・ジェネシス ATK3000

不死のワーウルフ ATK1200

「これで私の勝ちよ！《ヴァンパイア・ジェネシス》で《時械神ザフィオン》を攻撃！ヘルビシャス・ブラット！」

《ヴァンパイア・ジェネシス》が《時械神ザフィオン》に攻撃をするが、《時械神ザフィオン》には傷ひとつついていない。

「な、なんで破壊されないのよ!？」

「《時械神ザフィオン》は戦闘及びカード効果では破壊されず、表

側攻撃表示で存在する限りこのカードの戦闘によって発生する俺への戦闘ダメージは0になる。そして《時械神ザフィオン》の効果発動！このカードの戦闘終了後、相手の魔法、罠カードを全て持ち主のデッキに戻す！」

「なっ！《ミイラの呼び声》が!?!」

《ミイラの呼び声》は《神の居城 ヴアルハラ》のアンデッド版なんだよね。

「くっ、私はカードを二枚伏せてターンエンドよ！」

カミューラ

モンスター ヴァンパイア・ジェネシス、不死のワーウルフ

魔法、罠 伏せ二枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《時械神ザフィオン》はデッキに戻る。そして、《時械神ザフィオン》が自身の効果でデッキに戻った時、手札が五枚になるようにドローする！」

「何よそのインチキ効果は!?!」

《幻魔の扉》っていうチートカードを使っているやつが何を言っているんだか。

「でも、これで坊やのフィールドはから空きね。次の私のターンで終わりよ。」

「それはどうかな。俺は永続罠、《虚無械アイン》を発動！さらに



《虚無械アイン》を墓地に送り、永続罫、《無限械アイン・ソフ》を発動！」

十代のフィールドに鉄の輪が1つ出てきて、すぐにそれが2つになり、の形になった。……………自重はしないんだね。

「《虚無械アイン》は自分のフィールドにモンスターが存在しない場合、手札のレベル10のモンスターを一体を生け贄なしで召喚できるが攻撃力が0になる。フィールドに《時械神》が一体存在するとき、俺は他の《時械神》を召喚、反転召喚、特殊召喚することはできない。だが、《無限械アイン・ソフ》は攻撃力が0になることは《虚無械アイン》と同じだが、召喚制限効果を無効にして、手札から可能な限り特殊召喚することができる！俺は手札から《時械神サンダイオン》、《時械神ラフィオン》、《時械神ミチオン》、《時械神ラツイオン》を特殊召喚する！」

時械神サンダイオンATK4000 0

時械神ラフィオンATK0

時械神ミチオンATK0

時械神ラツイオンATK0

「さらに魔法カード《命削りの宝札》を発動！デッキからカードを五枚ドロ―し、5ターン後に全て墓地に捨てる。そして手札から《時械神カミオン》を特殊召喚！」

時械神カミオンATK0

1ターンで五体の時械神を特殊召喚するなんてさすがだね。

「バトル！」

「させないわよ！メインフェイズ終了時に罠カード発動！《威嚇する咆哮》。」

時械神達が攻撃しようとするが空間が揺れ、動きが止まった。

「……………なら俺はターンエンドだ。」

十代

モンスター 時械神サンダイオン、時械神ラファイオン、時械神ミチオン、時械神ラツイオン、時械神カミオン

魔法、罠 無限械アイン・ソフ、伏せ二枚

「私のターン、ドロー！」

「この瞬間、《時械神ラツイオン》の効果発動！相手がドローフェイズにカードをドローした時、相手に1000ポイントのダメージを与える！」

「くうう、……………だけど、いい気にならない方がいいわよ！」

カミュラLP4000 3000

やっぱり闇のデュエルだからダメージが実体化している。

「十代！何故一人で……………って、そ、そのモンスター達は！？」

「三沢、……………それより、いつからそこに？」

「デュエルが始まってからここにいたよ！」

いつの間にか三沢がいた。……………僕、全然気づかなかったんだけど。

【早くからいたんですね。】

【……………俺は気づかなかった。】

【……………クリ。】

三沢って《光学迷彩アーマー》でも装備しているのかな？それとも気配を消すのがうまいのかな？

「十代、気をつける！」

「分かってるよ。《幻魔の扉》だろ。」

「やれやれ、分かっているのね。そこまで分かっているのなら使ってあげるわ！私は魔法カード《幻魔の扉》を発動！」

「使わせるわけないだろ！カウンター罫発動！《封魔の呪印》。手札の魔法カードを一枚捨て、魔法カードの発動を無効にし、破壊する。そして、その魔法カードはこのデュエルでは使用できない！」

幻魔の扉が現れて扉が開くがすぐに閉まり消えていった。

「……………これでもう《幻魔の扉》は使えないな。」

「くっ、私はターンエンドよ！」

カミューラ

モンスター ヴァンパイア・ジェネシス、不死のワーウルフ

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイスに俺のフィールドの時械神達はデツキに戻る。」

時械神達は光となって消えていった。

「そして、《無限械アイン・ソフ》の効果で手札の《時械神メタイオン》、《時械神ハイロン》、《時械神サディオ》、《時械神ガブリオン》を特殊召喚する！」

時械神メタイオンATK0

時械神ハイロンATK0

時械神サディオATK0

時械神ガブリオンATK0

「バトル！《時械神メタイオン》で《ヴァンパイア・ジェネシス》を攻撃！」

「カウンター罠発動！《攻撃の無力化》。相手モンスターの攻撃を

無効にし、バトルフェイズを終了させる！」

《時械神メタイオン》が炎を出すが渦に吸い込まれた。

「俺はターンエンドだ！」

十代

モンスター 時械神メタイオン、時械神ハイロン、時械神サディオン、時械神ガブリオン

魔法、罨 無限械アイン・ソフ、伏せ一枚

「私のターン、ドロー！……………私は《ゴブリンゾンビ》を召喚！」

ゴブリンゾンビ ATK1100

「ターンエンド！」

カミューラ

モンスター ヴァンパイア・ジェネシス、不死のワーウルフ、ゴブリンゾンビ

魔法、罨 なし

ユベルside out

十代side

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに俺のフィールドの時械神達はデッキに戻る。」

俺のフィールドの時械神達は光となって消えていった。

「ふふふ、坊やの手札はその一枚だけ、次の私のターンで本当に終わりよ！」

「このターンで終わりだ。」

条件はすでに整っている。

「俺は《無限械アイン・ソフ》を墓地に送り、永続罠、《無限光アイン・ソフ・オウル》を發動！」

鉄の輪が2つから3つになった。

「そして、《無限光アイン・ソフ・オウル》の効果発動！時械神が十種類召喚されている時、このカードを墓地に送ることで、手札・デッキ・墓地から《究極時械神セフィロン》を一体特殊召喚できる！現れる！《究極時械神セフィロン》！」

究極時械神セフィロン ATK4000

「攻撃力が4000ですって!？」

「《究極時械神セフィロン》の効果発動！1ターンに一度、手札・デッキ・墓地の時械神を攻撃力4000にして、可能な限り特殊召喚できる！現れる！《時械神メタイオン》、《時械神サディオン》、《時械神カミオン》、《時械神ラツイオン》！」

時械神メタイオン ATK 4000

時械神サディオ ATK 4000

時械神カミオン ATK 4000

時械神ラツイオン ATK 4000

「そして、《究極時械神セフィロン》の攻撃力はフィールドの時械神と名のつくモンスターの攻撃力の合計した数値になる！」

「……………と、いうことは!?!」

究極時械神セフィロン ATK 4000 20000

「……………攻撃力20000!?!?!」

いつの間にか明日香と万丈目も来ていたみたいだ。

「バトルだ! 《究極時械神セフィロン》で《ヴァンパイア・ジェネシス》を攻撃! アカシック・ストーム!」

「きゃあああああ!?!」

《究極時械神セフィロン》が《ヴァンパイア・ジェネシス》に向かって光を放った。

カミューラルP30000

カミューラのライフが0になり少しするとカミューラの後ろに幻魔の扉が現れた。

「なっ！何故扉が！？ち、ちょっと、た、助けて！きゃあああああ  
あ！」

幻魔の扉にカミューラが吸い込まれていった。

翌日、カイザーとクロノスは元に戻ったみたいだ。それと余談だが、クロノスのレッド寮の生徒に対する態度が改まっていた。

十代 side out



**第二十一話 黒蠍盗掘団参上！（前書き）**

第二十一話です。いろいろ話を飛ばしました。

## 第二十一話 黒蠍盗掘団参上！

十代 side

カミューラと戦った後、デュエルアカデミアが万丈目グループに買収されそうになったり、ミイラがレッド寮の周りに現れて、俺がアビドス三世とデュエルしたり、何故か闇に堕ちていたタイタンが明日香とデュエルしたりいろいろあった。あと、大徳寺先生が行方不明になった。

で、鍵を持っている俺達は校長に呼び出された。何故か警察の人がいる。

「校長先生、その人は？」

「私は真暮<sup>マクレ</sup>です。」

「皆さんも分かっているように、既に鍵の二つは奪われてしまいました。教員会議をし、警部の方に協力を要請しました。」

成る程、でも黒蠍盗掘団だよなこの真暮警部。

「皆さんはどのように鍵を所持していますか？」

「俺は首にかけている。」

「私もよ。」

「俺は、デッキケースの中に入れている。」

「俺もだ。」

上から万丈目、明日香、俺、三沢の順。……………三沢いたんだ。それで真暮警部の提案でそれぞれ保管場所を決めた。

で、夜。

「……………みんな、準備はいいか？」

【いよよ。】

【クリ。】

【大丈夫です。】

【いいぜ。】

さてと、黒蠍盗掘団の化けの皮を剥いでやるか。俺は寝ているふりをしている。

……………ガチャ。

来た！

「……………さてと、お頭の言う通りならこの部屋の鍵は机の引き出

しの中だったな。」

俺は毛布の中から見た。あいつは《逃げ足のチツク》か。

(ユベル、今だ！)

【分かったよ！《デモンズ・チェーン》！】

「な、なんだこれは！？」

チツクが引き出しに手をかけた瞬間、鎖が体に巻き付いた。

【みんな、今だよ！】

【おう！】

【はい！】

【クリ！】

「分かった！」

ユベル達は実体化し、俺は毛布をどけた。

「お、お前達は！？」

【クリ〜！】

【くらえー！】

【えーい！】

「いてててててて、やめろー！」

ハネクリボー達はチックの顔やら髪などを引っ張っている。

「観念しろ、黒蠍盗掘団の逃げ足のチック。」

「な、なんで俺の名前を！？」

【お頭は《首領・ザルーク》でしょ。】

「お頭の名前まで知ってるのか！？」

驚いているな。

「ユベル、こいつを解放してくれ。」

【いいのかい？】

「ああ、鍵はデッキケースの中にあるから大丈夫だ。」

そついうとユベルは《デモンズ・チェーン》を消した。チックはドアから逃げていった。

【追いかけないんですか？】

「どうぞやら、みんな集まっているみたいだな。」

外に出ると翔や明日香、万丈目達は集まっていた。黒蠍盗堀団も集まっているみたいだ。いつの間にか万丈目が黒蠍盗堀団を炙り出したらしいな。

「十代、あなたの鍵は？」

「ここにある。」

そう言ってデッキケースから鍵を出した。

「みんなの鍵は？」

「奪われてしまったわ。」

「……………つまり、俺以外の鍵はあいつらが持っていると言っことか。」

「少年、一つ賭けをしよう。今から少年と私がデュエルをし、少年が勝つことができたら鍵は全て返そう。だが、私が勝ったら少年の鍵は貰い受ける。」

「いいのか？俺が勝ったら今までの苦勞は水の泡だぜ？」

「構わない。」

「「デュエル！」」

十代LP4000

ザルークLP4000

「私のターン、ドロー！私は魔法カード《増援》を発動！デッキから《首領・ザルーク》を手札に加える。そして召喚！ここはせっかくだから、バトルの場には我々自身が参上しよう。」

そう言っただルークはフィールドに歩いていった。

首領・ザルークATK1400

「我々自身？」

「あいつらはカードの精霊だ。」

「カードの精霊？」

「あいつらってことは、あの五人は人間ではなくカードの精霊ってこと？」

「まあ、そんなところだ。」

「私は魔法カード《強欲な壺》を発動！デッキからカードを二枚ドロイする。そして魔法カード《黒蠍団召集》を発動！自分フィールドに《首領・ザルーク》が存在するとき手札の《黒蠍》と名のつくモンスターを全て特殊召喚する。ただし、同名カードは一枚だけだ。」

いくぞ野郎共！」

「「「「おう！」「」「」

ザルークの言葉にメンバーが集まっていく。初手から全員が揃っているのか！？

「黒蠍一の力持ち！強力のゴーグ！」

「黒蠍の紅一点！茨のミーネ！」

「どんな畏でも朝飯前！畏外しのクリフ！」

「お宝いただきや後はトンズラ！逃げ足のチツク！」

「「「「我ら、黒蠍盗掘団！」「」「」

黒蠍 強力のゴーグATK1800

黒蠍 茨のミーネATK1000

黒蠍 畏外しのクリフATK1200

黒蠍 逃げ足のチツクATK1000

黒蠍盗掘団のメンバーが集まり決めポーズを決めた。

「私はカード一枚伏せてターンエンド！」

ザルーク



モンスター　　首領・ザルーク、強力のゴーグ、茨のミーネ、罨外  
しのクリフ、逃げ足のチツク

魔法、罨　　伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROフォレストマン》を召  
喚！」

フォレストマンDEF2000

「カードを二枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター　　フォレストマン

魔法、罨　　伏せ二枚

「アニキが融合を使わない？」

「手札に融合が来ていないみたいね。」

明日香の言う通りなんだけど、次のターンで融合は手札に来る。

「私のターン、ドロー！私は罨カード《黒蠍コンビネーション》を  
発動！このカードは我々黒蠍盗掘団全員がフィールドに存在する時  
発動できる。我々はこのターン相手プレイヤーに直接攻撃すること  
ができる。だが直接攻撃する場合、与えるダメージは一体につき、  
400ポイントになる。」

こいつら効果が厄介なんだよな。

「バトル！少年に直接攻撃！私に続け！」

「……おう！！！！」

「不味い！これを受ければ十代は2000ポイントのダメージだ！」

「……………手札の《速攻のかかし》の効果発動！相手が直接攻撃してきた時、手札のこのカードを墓地に送ることで攻撃を無効にし、バトルフェイズを強制終了させる！」

黒蠍盗掘団が攻撃してくるがそれは《速攻のかかし》に防がれた。

「くっ、私はカードを一枚伏せてターンエンド！」

ザルーク

モンスター 首領・ザルーク、強力のゴッグ、茨のミーネ、罨外のクリフ、逃げ足のチツク

魔法、罨 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！スタンバイフェイズに《E・HEROフォレストマン》の効果発動！デッキが墓地から《融合》を手札に加えることができる。俺はデッキから《融合》を手札に加える。《E・HEROエアーマン》を召喚！《エアーマン》の効果発動！このカード以外のHEROと名のつくモンスターの数だけフィールドの魔法、罨カードを破壊することができる。その伏せカードを破壊する。」

「それにチェインして罨カード発動！《和睦の使者》。このターン、

我々は戦闘によっては破壊されず、戦闘によって発生するダメージは0になる。」

エアーマン ATK1800

エアーマンが破壊したカードは発動した《和睦の使者》だった。空振りか！

「俺はターンエンド！」

十代

モンスター エアーマン、フォレストマン

魔法、罫 伏せ二枚

「私のターン、ドロー！私は永続魔法《連合軍》を発動！私のフィールドの戦士族、魔法使い族一体につき、私のフィールドの戦士族の攻撃力は200ポイントアップする。我々は戦士族なので我々の攻撃力は1000ポイントアップする！」

首領・ザルーク ATK1400 2400

黒蠍 強力のごう ATK1800 2800

黒蠍 茨のミーネ ATK1000 2000

黒蠍 罫外しのクリフ ATK1200 2200

黒蠍 逃げ足のチック ATK1000 2000

「バトル！《黒蠍 強力のゴーグ》で《エアーマン》を攻撃！」

「ごうりきハンマー！」

「カウンター罠発動！《攻撃の無力化》。攻撃を無効にし、バトルフェイズを強制終了させる！」

「……………私はターンエンド！」

ザルーク

モンスター 首領・ザルーク、強力のゴーグ、茨のミーネ、罠外しのクリフ、逃げ足のチツク

魔法、罠 連合軍

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROワイルドマン》と《E・HEROエツジマン》を融合。来い！《E・HEROワイルド・ジャギーマン》！」

ワイルド・ジャギーマン ATK 2600

「そして魔法カード《H ヒートハート》を発動！E・HEROと名のつくモンスターを一体選択し、選択したモンスターの攻撃力は500ポイントアップし、貫通能力を得る。俺は《E・HEROワイルド・ジャギーマン》を選択する！」

ワイルド・ジャギーマン ATK 2600 3100

「さてと、夜も遅いしこのターンで終わりにする！」

「少年よ、このターンで終わらすことが出来るのか？」

「出来るぜ。《ワイルド・ジャギーマン》は相手モンスターに一回ずつ攻撃が出来るのさ！」

「……………何だと!?」「……………」

「バトル!《ワイルド・ジャギーマン》で《黒蠍 強力のゴーク》を攻撃!インフィニティ・エッジ・スライサー1(ワン)!」

「ぐうつ!」

ザルークLP4000 3700

「次!《黒蠍 畏外しのクリフ》に攻撃!インフィニティ・エッジ・スライサー2(ツー)!」

「のわあ!」

ザルークLP3700 2800

「まだまだ!《黒蠍 茨のミネ》に攻撃!インフィニティ・エッジ・スライサー3(スリー)!」

「きゃあ!」

ザルークLP2800 1700

「さらに!《黒蠍 逃げ足のチック》に攻撃!インフィニティ・エッジ・スライサー4(フォー)!」

「いつてえ！」

ザルークLP1700 600

「最後だ！《首領・ザルーク》に攻撃！インフィニティ・エッジ・スライサー5（ファイブ）！」

「うわあああああ！……！」

ザルークLP600 0

黒蠍盗掘団全員が《ワイルド・ジャギーマン》に攻撃され、後ろに倒れた。

「……………お、お頭。」

「……………我々の負けだ。鍵は返そう。」

そう言ってザルークは鍵を返してくれた。

「さてと、お前も野郎共、行くぞ！まだ見ぬお宝が我々を待っている！」「っておい！」

「……………我ら、黒蠍盗掘団……！」

そう言って黒蠍盗掘団は走り去っていった。

「……………」

【 【 【 【 ..... 】【 【 【 【

俺達はあまりにも突然のことに、少しの時間動くことができなかつた。

十代 side out

第二十一話 黒蠍盗掘団参上！（後書き）

次は学園祭編を投稿しようと思います。



第二十二話 学園祭前編 ～黒薔薇の魔女～（前書き）

第二十二話です。学園祭ですがデュエルはありません。

第二十二話 学園祭前編 黒薔薇の魔女

ユベルside

明日香の兄である吹雪が目覚めたらしい。吹雪によると、廃寮で闇のデュエルの研究中に闇に飲み込まれ、ダークネスになったと言っていた。さらに、それを指導していたのは今行方不明になっている大徳寺先生だと言っていた。

【なんで大徳寺先生は指導していたんだろうね。】

「……………詳しくは思い出せない。」

ただ、その話を聞いて十代達が悲しそうな顔をしていた。……………で、今は今度やる学園祭の準備をしている。

【で、なに作ってるの？】

「コスプレデュエルの衣装。」

【コスプレデュエルって、レッド寮の出し物だったよな。】

【なんかそれって面白そうですね。】

【クリ〜。】

【十代、楽しそうだね。】

「何言っているんだ。学園祭を楽しむのは当たり前のことだぜ。」

成る程ね。

【ところでレイには「真っ先に連絡したぜ!」……さすがだな。】

【クリ〜。】

「そう言えば、気になることがあってな。」

【【【気になること?】】】】

「ああ、レイがお姉ちゃんと一緒に行くね、って言っていたんだ。」

【レイさんにお姉さんっていましたか?】

「分からないが、イレギュラーかもな。」

【イレギュラーねえ。】

そう言っただけは十代のベットに寝転がった。

「……………あ、そっだ。ユベル、この六枚のカードを渡しておくぜ。」

【何これ?】

「気が付いたら持っていたんだ。俺が持つておくよりユベルが使った方がいいと思ってさ。」

【……………えっと、《E HEROヴァージエヴァポレイト》、《E

HEROアースクエイカー》、《E HEROウィンドサージ》、  
《E HEROセイクリッド・ダーク》、《E HEROヒーテック  
ド・エア》、《E HEROプリントデーモン》、確かに僕が使っ  
た方がいいカードだね。これって本来はあるの？】

「ない。俺も初めて見たカードだ。」

【そうなんだ。】

このカード達は属性融合E・HEROのE HERO版だね。《ヴ  
アージェヴァポレイト》は《アブソルトZero》と同じ水属性、  
《アースクエイカー》は《ガイア》と同じ地属性、《ウィンドサー  
ジ》は《Great TORNADO》と同じ風属性、《セイクリ  
ッド・ダーク》は《エスクリダオ》と同じ闇属性、《ヒーデット・  
エア》は《ノヴァマスター》と同じ炎属性、《プリントデーモン》  
は《Theシャイニング》と同じ光属性。素材はE・HEROと名  
のつくモンスターとそれぞれの属性モンスター、条件は《ダーク・  
フュージョン》または《超融合》の効果でしか特殊召喚出来ない。  
……………って《超融合》！？

【十代、《超融合》は余ってる？】

「あるけど。」

【ありがとう。】

そう言って十代は《超融合》のカードを渡してくれた。

ユベルside out

十代 side

学園祭当日の日。さてと楽しまないで損だな。

【ねえ、十代のコスプレって僕だよな？】

「見てわからないのか？」

【ユベルさんですね！】

【くり〜。】

【カラーコンタクトまで使ってるのか。】

俺の今の格好はユベルだ。右目にはオレンジ、左目には緑のカラーコンタクトを入れている。翼も作ったし、右が白、左が藍色のカツラも作った。いや〜、作るのに苦労したよ。カラーコンタクトの色がなかなか見つからなかったり、カツラの色づけも一人でやったりしたから大変だった。

「さてと、楽しむとしますか！」

そう言って部屋を出た。

【結構集まってますね。】

【確かに。】

周りを見渡してみると、万丈目は《XYZ ドラゴン・キャノン》、明日香は《ハーピー・レディ》だ。

「万丈目、どうしたんだ？顔が赤いぞ。」

「う、うるさいー!!」

「ところで十代、あなたの格好は何のモンスターなの？」

「《ユベル》だ。」

そう言って《ユベル》のカードを見せた。

「十代、人間っぽいけど性別が分からないんだけど？」

「ユベルは両方だ。」

「「両方!?!」」

万丈目と明日香は何故か驚いている。

「とりあえず、誰かとデュエルす……………あ、見つけた。レイ!」  
辺りを見渡すとレイを見つけた。

「あ!十代、遊びにきたよ!」

「待ってたぜ。」

「ねえ、それってユベル、だよな?」

「そうだ。作ったけど苦労したよ。……………で、レイ。後ろにいるのは?」

「ボクのお姉ちゃんだよ。」

「あ、あの、は、はじめまして。ユキっています。」

「ああ、よろしくな。ユキ。俺は十代でいいから。」

ユキってというのが。……………なんか外に慣れていないって感じがするな。

「……………レイがデュエルアカデミアに来た時、レイに変なことした?」

「え?」

「お姉ちゃん!十代はなににも変なことしてないよ!……………十代ごめんね。お姉ちゃんってば心配性なんだ。」

成る程、ユキはシスコンって訳だな。

「変なことはしてない。」

「……………よかった。」

……信用されて無かったのかよ。

「……まあ、とにかく楽しもうぜ。」

「うん！……あれ、お姉ちゃん、どこいくの？」

「えっと、……なんか買ってくるね。」

そう言っつてユキは足早に離れていった。……どうしたんだ？

十代 side out

ユキ side

おかしい。原作だとあんな格好じゃなかった。確か、ごちゃ混ぜだったような、……どうしてなんだろう？

「きゃー！」

【いったーい！】

考え事してたから誰かにぶつかってしまった。……この人って！？

「ぶ、ブラック・マジシャン・ガールだよね？」

【そうだけど。あ！そうだ！あっちの方でなんか楽しそうなおことがあるから早く行かないと！】



「あ、あの、ちょっと待って!」

【なに?】

「..... ちょっと頼みたいことがあるんだけど。いい?」

【う~~~~ん、それって私にしか出来ないこと?】

「うん。」

【分かった!で、何をすればいいの?】

「それはね.....。」

レイには可哀想だけど、これをやるしかない。

ユキ side out

レイ side

お姉ちゃんがなにか買ってくるって言ってたけど、本当にどうしたんだろう?」

【二人とも、久しぶりだね。】

【...久しぶり。】

【あそびにきたよ~!】



【……………く、クリ〜。】

……………ねえ、ヴァルキリアって魔法使い族だよ。なんでアイアンクローで頭がミシツとかいうの？この前なんかチヨークスリーパーとかやってたし。

【武道派だね。】

「そ、そうだな。レイ、そろそろ止めたらどうだ？」

「いや、……………もう少ししたら止まる、と思うよ。」

【…あまり騒いじゃ駄目だよ。それと私はおばさんじゃないから。分かった？】

【ううう、は〜〜い。】

エクスは頭ってどうなってるんだろう？中じゃなくて外だよ。

「二人はいつもこんな感じなのか？」

「たまにだよ。いつもは仲がいいんだ。」

二人は一緒に遊んだりしてるんだけどね。

「ボク、ちょっとお姉ちゃんのこと探してくるよ。」

「気をつけてな。」

【あそばないの〜？】

【…私達もいくよ。】

「お姉ちゃんー！どこにいるのー!？」

ボク達はお姉ちゃんのことを探している。

「どこに行ったんだろう、お姉ちゃんって男性恐怖症なんだよね。変な人になにかされてないかな？」

【…十代さんと普通に話してましたよ。】

【そうだよ〜。】

……………そうだった！何で十代と話してて大丈夫だったのか気になるけど今は置いておこう。

【あーレイ〜、あれユキだよ〜。】

「えっ!？」

本当にお姉ちゃんだ。でも、誰かと話している。

【…あれは…】

「知ってるの？」

【…ブラック・マジシャン・ガールです。でも、何でここに？】

「ぶ、ブラック・マジシャン・ガール！？」

【レイ、こえおっきいよ。】

「……………レイなの？」

しまった！ばれちゃった！

「レイ！？何でここに？」

「お姉ちゃんこそ何でここにいるの？それに、隣にいるのってブラック・マジシャン・ガールだよね？」

「……………うん。」

本物なんだ。……………って違う違う！今はそんなこと聞いている場合じゃない！

「……………レイ。レイに一つ言っておかなきゃいけないことがあるの。」

「急にどつしたのお姉ちゃん？」

「私にはね、……………前世の記憶があるの。」

.....え？

「そ、それって、ど、どういこと？」

「私はね、本来はこの世界にはいないの。」

え？え？本来は？この世界？前世？.....一体どういこと！？

【準備出来たよ。】

「.....レイ、今までありがとね。」

と、お姉ちゃんはそう言っつてブラック・マジシャン・ガールと一緒に消えていった。

【ユキがきえた〜！？】

【…マスター、マスター！】

「えっ！って、あれ？お、お姉ちゃんはどこ！？ブラック・マジシヤン・ガールもいない！？」

【…近くにはいません。】

.....お姉ちゃんが言っつたことってどういことなんだろう？.....もつ、いろんなことがあつて何がなんだが分かんない！

【そつだ！レイ、わかんないならじゅっだいにきけばいいんだよ。】

【…マスター、十代さんなら何か知ってると思います。】

「本当！？……でも、なんで十代が知ってると思うの？」

【…勘です。】

勘って……、でも、分かんないから十代に聞いた方がいいかもしれない。

レイside out

十代side

「あゝ、疲れた。」

【はしゃぎ過ぎだぞ。】

俺は何回かデュエルをして、今は自分の部屋で休憩中。

【まだまだ盛り上がってますね。】

【そうだね。】

「……………そういえば、レイとユキはまだ戻ってきてないのか？」

【そういえば、二人とも見かけてないね。】

どこに行ったんだ？……………何か嫌な予感がする。

ドンドンドン！

「十代、いる！？いたら開けて！？」

【レイさんです。】

レイか、でも何か急いでいるみたいだな。

ガチャ。

「十代！あの、えっと！お、お姉ちゃんが！あ、あのね！」

「レイ、まずは落ち着け！何があった！？」

「い、いめん…………。」

この慌てようは、どうしたんだ？

「レイ、何があった！？」

「お姉ちゃんがボク達の目の前で消えちゃったの！」

「消えた！？」

【それってどういう意味だい？】

「……………あとね、何か変なこと言ってたの。」

【変なこと、ですか？】



変なこと、なんだそれは？

「前世の記憶とか、本来はこの世界にはいないとか、そう言っていたの。十代なら何か知っていると想うってヴァルキリアが。」

【…そうです。何か知ってますか？】

「……」

……まさか、ユキは転生者か！？

「ね、ねえ、……何か知ってるの？」

【…何か知ってるのですか？】

【じゅうだい、なにかしってるの？】

……言っしかないな。

「……知ってる。」

「本当！？教えて！お願い！！」

「ま、まずは落ち着け！」

「しゅん。」

……とは言ったものの何から話せばいいんだ？

【僕が話そうか？】

「……………ああ、任せる。」

【分かったよ。レイ、これから話すことは冗談じゃないから良く聞いてね。……………その前に過程から聞く、それとも結論から聞く？】

「うーんと、結論から。」

【結論からね、ユキは転生者なんだ。】

「て、転生者って何？」

【それはね。】

その後ユベルはレイ達に説明をした。ちなみに俺のことは話していない。

【まあ、ざっとこんなところかな。】

「……………そうなんだ。あと、言い忘れたんだけど、お姉ちゃんには不思議な力があるんだ。」

【不思議な力？】

「デュエルディスクでデュエルすると、何故かモンスターが実体化したりするんだ。でも、ディスクを使わなければ大丈夫なんだけど。それと、見たことがないカードも持っているの。」

……………ユキは転生者であり、サイコデュエリストでもあるのか。

それと見たことがないカードは、シンクロモンスターとかだな。

「その不思議な力でお父さんや友達が怪我をしたんだ。お姉ちゃんはその事があったてみんなから嫌われているの。」

まるで、5D・sの最初のほうのアキだな。

【どうするんだ？】

「……………ユキを探そう。なんか嫌な予感がする。」

そういつて部屋を出ようとした時だった。

「うわあ—————!!」

「きゃあ—————!!」

……………くそっ、遅かったか!

【クリ!?!】

【な、何がおこったんですか!?!】

【…外が騒がしい。】

「みんな、行くぞ!」

【十代、デッキ忘れちゃ駄目だよ!はいこれ!】

「分かってる!」

俺達が外に出ると騒然としていた。誰がデュエルをしているみたいだが、人が少なくなっていた。

「明日香、何があっただんだ!？」

「十代!あなた、どこに行っていたのよ!」

「部屋で休んでいただけなんだけど、これは一体どうなってるんだ?」

「そ、それが、いきなり黒薔薇の魔女って名のる人が現れて、デュエルしたのだけど、ソリッドビジョンで何故か対戦相手が大怪我したりしているのよ!一人正体を知っている子がいたのだけれどその子も怪我しているのよ。」

不味いな、すでに被害者が出ているのか。

【…マスター、あの人は。】

「……………十代。……………あれ、お姉ちゃんだよ。」

「……………そうか。」

……………厄介だな。ユキはどうしてこんなことを?それと、ユキはアキが黒薔薇の魔女になっている時の仮面をつけている。あと衣装も似ている。

「仕方ない、俺が目を覚まさせてやる。」

「十代！危ないよ！」

「レイ、俺は大丈夫。心配するな。」

「……………お願い、……………お姉ちゃんを止めて。」

……………覚悟しないとな。ユキの心の傷は相当深い。生半可な覚悟じゃこつちがやられる。

「次の相手はあなたね。」

「ああ、目を覚まさせてやる。黒薔薇の魔女、いや、ユキ！」

「な、なんで!?!」

「別にいいだろ。それよりデュエルしないのか？」

「ええ、いいわよ。」

「「デュエル！」」

十代LP4000

ユキLP4000

十代side out

第二十二話 学園祭前編 ～黒薔薇の魔女～（後書き）

オリカはCO2さんの提供です。デュエルは次の話でやります。

第二十三話 学園祭中編 く星屑の竜と黒薔薇の竜く(前書き)

第二十三話です。諸事情により十代がシンクロを使います。もう一度いいます、十代がシンクロを使います。ご了承ください。

第二十三話 学園祭中編 〱星屑の竜と黒薔薇の竜〱

十代 side

「デュエル！」

十代LP4000

ユキLP4000

俺とユキはレッド寮から離れてデュエルをすることにした。レイ達  
はいる。翔に隼人に明日香、万丈目に吹雪もいる。さて、どうやっ  
て……………ん？あれ、このデッキは……………。

(ユベル。)

【どうしたんだい？】

(……………俺に渡したデッキ、間違えただろ。)

【えっ？】

(見てみるよ、この手札を！)

手札には《スピード・ウォリアー》、《エンジェル・リフト》、  
《チューニング・サポーター》などHEROデッキには入っていないな  
いカードがあった。そういえば、一応作ってHEROデッキの隣に  
このデッキを置いていたんだよね……………。半分は俺のせいか！

【十代、ごめん。】



(……………仕方ないからこのままやるしかない。)

「私のターン、ドロー！私は《ロードポイズン》を召喚！」

ロードポイズン ATK1500

「魔法カード《おろかな埋葬》を発動！デッキから《フェニキシア  
ン・シード》を墓地に送る。永続魔法、《世界樹》を発動！そして  
ターンエンドよ！」

ユキ

モンスター     ロードポイズン

魔法、罫     世界樹

さて、俺のターンだな。

「俺のターン、ドロー！俺は魔法カード《天使の施し》を発動！デ  
ッキからカードを三枚ドローし、二枚捨てる。そして、《スピード  
ウォリアー》を召喚！」

スピード・ウォリアー ATK900

「す、《スピード・ウォリアー》！？」

ユキが驚いている。まあ、無理もないか。このカードは本来この世  
界にはないからな。

「バトル！《スピード・ウォリアー》で《ロードポイズン》を攻撃！ソニック・エッジ！」

「アニキ、《スピード・ウォリアー》の方が攻撃力が低いのになんで攻撃するの！？」

「《スピード・ウォリアー》の効果発動！召喚に成功したターンのみ、このカードの元々の攻撃力をエンドフェイズまで倍にすることができる！」

スピード・ウォリアー ATK 900 1800

《スピード・ウォリアー》が《ロードポイズン》に向かって走り出し、回し蹴りを放って破壊した。

ユキLP 4000 3700

「うっ、でもこの瞬間、《ロードポイズン》の効果発動！このカードが戦闘によって破壊された時、墓地から《ロードポイズン》以外の植物族モンスターを一体特殊召喚できる！墓地から《フェニキシアン・シード》を特殊召喚！そして、《世界樹》はフィールドの植物族モンスターが破壊された時、このカードにフラワーカウンター（以下FC）を一つのせる。」

フェニキシアン・シード ATK 300

世界樹 FC 0 1

「俺はカードを二枚伏せてターンエンドだ！」

スピード・ウォリアー ATK1800 900

十代

モンスター スピード・ウォリアー

魔法、罫 伏せ二枚

「私のターン、ドロー！私は《フェニキシアン・シード》の効果発動！このカードをリリースし、手札の《フェニキシアン・クラスタ・アマリリス》を特殊召喚する！」

フェニキシアン・クラスタ・アマリリス ATK2200

「リリース？」

「生け贄ってことだな。」

「バトル！《フェニキシアン・クラスタ・アマリリス》で《スピード・ウォリアー》を攻撃！フレイム・ペタル！」

「罫カード発動！《ガード・ブロック》。この戦闘によって発生する戦闘ダメージを0にし、デッキからカードを一枚ドローする。」

《フェニキシアン・クラスタ・アマリリス》の攻撃によって《スピード・ウォリアー》が破壊されるが俺にはとどかなかった。

「だけどこの瞬間、《フェニキシアン・クラスタ・アマリリス》の効果発動！このカードが攻撃したダメージステップ終了時、このカードを破壊する。そして、このカードが破壊された時、相手プレイヤーに800ポイントのダメージを与える！スキヤッタ・フレイ

△！」

「うわぁー！ー！ー！！！」

十代LP4000 3200

くっ、ダメージが実体化しているのか！衣装が所々焦げている。だけど、カラーコンタクトは外しておいてよかった。

「な、なんなんだ、あれは！？」

「服がなんで焦げているの！？」

「……………お姉ちゃん。」

「《フェニキシアン・クラスター・アマリス》が破壊されたことにより、《世界樹》にFCがのる。」

世界樹 FC1 2

「私はカードを一枚伏せてターンエンド！そして墓地の《フェニキシアン・クラスター・アマリス》の効果発動！墓地の植物族モンスターを一体ゲームから除外することでこのカードを表側守備表示で特殊召喚する。私は《フェニキシアン・シード》をゲームから除外し、特殊召喚！」

フェニキシアン・クラスター・アマリスDEF0

「エンドフェイズに永続罫発動！《エンジェル・リフト》。自分の墓地のレベル2以下のモンスターを表側攻撃表示で特殊召喚する。」

《チューニング・サポーター》を特殊召喚！」

「《チューニング・サポーター》も!？」

チューニング・サポーター ATK1000

ユキ

モンスター フェニキアン・クラスター・アマリリス

魔法、罨 世界樹 (FC2)、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！」

まだ動かない方がいいな。シンクロ召喚を使って来るかもしれないからな。

「カードを二枚伏せてターンエンド！」

十代

モンスター チューニング・サポーター

魔法、罨 エンジェル・リフト、伏せ二枚

「(なんで十代が《スピード・ウォリアー》や《チューニング・サポーター》を持っているの?ここはGXの世界のはずなのに!?)  
……………私のターン、ドロー!私はチューナーモンスター、《夜薔薇の騎士》を召喚！」

夜薔薇の騎士 ATK1000

「チューナーモンスター!?」

「シンクロ召喚か!」

「(えっ、何でシンクロ召喚やチューナーを知っているの?)……」

……《夜薔薇の騎士》の効果発動!このカードが召喚に成功した時、手札のレベル4以下の植物族モンスターを一体特殊召喚できる!《キラ・トマト》を特殊召喚!」

キラ・トマト ATK1400

……アイツが来る。

「レベル4の《キラ・トマト》にレベル3の《夜薔薇の騎士》をチューニング!」

《夜薔薇の騎士》が三つの光の輪になり、その中を《キラ・トマト》が通過する。

「冷たい炎が世界の全てを包み込む。漆黒の華よ、開け!」

4 + 3 = 7

「シンクロ召喚!現れよ!《ブラック・ローズ・ドラゴン》!」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動!シンクロ召喚に成功した時、フィールド上のカードを全て破壊することができる!」

「させない！手札の《エフェクト・ヴェーラー》の効果発動！このカードを墓地に送り、相手モンスター一体の効果をエンドフェイズまで無効にする！俺は《ブラック・ローズ・ドラゴン》を選択する」

【……………十代さん、なんで私がこっちのデッキに入っているんですか！？ひどいですよー！】

(……………悪い。)

【今、何か変な間がありましたよね！？】

(文句は後にしてくれ！こっちのデッキを使うとは思ってなかったんだよ！)

【ユベルさんのせいですね！】

【何で僕！？七割は十代のせいでしょ！】

(何で俺が七割！？)

【三割は認めるのか。】

【クリ。】

「(《エフェクト・ヴェーラー》もあるの！？本当に一体どうなっているの?)……………《フェニキアン・クラスター・アマリリス》を攻撃表示に変更。」

フェニキアン・クラスター・アマリリスDEF0 ATK2200

「私は《世界樹》の効果発動！このカードにのっているFCを2つ取り除くことで、フィールド上のカードを一枚破壊する！私は右の伏せカードを破壊！」

世界樹 FC20

「畏カード発動！《威嚇する咆哮》。相手はこのターン攻撃出来ない！」

《世界樹》の効果で伏せカードが破壊されそうになるが発動し、空間が揺れた。

「（FCが無駄になった。）……………私は魔法カード《フレグラン・ス・ストーム》を発動！フィールド上の植物族モンスターを一体破壊し、私はデッキからカードを一枚ドローする。そして、ドローしたカードが植物族モンスターの場合、お互いに確認し、私はもう一枚ドローすることができる。私は《フェニキアン・クラスター・アマリス》を破壊しドロー！……………ドローしたのは植物族モンスターではない。けど《フェニキアン・クラスター・アマリス》の効果発動！このカードが破壊された時、相手に800ポイントのダメージを与える！」

「ぐわあー！！！」

十代LP3200 2400

くそ、翼がなくなった！……………だけど不思議と体のダメージは少ない。



「《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》が破壊されたことにより、《世界樹》にFCがのる。」

世界樹 FC0 1

「私はターンエンド！そして、《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》の効果発動！墓地の《キラー・トマト》をゲームから除外し、表側守備表示で特殊召喚！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスDEF0

ユキ

モンスター ブラック・ローズ・ドラゴン、フェニキシアン・クラスター・アマリリス

魔法、罫 世界樹 (FC1)、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！俺は手札の《ボルト・ヘッジホック》を墓地に送り、《クイック・シンクロン》を特殊召喚！」

クイック・シンクロン ATK700

「く、《クイック・シンクロン》！？それに《ボルト・ヘッジホック》！？どうしてそのカードを持っているの？」

「……………貰った。」

嘘じゃないからな！本当のことだからな！

「《クイック・シンクロン》ってことは、シンクロ召喚をするのね

「？」

「「十代（アニキ）がシンクロ召喚をするの（）するのか（）！？」」

【……………後で大変なことになるな。】

【……………クリ〜。】

ハネクリボー！ターボシンクロン！何で二人は遠い目をしてるんだ！？

「……………とにかく、《チューニング・サポーター》の効果発動！シンクロ召喚をする時、このカードはレベル2として扱うことが出来る。」

チューニング・サポーターLV1 2

「レベル2として扱う《チューニング・サポーター》にレベル5の《クイック・シンクロン》をチューニング！」

《クイック・シンクロン》が5つの光の輪になり、その中を《チューニング・サポーター》が通過する。

「集いし思いがここに新たな力となる。光さす道となれ！」

2 + 5 = 7

「シンクロ召喚！燃え上がれ、《ニトロ・ウォリアー》！」

ニトロ・ウォリアー ATK 2800

「《チューニング・サポーター》の効果発動！このカードがシンクロ素材として墓地に送られた時、デッキからカードを一枚ドロースる。そして装備魔法ジャンク・アタックを発動！《ニトロ・ウォリアー》に装備する！そしてバトル！《ニトロ・ウォリアー》で《ブラック・ローズ・ドラゴン》を攻撃！ダイナマイト・ナックル！ダメージステップ時に《ニトロ・ウォリアー》の効果発動！自分のターンに自分が魔法カードを発動した時、そのターンに一度だけ攻撃力が1000ポイントアップする！」

ニトロ・ウォリアー ATK 2800 3800

「うっ！」

ユキLP 3700 2300

「装備魔法、《ジャンク・アタック》の効果発動！装備モンスターが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、そのモンスターの攻撃力の半分のダメージを相手プレイヤーに与える！」

「きゃあ！」

ユキLP 2300 1100

「さらに、《ニトロ・ウォリアー》は相手モンスターを戦闘によって破壊した時、表側守備表示で存在する相手モンスターを攻撃表示にし、そのモンスターに続けて攻撃することが出来る。俺は《フェニキシアン・クラストー・アマリリス》を攻撃表示に変更させる。ダイナマイト・インパクト！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスDEF0 ATK2200

「《ニトロ・ウォリアー》で《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》に攻撃！ダイナマイト・ナックル！」

「この攻撃が通れば十代の勝ちだ！」

「畏カード発動！《棘の壁》。植物族モンスターが攻撃された時に発動することが出来る。相手フィールドに存在する攻撃表示のモンスターを全て破壊する！」

《ニトロ・ウォリアー》が《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》に向かって拳をつき出すが、《棘の壁》に阻まれて破壊された。

「俺は《マシブ・ウォリアー》を召喚し、ターンエンド！」

マシブ・ウォリアーATK600

十代

モンスター マシブ・ウォリアー

魔法、罫 伏せ一枚

十代side out

ユベルside

このデュエルは一体どうなるんだろう？……僕は十代との約束があるから手は出せない。あれ？何であそこに《ブラック・マジシャン・ガール》がいるんだろう？しかも何かをしているみたいだ。

(ユベル、どうしたんだ?)

【ちょっと気になることがあってね。ハネクリボー、着いてきて。

【クリー。】

【うーん、何かうまくいかないな、どうしてだろう？】

本当に何をしているの？

【ねえ、何をしているんだい？】

【だ、誰！？】

【誰でもいいと思うけどね。それより何をしているんだい？】

【……………言わなきゃ駄目？】

【駄目。】

僕はそれを聞こうとしているんだよ。

【……………分かったよ、実はね、頼まれたんだ。あまり被害が出ないように魔法を使っているんだけど何かうまくいなくてね。】

【それって、ユキに頼まれたのかい？】

【ユキ？えっと、あの子だよね？そうだよ。】

【何でユキはそんなことを頼んだの？】

【……………確か、うんと、そうだ！何かね、レイが私のことを嫌いになるようにしたいんだ、って言ってたよ。レイが私のことを嫌いになれば私がいなくなっても大丈夫、とかも言ってたような気がする。】

【……………成る程ね。】

【クリ？】

ユキが何をしようとしているのかが分かった。……………十代、負けちゃ駄目だからね。ユキを救えるのは十代だけなんだから。

ユベルside out

レイside

どうしてお姉ちゃんはこんなことをしているの？どうして？……  
…でも、十代ならきつとお姉ちゃんを止めてくれる。

「私のターン、ドロー！私は《ブルー・ローズ・ドラゴン》を召喚  
！」

ブルー・ローズ・ドラゴン ATK1600

「バトル！《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》で《マツ  
シブ・ウォリアー》を攻撃！」

「《マツシブ・ウォリアー》はターンに一度だけ、戦闘によって  
は破壊されない。そしてこのカードの戦闘によって発生するダメー  
ジは0になる。」

「でも、《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》は攻撃した  
場合、破壊される。そして、このカードが破壊された時、相手に8  
00ポイントのダメージを与える！」

「墓地の《ダメージ・イーター》の効果発動！効果ダメージが発生  
した時、墓地のこのカードをゲームから除外し、その効果はその数  
値分ライフを回復する効果になる！」

《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》が爆発し、爆風が十  
代に向かってくるが、十代の前に《ダメージ・イーター》が現れ、  
爆風を食べてしまった。

十代 LP2400 3200

「《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》が破壊されたことで《世界樹》にFCがのる。」

世界樹 FC1 2

「《ブルー・ローズ・ドラゴン》で《マツシブ・ウォリアー》に攻撃！」

《ブルー・ローズ・ドラゴン》の攻撃によって《マツシブ・ウォリアー》が破壊されるが十代にダメージはない。

「私はカードを一枚伏せてターンエンド！そして、墓地の《ロードポイズン》をゲームから除外し、《フェニキシアン・クラスター・アマリリス》を特殊召喚！」

フェニキシアン・クラスター・アマリリスDEF0

「エンドフェイズに罠カード発動！《砂塵の大竜巻》。《世界樹》を破壊！カードは手札がないからセットは出来ない。」

お姉ちゃんの場の《世界樹》が破壊された。

ユキ

モンスター ブルー・ローズ・ドラゴン、フェニキシアン・クラスター・アマリリス

魔法、罠 伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！魔法カード《命削りの宝札》を発動！手札が五枚になるようにドローし、五ターン後に全て墓地に送る。俺の



手札は0、よって五枚ドロ―！」

手札が0枚でそのカードを使うの！？どんな引きをしているの？

「魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動！手札を一枚墓地に送り、デッキからレベル1のモンスターを特殊召喚する。デッキから《チューニング・サポーター》を特殊召喚！そしてチューナーモンスター、《デブリ・ドラゴン》を召喚！」

チューニング・サポーター ATK100

デブリ・ドラゴン ATK1000

「《デブリ・ドラゴン》の効果発動！召喚に成功した時、墓地の攻撃力500以下のモンスターを一体、効果を無効化して特殊召喚する。墓地のもう一体の《チューニング・サポーター》を特殊召喚！」

チューニング・サポーター ATK100

「さらに、墓地の《ボルト・ヘッジホック》の効果発動！自分の場にチューナーが存在する時、墓地から特殊召喚できる。この効果で特殊召喚した場合、フィールドから離れた時、ゲームから除外される。」

ボルト・ヘッジホック ATK800

「レベル1の《チューニング・サポーター》二体とレベル2の《ボルト・ヘッジホック》にレベル4の《デブリ・ドラゴン》をチューニング！」

《デブリ・ドラゴン》が4つの光の輪になり、その中を二体の《チューニング・サポーター》と《ボルト・ヘッジホック》が通過する。

「集いし願いが新たに輝く星となる。光さす道となれ！」

1 + 1 + 2 + 4 = 8

「シンクロ召喚！飛翔せよ、《スターダスト・ドラゴン》！」

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

【きらきらしてる〜！】

【…綺麗。】

《スターダスト・ドラゴン》にみんなが見とれている、本当に綺麗。

「す、《スターダスト・ドラゴン》……！！」

「《チューニング・サポーター》の効果により俺は二枚ドローする。」

「ちょっと待って十代、効果が無効化されているのなら一枚しかドローできないんじゃない？」

「効果が無効化するのはあくまでフィールドに存在する時だ。《チューニング・サポーター》の効果は墓地で発動するから無効化されずに俺は二枚ドローできる。」

「……………ちょっと難しいな。ということは効果が無効化された《ク

リッター』も墓地に送られたら効果は発動するんだ。

「バトル！《スターダスト・ドラゴン》で《ブルー・ローズ・ドラゴン》を攻撃！シューティング・ソニック！」

《スターダスト・ドラゴン》が《ブルー・ローズ・ドラゴン》を攻撃し、破壊した。

ユキLP1100 200

「でもこの瞬間、《ブルー・ローズ・ドラゴン》の効果発動！このモンスターが戦闘によって破壊された時、墓地の《ブラック・ローズ・ドラゴン》を特殊召喚することができる！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK2400

「俺はカードを二枚伏せて、ターンエンド！」

十代

モンスター スターダスト・ドラゴン

魔法、罫 伏せ二枚

レイside out

第二十三話 学園祭中編 ～星屑の竜と黒薔薇の竜～（後書き）

ここで一旦区切ります。

第二十四話 学園祭後編 〱姉妹の絆〱 (前書き)

第二十四話です。すごくグダグダでネタがあります。

第二十四話 学園祭後編 姉妹の絆

十代 side

十代

モンスター スターダスト・ドラゴン

魔法、罫 伏せ二枚

ユキ

モンスター ブラック・ローズ・ドラゴン、フェニキアン・クラスター・アマリリス

魔法、罫 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！魔法カード《強欲な壺》を発動！デッキからカードを二枚ドローする。手札を一枚墓地に送り魔法カード《カード・フリッパー》を発動！相手モンスター全ての表示形式を変更する！」

何も無い空間から糸が出てきて、《スターダスト・ドラゴン》を縛り、守備表示になった。

スターダスト・ドラゴン ATK2500 DEF2000

「……………私は装備魔法、《憎悪の棘》を発動！このカードは《ブラック・ローズ・ドラゴン》か植物族モンスターにのみ、装備することができる！装備されたモンスターの攻撃力は600ポイントアップする！」

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK 2400 3000

「さらに《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果発動！1ターンに一度、自分の墓地の植物族モンスターを一体ゲームから除外することで守備表示で存在する相手モンスターを一体、エンドフェイズまで攻撃力を0にして、攻撃表示に変更する！私は墓地の《ウィード》をゲームから除外し、《スターダスト・ドラゴン》の攻撃力を0にし、攻撃表示に変更する！」

「攻撃力0で攻撃表示！？」

「不味いぞ！このままじゃ十代が！」

スターダスト・ドラゴン DEF 2000 ATK 0

「バトル！《フェニキシアン・クラストー・アマリリス》で《スターダスト・ドラゴン》を攻撃！」

「畏カード発動！《次元幽閉》。攻撃してきたモンスターをゲームから除外する！」

「伏せてある速効魔法、《神秘の中華なべ》を発動！モンスターを一体リリースし、攻撃力が守備力を選択しその数値分、ライフを回復する。《フェニキシアン・クラストー・アマリリス》をリリースし、攻撃力分ライフを回復する！」

ユキ LP 200 2400

かわされたか！

「《ブラック・ローズ・ドラゴン》で《スターダスト・ドラゴン》を攻撃！ヘイト・ローズ・ウィップ！」

「ぐわあーーーーー！！！」

《ブラック・ローズ・ドラゴン》の攻撃によって、《スターダスト・ドラゴン》の体に傷がつき、余波で俺にもダメージが来た。

十代LP3200 200

「なんで破壊されないんだ？」

「《憎悪の棘》を装備したモンスターに攻撃されたモンスターは戦闘によっては破壊されないのよ。」

……………覚悟はしていたが、……………痛いな。……………だけど。

「アニキ！？」

「十代、デュエルをやめるんだ！」

……………やめるわけには、……………いかない！

「……………俺は大丈夫だ！」

ユキを救うためには、これくらいどつっこつてことない！

「お姉ちゃん、もうやめて！…！なんでこんなことするの！…？」



「……………レイ、本当は私のことなんてどうでもいいんでしょ。」

「……………え？」

「私をいつも可哀想な物を見るような目に、あなたのつわべだけの優しさに、もううんざりしたのよ！」

「ち、違うよ！ボクは！？」

「何が違うって言うの！？お姉ちゃんなんかいなければいいって、心のどこかで思っているんですよ！！」

「そ、それは……………」

……………。

「……………違う、違うよ。ボクは……………、お、お姉ちゃんのこと……………」

「……………なによ、なにか言いなさいよ！何が違うのよ！！」

……………。

「私は、私は化け物なのよ！いつも私の側に居てくれたけど本当は恐いんですよ！どうなのよ！？」

「……………ユキ。」

「。何。」

「…………お前、……………本当は寂しいんだろ。」

「……………え？」

「……………お姉ちゃんが……………寂しい…………？」

「あなたに私の何が分かるの!？」

「……………分かるさ、小さい頃俺もデュエルで友達を傷つけて、一人になったことがあるからな。」

「……………十代が？」

まあ、そのあとはユベルと何とか和解することができたからな。

「……………その後は、原因を突き止めてその友達とも和解できたからな。」

「……………私が寂しい？私は寂しくなんか「じゃあ、なんで泣いているんだ!？」……………え？」

よく見ると仮面の隙間から涙が流れていた。

「ユキ、……………お前は一人じゃない。」

「……………一人……………じゃない？」

「ああ、お前は一人じゃない。レイがいるだろ。……………レイだけじゃない、俺もいるから。」

「……………」。

「……………デュエル、続けようぜ。」

「……………うん、私はターンエンド！」

スターダスト・ドラゴン ATK 2500

ユキ

モンスター ブラック・ローズ・ドラゴン

魔法、罨 憎悪の棘 (ブラック・ローズ・ドラゴンに装備)

「俺のターン、ドロー！」

……………来てくれたか！

「罨カード発動！《重力解放》。フィールドの全てのモンスターの表示形式を変更する！」

スターダスト・ドラゴン ATK 2500 DEF 2000

ブラック・ローズ・ドラゴン ATK 3000 DEF 1800

「俺は《救世竜セイヴァー・ドラゴン》を召喚！」

救世竜セイヴァー・ドラゴン ATK 0

「モンスターの召喚に成功したターン、《ワンショット・ブースタ

「《は手札から特殊召喚できる！俺は《ワンショット・ブースター》を特殊召喚！」

ワンショット・ブースター ATK0

「攻撃力0のモンスターが二体？」

「……………《救世竜セイヴァー・ドラゴン》……………」

「俺はレベル8の《スターダスト・ドラゴン》とレベル1の《ワンショット・ブースター》にレベル1の《救世竜セイヴァー・ドラゴン》をチューニング！」

《救世竜セイヴァー・ドラゴン》が一つの光の輪になり、その中を、《スターダスト・ドラゴン》と《ワンショット・ブースター》が通過する。

「集いし星の輝きが、新たな奇跡を照らし出す。光さす道となれ！」

8 + 1 + 1 = 10

「シンクロ召喚！光来せよ！《セイヴァー・スター・ドラゴン》！」

セイヴァー・スター・ドラゴン ATK3800

「《セイヴァー・スター・ドラゴン》の効果発動！相手モンスターの一体の効果をエンドフェイズまで無効化することができる。俺は《ブラック・ローズ・ドラゴン》の効果は無効化する。サプリメーション・ドレイン！」

「うう……………」

「ユキ？」

「……………大丈夫。……………続けて。」

「……………ああ、《セイヴァー・スター・ドラゴン》は効果を無効化したモンスターに記されている効果を一度だけ使用することができる！墓地の植物族モンスターを一体ゲームから除外して、守備表示モンスターを攻撃力0にし、攻撃表示にする！」

「でも十代の墓地に植物族モンスターは存在しないはずだ、発動はでk「いるぜ、一体だけな！」……………一体、だけ？」

「墓地の《グローアップ・バルブ》をゲームから除外し、《ブラック・ローズ・ドラゴン》の攻撃力を0にし、攻撃表示にする！」

「《グローアップ・バルブ》？」

「……………植物族のチューナーモンスター。でもいつ墓地に？」

「《ワン・フォー・ワン》の時のコストだ。」

「あっ！」

ブラック・ローズ・ドラゴンDEF1800 ATK0

「バトル！《セイヴァー・スター・ドラゴン》で《ブラック・ローズ・ドラゴン》を攻撃！シューティング・プラスター・ソニック！」

「きゃあああああ!」

ユキLP24000

十代side out

ユキside

..... 負けた、..... 私は間違っていたのかな。.....  
レイにも、みんなにも嫌われた。..... 私は.....。

「..... お姉ちゃん。」

気がつくくとレイが近くにきていた。それと仮面がなくなっていた。

「..... 前にも言ったよね。ボクはどんなことがあってもお姉ちゃんの味方だつて。」

「..... レイ。..... でも、私は、レイにひどいことを言ったんだよ。」

「..... 関係ないよ。お姉ちゃんはお姉ちゃんですよ。」

レイ、ごめんね。

「..... っう、ひっく、うわあ.....」

「お、お姉ちゃん!?!..... もう、ボク達がいるから大丈夫だよ。」

「

ユキ side out

十代 side

ユキが泣き出してしまった。……………和解できたようだな。しばらく二人だけにしてやるか。

「十代、大丈夫か？」

「俺は大丈夫だ。……………それとユキとレイはしばらくは二人だけにしておいてくれよ。」

「どうして？」

「……………翔、少しは空気を読め。あと、俺はちよつと行くところがあるから。」

そういえば、ユベルはどこに行ったのか探さないとな。

「……………で、これはどうしたんだ？」

【あ、十代！ちょっと手伝ってよ！】

「何を？」

【かわいい〜〜！】

【クリ〜！！？】

「……………成る程。だいたい分かった。」

ブラック・マジシャン・ガールがハネクリボーのことを抱き締めて離さないみたいだ。

【……………ク、クリ〜。】

【ハネクリボーを離してくれないかな？】

【え〜、やだ。かわいいんだもん。】

お持ち帰りか！？

【ハネクリボーさん、大丈夫ですか？】

【……………あ。】

【え？】

【お持ち帰り〜〜！】



【きゃー！ー！！痛いです！！痛いですよ！！やめてくださいー！】

……………今度はエフェクト・ヴェーラーか。……………って止めなきや不味い！

【……………クリ〜。】

【ハネクリボー、大丈夫かい？】

【……………ク、クリ〜。】

【……………大丈夫じゃないね。】

……………なんか今日は疲れるな。

話は飛んで今は俺の部屋にいる。ユキもレイも俺の部屋にいる。まあ、ユキがデュエルで怪我をさせてしまった人達を治したり、ユベルがブラック・マジシャン・ガールを首根っこ掴んで部屋に引っ張ってきたりしていた。……………あのデュエルの後、ユキの力は何か傷つける力ではなく癒やす力になっていたらしい。まだあまりうまく使えないと言っていたが。……………まさか、《セイヴァー・スター・ドラゴン》のサプリメーション・ドレインで傷つける力が無くなったのか？

「お姉ちゃん大丈夫？」

「……………うん、大丈夫だよ。」

「無理はするなよ。……………で、話は変わるがユキの側にいるのは……………。」

「私の精霊なんだけど……………。」

ユキの側には四人精霊がいる。その後、ユキは精霊が見えるようになったみたいだ。それは置いてといて、……………ブラック・マジシャン・ガールは分かるが、三人は分からない。……………どんなモンスターなんだ？一人は何故かメイドの格好だし、一人は魔女っぽいし、一人は傘を持っているし。

【十代様、私とは先程お会いいたしましたよ。】

「先程？……………って、十代様！？」

【なあ、ユキ。何で私を使ってくれなかったんだ？私も暴れたかったぜ。】

【私もよ、ユキ。この馬鹿よりは暴れられるわ。】

【……………おい、馬鹿って誰だ！】

【あなた以外誰がいるっていうのよ。】

【やるのか！私は容赦はしないぜ！】

「ここで暴れるな！外でやれ、外で！」

……………全く、てかこの三人どっかで見たことあるな。

「なあ、ユキ。この三人ってどんなモンスターなんだ？」

「……………サクヤは《ブラック・ローズ・ドラゴン》、ユウカは《凜天使クイーン・オブ・ローズ》、マリサは《魔天使ローズ・ソーサリー》の精霊だよ。《ブラック・マジシャン・ガール》はマナだよ。」

「サクヤ？ユウカ？マリサ？全員東方から？」

「……………うん。見た目が見た目だから。」

「それより、《ブラック・ローズ・ドラゴン》がサクヤって、……………十六夜つながりか？」

「そつだよ。」

【……………十代様、先程は申し訳ありませんでした。】

「いいよ別に。サクヤが謝ることじゃないだろ。」

【……………ですが、私は……………。】

【別にいいじゃねーかよ。十代もこう言っているんだぜ。気にすんなよ。】

【あら、マリサにしては意外なこと言うわね。】

【おい！それってどういう意味だ！】

【そのままよ。】

「少し落ち着いて、二人とも。」

……………やれやれ。

【マリサ、あそぼー！】

【おう、いいぜ！なにで遊ぶんだ？】

【私もー！】

【…もう少しで帰るよ。】

【【【えー！！！】】】

【そういえば、あと三十分くらいで帰りの船が出港するよ。】

【確かにそうだな。】

【……………そ、そうでしたね。】

【……………ク、クリ……。】

「十代、ボク達、そろそろ帰るから。」

「ああ、……………ユキ。レイ。」

「何？」

「……俺は二人の味方だからな。あと、ユキ。ユキにはレイ達がいるから、一人で抱え込むなよ。」

「うん。」

「……ありがとう。ちょっといいかな？」

ユキが近づいてきた。

「ん？っ！！」

……ユキにキスされた。……しかも、……深い方。

「……ぶはっ。」

「あー！お姉ちゃんズルい！ボクも！」

「おい！っ！！」

……レイにもされました。

「……ぶはっ。」

「……二人していきなりなにするんだ！」

「……。」

二人の顔が真っ赤になっている。……………まさか！

【十代、フラグ立てたね。】

……………レイはともかくユキもか！

「ユキ、俺はな、レイのことが「ボクはいいよ。」……………えっ？」

「……………お姉ちゃんなら、いいよ。」

【……………十代さん、二股ですね。】

【二股だな。】

【クリ〜。】

【…公認の二股。】

【ふたまた？】

【ラブラブだね〜、三人とも。】

【やれやれだぜ。】

【これは責任とらなきゃ駄目ね。】

こゝ、公認の二股！？

【……………あの、お嬢様、妹様、そろそろ準備をしないといけませ

んよ。】

「……………分かってるよ。十代、これからレイには変なことしないでね。」

「ああ、……………全く、ユキはシスコンだな。」

「十代はロリコンでしょ。」

神槍「スピア・ザ・グングニル」

グサツ！

「ぐはっ！」

「お姉ちゃん！十代は二股のロリコンだよ！」

禁忌「レーヴァテイン」

ブスツ！

「ぐふっ！」

な、なんでスペルカードが発動しているんだ！……………精神的ダメージが大きすぎる。

「十代、大丈夫？しっかりして！？」

「……………だ、……………大丈夫……………だ。」





「…………でも、なんかすつきりした。ありがとう。」

「お姉ちゃん！早くしないと帰れなくなっちゃっよよ！」

「えっ、本当に!?!」

時計を見ると、時間がなくなってきた。

「十代、私もレイと一緒に来るから待っててね。」

「ああ、待ってるからな。それと、これからいろいろと大変だと思っけど頑張れよ。」

「うん!」

「お姉ちゃん!」

「分かってるよ!」

ユキとレイは帰っていった。

十代 side out

第二十四話 学園祭後編 ～姉妹の絆～（後書き）

学園祭は終了です。

## 第二十五話 七人目のセブンスターズ（前書き）

第二十五話です。グダグダになったような気がします。

## 第二十五話 七人目のセブンスターズ

十代 side

「……………ここだな。」

俺達は廃寮の前にいる。俺達とはいつでも俺以外の人はいない。学園祭から数日後、校長に呼び出され、相手から俺に指命があり廃寮の中で待っているらしい。校長に廃寮に入る許可はもらっている。

【なんでこの中なんだろうね？】

【相手は誰なんですか？】

【セブンスターズの七人目だよな。】

【クリ。】

……………相手はアムナエル、いや、大徳寺先生だ。正直言って戦いたくはない。だけど、俺を一人で呼んだのには理由があるはずだ。

【……………十代さん？】

「……………あ、悪い。少し考え事してたんだ。」

【考え事かい？】

「ああ。」

【相手は待ってるみたいだから早く行こうぜ。】

「分かってるよ。」

行くしかないな。俺達は廃寮に入った。

俺達は廃寮に入り、いろいろと見て回った。

【ここに来るのは二回目だね。】

「あの時は勝手に入ったけど、今回は許可はもらっているから大丈夫だ。」

制裁デュエルはもう御免だ。

【前にデュエルした所で待っているのかもな。】

「そうかもしれ……………ん？」

【どうしたんですか？】

「……………前にここに通路なんてあったか？」

前にタイタンとデュエルした所に向かおうとしていたが、その途中で通路が分かれていた。

【いや、なかったよ。】

「……………この先にいるな。」

【慎重に行こうぜ。】

行くか。

十代 side out

明日香 side

「アニキはもう行ったの!？」

「ええ、校長先生に呼ばれて一人で行ったわ。」

「心配なんだな。」

確かに心配ね。闇のデュエルは私もしたけどもうしたくないわ。

「……………でも、アニキは勝つよ。絶対!」

「俺もなんだな!」

私も十代が勝つと思ってる。心配だけど待つしかないわね。

明日香 side out

十代 side

「……………ここは？」

【実験室みたいだな。】

【クリ。】

【いろんな機械があるね。】

新しく出来ていた通路をしばらく歩いてみると開けた所に出た。通路は暗かったがこの部屋だけはほんの少し明るかった。

【……………じ、十代さん。あ、あれ。】

エフェクト・ヴェーラーが指を指しているほうを見るとそこには棺桶があった。

【棺桶だよね。】

「……………開けてみるか。」

俺は棺桶の蓋を開けてみた。

【きゃーーーーー!!?!?み、み、ミイラですよーーーー!!?!?】

【なんでミイラがあるんだ!?!?】

【クリーー!?!?】

「みんな！少し落ち着け！」

「……いや、落ち着けって言っても普通は落ち着いてはいられないよな。」

【十代、このミイラって!？】

「……やっぱりな。」

このミイラは大徳寺先生のだ。

「ニヤー。」

【ミイラが喋りましたよ!？】

「……ニヤー？」

ミイラから何故か猫の鳴き声がした。猫？

「って、ファラオ!？なんでここに!？」

俺達についてきたのか?………そういえばここ最近、レッド寮ではみかけてはいないな。

「………ようこそ、私の実験室へ。遊城十代。」

声が聞こえたと同時に少しだけ明るかった部屋が全体が見えるようになった。



「どこだ！どこにいる！？」

「……………フッフ、私はここにいるぞ。」

振り向くとそこには仮面をつけ、衣を身に纏った男がいた。

「我が名はアムナエル。七人目のセブンスターズだ。」

「……………。」

「お前はもう逃げられない。ここを出たければこの世界の真実が綴られたエメラルドタブレットの前で私との闘のデュエルで勝つことだ。」

「……………エメラルドタブレット。最高の錬金術師が持つ究極のアイテム。」

「よく知っているな。私が最後の試練だ！」

【……………十代。負けないでね。】

ユベル、分かってるよ。

「デュエル！！」「」

十代LP4000

アムナエルLP4000

「俺のターン、ドロー！俺は《E・HEROエアーマン》を召喚！」

エアーマン ATK1800

「《エアーマン》の効果発動！デッキから《E・HEROクレイマン》を手札に加える。カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代

モンスター エアーマン

魔法、罫 伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は《異次元の女戦士》を召喚！」

異次元の女戦士 ATK1500

「私は永続魔法、《次元の裂け目》を発動！このカードが発動している限り、墓地に送られるモンスターは墓地に送られず、ゲームから除外される。」

「罫カード発動！《砂塵の大竜巻》。《次元の裂け目》を破壊する！その後、カードを一枚伏せる。」

とりあえず、沢山のモンスターを除外される訳にはいかないな。

「バトル！《異次元の女戦士》で《エアーマン》を攻撃！」

《異次元の女戦士》が《エアーマン》に切りかかるが、返り討ちにされた。

アムナエル LP4000 3700

「くっ！だがこの瞬間、《異次元の女戦士》の効果発動！このモンスターが攻撃した時、このモンスターと攻撃されたモンスターをゲームから除外する。」

《異次元の女戦士》と《エアーマン》が現れた次元の穴に吸い込まれた。

「私はカードを二枚伏せてターンエンドだ！」

アムナエル

モンスター　なし

魔法、罫　伏せ二枚

「俺のターン、ドロー！」

「この瞬間、永続罫発動！《マクロコスモス》。このカードが発動している限り、墓地に送られるカードは墓地に送られず、ゲームから除外される。」

不味い！今は《マクロコスモス》を破壊できるカードは来ていないし、これだと《ネクロ・ダークマン》を墓地に送ることが出来ない。

「俺は魔法カード、《融合》を発動！手札の《E・HEROバーストレディ》と《E・HEROクレイマン》を融合。来い！《E・HEROランパート・ガンナー》！」

ランパート・ガンナーDEF2500

「バトル！《ランパート・ガンナー》は守備表示の時、相手に直接

攻撃することができる。その代わりに与えるダメージは半分になる。  
ランパートショット！」

「カウンター罠発動！《攻撃の無力化》。」

《ランパート・ガンナー》が攻撃するが防がれた。

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

十代

モンスター　ランパート・ガンナー

魔法、罠　伏せ二枚

「私のターン、ドロ！《原始太陽ヘリオス》を召喚！」

原始太陽ヘリオスATK？

「《原始太陽ヘリオス》の攻撃力はゲームから除外されているモンスターの数×100となる。今、ゲームから除外されているモンスターは四体。よって、《原始太陽ヘリオス》の攻撃力は400になる。」

原始太陽ヘリオスATK？　400

「そして、《原始太陽ヘリオス》を生け贄に《ヘリオス・デュオ・メギストス》を特殊召喚！《ヘリオス・デュオ・メギストス》はゲームから除外されているモンスターの数×200となる。《原始太陽ヘリオス》が除外されたことにより、ゲームから除外されているモンスターは五体になる。」

ヘリオス・デュオ・メギストスATK？ 1000

「魔法カード《強欲な壺》を発動！デッキからカードを二枚ドロースる。さらに魔法カード《天使の施し》を発動！デッキからカードを三枚ドロース、二枚捨てる。《マクロコスモス》が発動しているのでゲームから除外される。そして今ゲームから除外された《ネクロフェイス》の効果発動！お互いのプレイヤーはデッキの上から五枚ゲームから除外する！」

くそっ！ゲームから除外されたモンスターが多くなってきた。

「私は五枚のうち二枚がモンスターだ。」

「俺は三枚だ。」

三枚ともE・HEROだ。

「これで除外されたモンスターは十一体。よって、《ヘリオス・デュオ・メギストス》の攻撃力は2200だ。」

ヘリオス・デュオ・メギストスATK1000 2200

まだ《ランパート・ガンナー》で耐えきれぬ。

「私はカードを一枚伏せてターンエンド！」

アマナエル

モンスター

ヘリオス・デュオ・メギストス

魔法、罨　マクロコスモス、伏せ一枚

「俺のターン、ドロー！魔法カード《強欲な壺》を発動！デッキからカードを二枚ドローする。そして《エフェクト・ヴェーラー》を召喚！」

エフェクト・ヴェーラー ATK 0

【十代さん、なんで私を召喚するんですか？】

「《マクロコスモス》が発動しているから効果は使えないんだ。」

【そうなんですな。分かりました。】

「伏せてある魔法カード《ミラクル・フュージョン》を発動！フィールドの《E・HEROランパート・ガンナー》と《エフェクト・ヴェーラー》をゲームから除外し、融合。来い！《E・HERO Theシャイニング》！」

Theシャイニング ATK 2500

「除外されたモンスターは十三体だ。」

ヘリオス・デュオ・メギストス ATK 2200　2600

「《Theシャイニング》はゲームから除外されているE・HEROと名のつくモンスター×300ポイントアップする。ゲームから除外されているE・HEROと名のつくモンスターは六体だ！」

Theシャイニング ATK 2500　4300

「バトル！《The シャイニング》で《ヘリオス・デュオ・メギストス》に攻撃！オプティカル・ストーム！」

「ぐっ！」

アムナエルLP3700 2000

「俺はターンエンド！」

十代

モンスター The シャイニング

魔法、罫 なし

《ヘリオス・デュオ・メギストス》を破壊したがまだ油断しない方がいいな。

「……………アムナエル、いや、大徳寺先生。なんでこんなことをしているんですか？」

「……………今は関係無い。私のターン、ドロ！スタンバイフェイズにゲームから除外された魔法カード《異次元からの宝札》の効果発動！ゲームから除外された次の自分のターンのスタンバイフェイズにこのカードを手札に戻す。この効果で手札に戻った時、お互いのプレイヤーはデッキから二枚ドロする。」

ドロは出来たがあっちもだ。

「私は魔法カード《闇の誘惑》を発動！デッキからカードを二枚ドロ―し、手札の閻属性モンスターを一体、ゲームから除外する。除外出来ない場合は手札を全て墓地に送る。私はデッキから二枚ドロ―し、手札の《ネクロフェイス》をゲームから除外する。」

ここで《ネクロフェイス》か！？

「ゲームから除外された《ネクロフェイス》の効果でデッキの上からカードを五枚ゲームから除外する。五枚のうちモンスターは一枚だ。」

「俺は二枚、二枚ともE・HEROだ。」

TheシャイニングATK4300 4900

「これで除外されたモンスターは十八体。二体目の《原始太陽ヘリオス》を召喚！」

原始太陽ヘリオスATK？ 1800

「《原始太陽ヘリオス》を生け贄に《ヘリオス・デュオ・メギストス》を特殊召喚！」

ヘリオス・デュオ・メギストスATK？ 3800

「そして、《ヘリオス・デュオ・メギストス》を生け贄に《ヘリオス・トリス・メギストス》を特殊召喚！《ヘリオス・トリス・メギストス》の攻撃力はゲームから除外されているモンスターの数×300だ。」



今ゲームから除外されているモンスターは………二十体!?

ヘリオス・トリス・メギストス ATK? 6000

「バトル!《ヘリオス・トリス・メギストス》で《The シャイニング》を攻撃!フェニックス・プロミネンス!」

「くっ!」

十代 LP 4000 2300

「除外されたモンスターが増えたことにより、《ヘリオス・トリス・メギストス》の攻撃力は上がる。」

ヘリオス・トリス・メギストス ATK 6000 6300

《The シャイニング》は墓地に送られた時に効果は発動するから、今は発動出来ない!

「私はターンエンドだ!」

アムナエル

モンスター      ヘリオス・トリス・メギストス

魔法、罠      マクロコスモス、伏せ一枚

「俺のターン、ドロ!俺は《E・HEROフェザーマン》を召喚!」

フェザーマン DEF 1000

「カードを一枚伏せてターンエンド！」

「エンドフェイズに伏せてある速効魔法、《サイクロン》を発動！  
その伏せカードを破壊する！」

《炸裂装甲》が破壊された！

十代

モンスター      フェザーマン

魔法、罫      なし

「私のターン、ドロー！バトル！《ヘリオス・トリス・メギストス》  
《で《フェザーマン》を攻撃！フェニックス・プロミネンス！」

……………このままじゃ不味い。《ヘリオス・トリス・メギストス》  
の攻撃力が上がるだけだ。

ヘリオス・トリス・メギストス ATK 6300    6600

「私はターンエンド！（……………君ならこの状況を打破できると信じ  
ている。）」

アムナエル

モンスター      ヘリオス・トリス・メギストス

魔法、罫      マクロコスモス

諦める訳にはいかない！たとえ可能性が低くても0じゃなければ逆

転はできる！

「……………」

「君も所詮この程度だったようだな。」

「……………」それはどうかな？」

「この状況を打破できると言うのか！？」

「できるさ。……………俺が望みさえすれば運命は絶えず俺に味方する、つてな！」

行くぞ！

「俺のターン、ドロー！」

……………来た！

「……………魔法カード《平行世界融合》を発動！ゲームから除外されている《E・HEROフェザーマン》、《E・HEROバーストレディ》、《E・HEROバブルマン》、《E・HEROクレイマン》をデッキに戻し、融合！来い！《E・HEROエリクシーラー》！」

エリクシーラー ATK2900

ヘリオス・トリス・メギストス ATK6600 5400

「《エリクシーラー》の効果発動！《エリクシーラー》が融合召喚

に成功した時、ゲームから除外されている全てのカードを持ち主のデッキに戻す！」

「全てだと!?!」

ヘリオス・トリス・メギストス ATK 5400 0

「《エリクシーラー》は光属性だが地、水、炎、風属性としても扱う。さらに相手フィールドに同じ属性のモンスターが存在するとき、そのモンスター一体につき、攻撃力が300ポイントアップする。」

エリクシーラー ATK 2900 3200

「バトル! 《エリクシーラー》で《ヘリオス・トリス・メギストス》を攻撃! フュージョニスト・マジスター!」

「うわあああああ!」

アマナエル LP 2000 0

十代 side out

ユベル side

十代が勝つことができた。…………… だけど十代の表情は暗い。

「…………… 大徳寺先生、先生は何でこんなことを?」

「…………… 十代君、君は分かっていたのか。私の正体を。」

「はい。」

十代は転生者だから知っていたんだね。

「私は君を試していた。これから起こる災いからこの島を守る力があるのかを……………」

「これから起こる災い、……………それは七星門が開いて、三幻魔が復活するってことですね。」

「……………それだけではないのかもしれない。」

「それだけではない？」

「一体どういうことだろう？」

「詳しくは分からない。だが、君と君の仲間とならそれにも打ち勝つことができるだろう。いや、それだけじゃない。これから起こりうる災いにも打ち勝つことができる。」

「……………」

「……………十代君、これを受け取れ。」

大徳寺先生は十代にエメラルドタブレットを渡した。

「……………俺は守りますよ。この島を、……………いや、みんなを。」

「……………ありがとう。……………これで私も……………」

そう言つて大徳寺先生は砂になった。

「……………」

【……………十代。】

「……………わかつてるよ。戻ろう、みんなが心配しているからな。」

【そうですね。】

僕達はこの部屋を後にした。……………ただ、この後の戦いで予想できなかったことが起きることをこの時の僕達は知ることがはなかった。

ユベルside out

零side

いろいろと仕事があつたがようやく一息つけることができた。ゴーズ達も疲れている。

【御主人、大丈夫ですか？】

「まあな。」

【……………。】

「ゴーズ、どうした？」

【……………主人、妙な胸騒ぎがする。】

「妙な胸騒ぎ？」

【……………はい。】

「……………お前もか。」

【御主人もですか？】

「ああ。」

一体何なんだこの妙な胸騒ぎは？ここ最近ずっと起こっている。

「仕事のし過ぎで疲れているかもしれないが、一応警戒はしておくぞ。いいな？」

【【はい。】】

【グルウ。】

零 side out

## 第二十六話 三幻魔（前書き）

第二十六話です。三幻魔戦ですが呆気なく終わります。



## 第二十六話 三幻魔

十代 side

大徳寺先生とのデュエルの後、校長先生を始め、みんなに報告した。翔達は悲しい顔をしていた。……………俺も悲しいが気になることがある。三幻魔が復活することは分かるが、他に起こる災いって一体何なんだ？

「ユベル、どう思う？」

【僕も分からないよ。】

……………やっぱり分からない。

【十代、あれこれ考えても仕方ないぜ。】

「……………そうだな。ちょっと気分転換にテレビでも見るか。」

テレビの電源を入れた。

『……………こちら、現場です。三時間前、突如空が暗くなり、巨大な黒い鳥が現れ町を破壊し、町の住人が行方不明になったとのことです。』

……………何だ、これは？

【……………クリ〜。】

【ハネクリボー、どうしたんだ？】

【……………なんか不気味ですね。】

確かに不気味だな。暫く見ていると上空のへりからの映像になった。

『今、私は現場の上空にいます。何か鳥のような模様が見えま  
すでしょうか？』

「これは！？」

【十代、いきなりどうしたんだい？】

……………何でだ？何で今の時代にいるんだ？

「……………何で地縛神がいるんだ！」

【地縛神ですか？】

【十代も持っているだろ。】

「……………持っているが、俺が持っている地縛神にこんな力はない  
！」

【確かに、十代が持っている地縛神はただのカードだからね。】

「……………しかも、この模様は、コンドルの地縛神だ！」

コンドルの地縛神、ウィラコチャ・ラスカ。何でこの地縛神がいる  
んだ？

【これが言っていたことかな？】

「……………恐らくな。」

何で地縛神が？……………でも今は三幻魔をどうにかしないとな。

十代 side out

零 side

「……………く、くそっ！ゴーズ！カイエン！ヴァンダルギオン！しつかりしろ！」

俺達は突如現れた地縛神を止めるために来た。だが、何であいつが！？

「テムエ、一体……………どうやって地獄から抜け出した！？」

何でこの女が！？

「……………私は十代君を助けなきゃいけないの。……………それ以外に理由はないよ。」

……………くそっ！あいつの記憶をなくして別の世界に転生させておくべきだった！

「そんなくだらない理由で、……………関係ねえ人間を巻き込むな！……………お前のやったことでどれだけの間が……………犠牲にな

「ったと思っつていやがるんだ！」

「別にいいじゃん。それにくだらなくないよ。私は十代君を救うつていう使命があるんだから。この力があれば十代君を救える。」

「この女の頭はどこまで腐つてやがるんだ!？」

「……………邪魔だよ。消えてくれない?」

あの女の後ろに地縛神ウイラコチャ・ラスカが現れた。

「……………やっっちゃえ。」

「うわぁー!ー!ー!」

零side out

十代side

「……………良かった。二人は無事みたいだ。」

俺はあのニュースを見た後、ユキとレイに連絡した。どうやら二人の住んでいる町ではなかったようだ。ユキも俺と同じで驚いていた。

【……………でも、何で地縛神がいるんだ?】

【……………クリ〜。】

【あゝ、何で地縛神が現れると人が消えるんですか？】

「……………地縛神は人間や精霊の魂を生け贄に召喚される。」

【消えてしまった人はどうなるんですか？】

「地縛神を倒せば元に戻るが、……………倒せなければそのままだ。」

【そのままって……………。】

「……………とりあえず、今は三幻魔をどうにかしないといけない。」

今は休もう。

翌日

七星門の鍵が盗まれたらしい。……………犯人は万丈目だよな。  
で、今は万丈目を追い詰めたところだ。ちなみに鍵は全てある。

「万丈目君、どうしてこんなことを？」

「それは……………、天上院君、君とデュエルをするためだ！」

「それなら普通にデュエルでいいと思うけどな。」

「それでは駄目だ。これは七星門の鍵と天上院君とのデートを掛けたLOVEデュエルだ！」

万丈目、七星門の鍵はいらなと思うぞ。

「万丈目君、何を馬鹿なことを……………」。

「何が馬鹿だ、明日香！」

その声がした方向に向くと何故か南国風の格好をし、ウクレレを持った吹雪がいた。……………それより、馬鹿じゃなかったら一体これをどのように言えと？

「兄さん!？」

「吹雪!？」

「明日香! 万丈目君は男の純情を掛けて明日香に勝負を挑んでいるんだ。君も女の純情を掛けて勝負を受けるべきだ！」

……………もう帰りたい気分だ。

「……………また吹雪の悪い癖が出たな。」

「……………兄さん。」

なんだろう、明日香から何かオーラが出ている。

「さあ、明日香! 君も準備を「兄さんの馬鹿!」「ふべら!？」

明日香の拳が吹雪の顔にクリーンヒットした。

「自業自得なんだな。」

確かに。

【なあ、明日香の腕がオベリスクの腕に見えなかったか？】

【見えました。】

【クリ。】

【ゴッドハンドクラッシュだね。】

どうやらみんなには《オベリスクの巨神兵》に見えたようだ。

【十代は何に見えたんだい？】

（俺には《眠れる巨人ズシン》の腕に見えたんだが。）

【ズシンパンチだね。】

「吹雪！？しっかりしろ！」

よく見ると吹雪の口から白い何かが出ている。

「……………万丈目、ああなりたくなかったら鍵を返したほうがいいぜ。」

「……………わ、分かった。な、何だ？」

「地震だ!！」

万丈目が鍵を返そうとした時、突如地震が起こった。

「すごく揺れてる!！」

「何が起こっているんだ!？」

しばらくすると地震はおさまった。

「あ、鍵が!！」

「えっ?」

よく見ると鍵が光り、万丈目の手から離れて浮かんだ後、移動していった。

「おい、待て!？」

俺達は浮かんで移動している鍵を追いかけた。

しばらく追いかけると何やら機械があり、その回りに七本の柱がある場所に出た。

「ここは?」



「見て！鍵が柱に吸い込まれたわ！」

「あっちの柱にもだよ！」

「あの柱にもだ！」

「まさか、七星門が開くのか！？」

「みなさん！」

「一体何が起こっているノーネ！？」

「校長先生、クロノス先生！」

……………ついにこの時がきたか！

「……………みんな、あれを。」

三沢が指を指している方向に向くと三枚のカードがあった。

「……………あれが。」

「三幻魔のカードか！」

万丈目達が走りだし三幻魔のカードを取ろうとした時だった。

『貴様らにそのカードを渡すわけにはいかな。』

「誰だ！？」

「上だ！」

上を見ると飛行機があり、そこから何かパラシュートを広げて降りてきて、着地した。

「何だあれは？」

パラシュートで勢いを落としていたが、重さがあるために砂煙が上がつた。しばらくすると砂煙は晴れた。

「あれは……………ロボット？」

『フフフフフフ、私の声を忘れたかね、鮫島校長？』

「その声は、……………影丸理事長！？」

『時は満ちた。これより三幻魔の復活の儀式を行う。』

「復活の儀式？」

『私がここに三幻魔のカードを封印し、七星門の鍵を鮫島に渡しておいたのだ。全てはこの時のためにだ！』

その後、理事長は三幻魔のカードについて話し始めた。

『……………さて、長話もこれくらいにして三幻魔復活の儀式を始めよう。相手は遊城十代、お前だ。』

……………あ、やっとか。

「何故俺なんだ？」

『それは、強い精霊の力を持ったお前でなければならぬからだ！』

「……………分かった。」

さて、やるか！

「『デュエル！』」

十代LP4000

影丸LP4000

『私のターン、ドロー！私はカードを三枚伏せる。』

魔法か罫かどっちだ？

『私は伏せた罫カード三枚を墓地に送り、『神炎皇ウリア』を特殊召喚！『神炎皇ウリア』の攻撃力と守備力は墓地に存在する罫カードの数×1000ポイントとなる。』

神炎皇ウリア ATK0 3000 DEF0 3000

「これが、……………三幻魔の一体。」

『『神炎皇ウリア』は罫カードの効果を受けず、魔法、モンスター効果は発動ターンのみ有効となる。』

アニメ効果の『神炎皇ウリア』か。

『フフフフハハハハ、私はターンエンドだ!』

影丸

モンスター 神炎皇ウリア

魔法、罫 なし

………なんだろう、あれだけ心配していた三幻魔が弱く見える。

「俺のターン、ドロ―!魔法カード《禁じられた聖杯》を発動!モンスターを一体選択し、そのモンスターの攻撃力は400ポイントアップし、効果は無効化される。俺は《神炎皇ウリア》を選択する!」

『何だと!?!』

神炎皇ウリア ATK3000 400 DEF3000 0

「魔法カード《ワン・フォー・ワン》を発動!手札を一枚墓地に送り、デッキからレベル1のモンスターを一体特殊召喚する。デッキから《ハネクリボー》を特殊召喚!」

【クリ!】

ハネクリボー ATK300

「さらに、墓地の《E・HEROネクロ・ダークマン》の効果で手札から《E・HEROエッジマン》を生け贄なしで召喚!」

エッジマン ATK 2600

「バトル！《エッジマン》で《神炎皇ウリア》を攻撃！パワーエッジ・アタック！」

『ぐわあ！』

影丸 LP 4000 1800

「さらに、《ハネクリボー》で直接攻撃！」

【クリ〜！】

影丸 LP 1800 1500

「カードを一枚伏せて、魔法カード《命削りの宝札》を発動し、五枚ドロ〜！カードを二枚伏せてターンエンドだ！」

十代

モンスター エッジマン、ハネクリボー

魔法、罫 伏せ三枚

「いいぞ、その調子だ！」

「アニキ、頑張れ！」

『……………な、何故だ、何故三幻魔がこんなにも簡単に？』

.....あれだけ心配していた俺は一体なんだったんだろう？

【十代、油断しちゃ駄目だよ。】

(分かってるよ。)

『くっ！私のターン、ドロー！私は手札の罾カードを一枚墓地に送り、墓地の《神炎皇ウリア》を特殊召喚！墓地には四枚の罾カードがある。《神炎皇ウリア》の攻撃力と守備力は4000だ！』

神炎皇ウリア ATK 4000 DEF 4000

『《神炎皇ウリア》の効果発動！1ターンに一度、セットされている罾カードを一枚破壊することができる！お前の真ん中の伏せカードを破壊する！トラップディストラクション！』

「伏せカードは罾カード《ヒーローシグナル》だ。よって破壊される。」

『さらに私は魔法カード《天よりの宝札》を発動！私は六枚ドロー！』

「俺は三枚ドロー！」

『そしてカードを三枚伏せ、私は伏せた魔法カードを三枚墓地に送り、《降雷皇八モン》を特殊召喚！』

降雷皇八モン ATK 4000

「三幻魔が二体！？」

「バトル！《神炎皇ウリア》で《ハネクリボー》を攻撃！ハイパーブレイズ！」

「伏せてある速効魔法、《進化する翼》を発動！《ハネクリボー》と手札二枚を墓地に送り、手札から《ハネクリボーLV10》を特殊召喚する！」

【クリ〜！】

《ハネクリボー》が光に包まれ、光が収まると《ハネクリボーLV10》に姿を変えていた。

ハネクリボーLV10 ATK300

「進化しても雑魚に変わりはない！バトルを続行！《神炎皇ウリア》で《ハネクリボーLV10》を攻撃！ハイパーブレイズ！」

「そのまま《ハネクリボーLV10》を攻撃してくると思ったぜ！《ハネクリボーLV10》の効果発動！このカードを生け贄に、相手フィールドの表側攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊し、破壊したモンスターの元々の攻撃力分のダメージを相手プレイヤーに与える！」

【クリ〜！！】

「ぐわあー！！！！！」

影丸LP15000

…………… 呆気ない終わりだな。

「十代が勝ったわ！」

「やったー！」

……………でも何か腑に落ちない。

「十代、どうしたんだ？あの三幻魔に勝ったんだぞ？」

「……………いや、案外呆気ない終わりだったからちよつとな。」

そう話しているうちに影丸理事長はここに来た飛行機で帰っていった。三幻魔のカードを再び封印し、俺達も帰ろうとした時だった。

「十代君、やっと見つけたよ！」

突然誰がの聲がした。……………こ、この声は！？

「……………な、何でお前がここにいるんだ！？」

「何でって、十代君を助けに来たんだよ！」

俺のことを刺して退学になり、零によって地獄に送られた筈の真理奈がいた。

十代 side out



第二十六話 三幻魔（後書き）

理事長を速効で退場させました。

第二十七話 最強最悪の地縛神（前書き）

第二十七話です。真理奈が壊れました。

## 第二十七話 最強最悪の地縛神

ユベルside

何であの女がここにいるんだ！？あの女は地獄に送られた筈、一体どうしてなんだ？

「真理奈、何でお前がここにいるんだ！？」

「私は十代君を助けに来たの。十代君に憑いている悪魔を倒してあげるからね！」

悪魔って僕のことだね。まあ、僕は悪魔族だから否定はしないけど。……………それより何か禍々しい力を感じる。

「十代に悪魔が？」

「一体どういうこと？」

「みんなには見えないの？十代君には悪魔が憑いているんだよ！」  
見えるわけがないよ。

【十代、また僕がやるうか？】

(……………いや、俺にやらせてくれ。)

【分かった、でも気をつけてね。アイツからは何か禍々しい力を感じるから。】

(禍々しい力?.....まさか地縛神か!?)

【恐らくはね。】

「.....真理奈。」

「十代君、私とデュエルしようよ!」

「いいぜ、お前の歪んだ思いを俺が打ち砕く!」

「デュエル!」

十代LP4000

真理奈LP4000

ユベルside out

十代side

「俺のターン、ドロー!俺は《E・HEROエアーマン》を召喚!」

エアーマンATK1800

「《エアーマン》の効果で、デッキから《E・HEROフォレストマン》を手札に加える。カードを二枚伏せてターンエンド!」

十代

モンスター エアーマン

魔法、罨 伏せ二枚

「私のターン、ドロー！私は魔法カード《ハーピィの羽根箒》を發動！」

「それは禁止カードよ！」

「何言ってるの？禁止カードは私以外が使っちゃいけないカードなんだよ。」

禁止カードにアニメ効果の地縛神、ある意味最悪の組み合わせだな。

「……………カウンター罨發動！《マジック・ジャマー》。手札を一枚捨て、魔法カードの發動を無効にし、破壊する！」

「私は、フィールド魔法、《ダーク・ゾーン》を發動！闇属性モンスターは500ポイントアップし、守備力は400ポイントダウンするよ！そして《キラール・トマト》を召喚！」

キラール・トマト ATK 1400 1900

「バトル！《キラール・トマト》で《エアーマン》を攻撃！」

「くっ！」

十代 LP 4000 3900

「私はカードを二枚伏せてターンエンドだよ！」

真理奈

モンスター キラー・トマト

魔法、畏 ダーク・ゾーン、伏せ二枚

「俺のターン、ドロー！魔法カード《テイク・オーバー・ファイブ》を発動！デッキの上から五枚カードを墓地に送る。」

墓地に送られたE・HEROは一体。

「魔法カード《強欲な壺》を発動！デッキからカードを二枚ドロウする。魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROスパークマン》と《E・HEROオーシャン》を融合！来い！《E・HEROアブソルートZero》！」

アブソルートZero ATK2500

「バトル！《アブソルートZero》で《キラー・トマト》を攻撃！瞬間氷結！」

「畏カード発動！《聖なるバリアーミラーフォース》。相手が攻撃してきた時に発動出来る。表側攻撃表示で存在するモンスターを全て破壊するよ！」

「……………だが、《アブソルートZero》の効果発動！フィールドから離れた時、相手モンスターを全て破壊する！」

《キラー・トマト》が凍りついて破壊された。

「俺は《E・HEROフォレストマン》を召喚し、ターンエンド！」

フォレストマンDEF2000

「エンドフェイズに伏せてある速効魔法、《終焉の焰》を発動するよ！私のフィールドに《黒焰トークン》を二体守備表示で特殊召喚！」

黒焰トークンDEF0

地縛神の生け贄を残してしまったか！

十代

モンスター　フォレストマン

魔法、罨　伏せ一枚

「私のターン、ドロー！私は《黒焰トークン》二体を生け贄に、………《地縛神コカパク・アップ》を召喚！」

空に大きな心臓が現れ、それが《地縛神コカパク・アップ》になった。

「な、なんだあの巨大なモンスターは！？」

「空も暗くなってるよ！」

地縛神コカパク・アップATK3000　3500

くそっ、地縛神の召喚を許してしまった！

「この力さえあれば、私は十代君を救える！あの悪魔だって倒せる

「！」

……………狂ってるな。

(ユベル、準備はいいか?)

【いつでも大丈夫だよ。】

「地縛神は相手モンスターが存在しても相手プレイヤーに直接攻撃出来るの。しかも相手の魔法、罾カードの効果は受けず、相手はこのカードを攻撃対称にすることは出来ないんだよ！」

「攻撃力3500で直接攻撃!？」

「不味いぞ！」

……………さて、真理奈がこれに引っ掛かってくれるかどうかだ。

「永続罾発動!《リミット・リバーズ》。墓地の攻撃力1000以下のモンスターを一体、攻撃表示で特殊召喚する!俺は《ユベル》を特殊召喚!」

ユベル ATK 500

「《ユベル》!?!みんな!こいつが十代君に憑いている悪魔だよ！」

「あれは、……………十代が学園祭でコスプレしたモンスターだ！」

「本当だ！」



「十代君、その悪魔を今すぐ倒してあげるからね！バトル！《地縛神コカパク・アップ》で《ユベル》を攻撃！消えてよ悪魔！！」

……………予想通りに引つ掛かってくれた！

【……………馬鹿だね。】

「きゃあー！？」

真理奈LP4000 500

「……………な、何で私がダメージを受けているの！？何で《ユベル》は破壊されないの！？どうして！？おかしいよ！？」

「《ユベル》は戦闘によつては破壊されず、戦闘によつて発生する俺へのダメージは0になる。《ユベル》が攻撃された場合、攻撃モンスターの攻撃力分のダメージを相手ライフに与える！」

「そんな効果なんて卑怯だよ！」

「【禁止カードを使っているお前が言うな！！】」

さっさと終わらせないとな。

「……………許さない、……………許さないゆるさないゆるさないユルサナイユルサナイ！！」

な、何だ！？真理奈の様子がおかしい。

「私八魔法カード《強欲な壺》ヲ発動！デッキカラカードヲ二枚ド

ロー！サラニ、魔法カード！《苦渋の選択》ヲ発動！選ブノハコノ五枚ダヨ！」

真理奈が選んだのは《地縛神コカライア》、《地縛神ウル》、《地縛神アスラ・ピスク》、《地縛神チャク・チャルア》、《地縛神クシル》の五体。何をする気だ？

「……………《地縛神アスラ・ピスク》を選択する。」

「残り八墓地ニ送ルヨ！サラニ魔法カード《強欲な壺》ヲ発動！カードヲ二枚ドロ！」

二枚目の《強欲な壺》！？禁止カードだけではなく、制限すらも守らないのかよ！

「魔法カード《天使の施し》ヲ発動！デッキカラカード三枚ドロシテ、二枚捨テル！キャハハハハハ！！十代君、スゴイノヲ見セテアゲルヨ！」

何がくるんだ？

「私ハ、私ノフィールド、墓地ニ七種類ノ地縛神ガ存在スル時、ソノ七種類ノ地縛神、ソレトデッキ、手札、フィールド、墓地ノカードヲ全テゲームカラ除外シ、私ノライフヲ0ニシテ、最強ノモンスターヲ特殊召喚スルヨ！」

真理奈LP5000

真理奈がそう言うつと真理奈の後ろに左からコカライア、クシル、アスラ・ピスク、ウイラコチャ・ラスカ、ウル、チャク・チャルアの

六体の地縛神が現れた！

「まさか、このモンスター達は！？」

「全部地縛神なのか！？」

「……………天二輝ク七ツノ死ノ星ヨ！地ニ縛ラレシ神々ニ全テヲ死ニ至ラスカヲ授ケヨ！ソシテ、地ニ縛ラレシ神々ニ現世ト冥界ノ全テヲ喰ラウ魔神トカセ！」

地縛神ウイラコチャ・ラスカの頭上に北斗七星が現れ妖しく光り、地縛神ウイラコチャ・ラスカを中心に七体の地縛神が融合していく。

「現レヨ！《混沌の無限悪魔 カオス・アンリミテッド・デビル》  
！」

混沌の無限悪魔 カオス・アンリミテッド・デビル ATK 7500

「……………な、何なんだ！？これは！」

何なんだよ、このモンスターは！？胴体はコカパク・アプ、足はウル、翼はアスラ・ピスク、尻尾はクシルとチャク・チャルア、胸にはコカライアの頭があり、頭部はウイラコチャ・ラスカになっている。

「《混沌の無限悪魔 カオス・アンリミテッド・デビル》ハアラユル魔法、畏、コノカード以外ノモンスター効果ヲ受ケナイ！コノモンスターガ存在スル限り十代君ノ勝利スルタメニハコノモンスターヲ倒サナイトイケナイノ！私ノライフガ0デモデツキカラカードヲドロ―出来ナクテモ私ハ負ケルコトハナイ！」

厄介な効果を持っていやがる！！

「私ハターンエンドダヨ！ソシテ、カオス・アンリミテッド・デビルコノ瞬間ノ効果発動！コノカードニ七星カウンターヲ1ツノセル。北斗七星ノ1ツ、貪狼とんろうガ光ルヨ。」

《カオス・アンリミテッド・デビル》の上空に星が一つ光った。

カオス・アンリミテッド・デビル 七星カウンター 0 1

「コノ北斗七星ハ私ノターンノエンドフェイズニ1ツズツ光ルノ。北斗七星ガ全テ光ツタ時、私ハ勝利スル！」

「……………つまり、十代に残されたターンは……………あと六ターンか！」

六ターン。長いようで短いな。……………だが、負ける訳にはいかない！

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル (七星カウンター1)

魔法、罾 なし

十代 side out

オリカ紹介 (ナハトさん提供)

《混沌の無限悪魔 カオス・アンリミテッド・デビル》

星12・闇・超魔神族・効果

ATK7500 DEF7500

このカードは通常召喚出来ない。自分のフィールド、墓地に七種類の地縛神が存在する時、このカード以外の自分のデッキ、手札、フィールド、墓地の全てのカードをゲームから除外し、自分のライフを0にした場合のみこのカードは手札から特殊召喚することが出来る。このカードはあらゆる魔法、罫、このカード以外のモンスター効果を受けない。相手プレイヤーの勝利条件はこのカードを破壊することにになる。このカードのコントローラーはライフが0でも敗北しない。このカードのコントローラーはデッキからカードをドロウ出来なくても敗北しない。このカードは相手モンスター全てに攻撃することが出来る。このカードが相手に与える戦闘ダメージは0になる。このカードが相手モンスターを戦闘によって破壊した時、相手プレイヤーに1000ポイントのダメージを与える。このカードのコントローラーのエンドフェイズにこのカードに七星カウンターを一つのせる。このカードに七星カウンターが3つ以上の時、1ターンに一度、このカードを攻撃してきたモンスターの攻撃力がこのカードの攻撃力より高い場合、その攻撃を無効にすることができる。このカードに七星カウンターが7つあった時、このカードのコントローラーはデュエルに勝利する。

第二十八話 奇跡の力（前書き）

第二十八話です。決着がつかしました。

## 第二十八話 奇跡の力

十代 side

十代

モンスター ユベル、フォレストマン

魔法、罨 リミット・リバー

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル (七星カウンタ  
ー1)

魔法、罨 なし

今は守備を固めておこう。

「俺のターン、ドロロー！スタンバイフェイズに《フォレストマン》の  
効果発動！それにチェインして魔法カード《テイク・オーバー・  
ファイブ》の効果発動！墓地の《テイク・オーバー・ファイブ》を  
ゲームから除外し、デッキから一枚ドロロー！《フォレストマン》の  
効果でデッキから《融合》を手札に加える。」

手札は三枚。だが、まだ足りない！

「……………ユベル。」

【別にいいよ。僕だけじゃ、あれは倒せないからね。】

「……………分かった！魔法カード《アドバンスドロー》を発動！自分のフィールドのレベル8以上のモンスターを一体生け贄に、デッキからカードを二枚ドロウする。俺は《ユベル》を生け贄に、二枚ドロウ！」

「……………消エタ。悪魔力消エタ！」

……………つるさい。

「……………俺は《E・HEROクレイマン》を召喚し、カードを一枚伏せてターンエンド！」

クレイマンDEF2000

十代

モンスター　フォレストマン、クレイマン

魔法、罫　リミット・リバーズ、伏せ一枚

「私ノターン、バトル！《カオス・アンリミテッド・デビル》デ《フォレストマン》ニ攻撃！北斗葬送波！」

「くっ！……………だがダメージはない。」

「《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果発動！相手モンスターヲ戦闘ニヨツテ破壊シタ時、相手ニ1000ポイントノダメージヲ与エルヨ！北斗百鬼夜行！」

「何！くっ！」



十代LP3900 2900

「ダケド、《カオス・アンリミテッド・デビル》ハ相手ニ戦闘ダメージハ与エラレナイノ。」

モンスターを破壊出来るのは1ターンに一度だけだな。

「サラニ、《カオス・アンリミテッド・デビル》ハ全テノ相手モンスターニ攻撃スルコトガ出来ルノ！《カオス・アンリミテッド・デビル》デ《クレイマン》ヲ攻撃！北斗葬送波！」

《フォレストマン》に続いて《クレイマン》も破壊された！

「《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果発動！北斗百鬼夜行！」

「うわああー！」

十代LP2900 1900

「私ハターンエンド！ソシテ、《カオス・アンリミテッド・デビル》《ニ七星カウンターヲ1ツノセルヨ！北斗七星ノ2ツ目ノ星、巨門こもんガ光ル！」

七星カウンター 1 2

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル (七星カウンター2)

魔法、罨 なし

「俺のターン、ドロー！」

違う、このカードじゃない！……………ただ、あれにはこうすればいいの。

「……………俺はターンエンド！」

十代

モンスター なし

魔法、罨 リミット・リバーズ、伏せ一枚

「十代！何故モンスターを出さないんだ！」

「……………いや、十代のやっていることは正しい。」

「兄さん、どういふこと？」

「あの巨大なモンスターは相手に戦闘ダメージは与えられないと言っていた。ダメージが発生するのは、戦闘によって相手モンスターを破壊した時とも言っていた！」

そうだ、この効果を知るのは賭けだったけどな！

「私ノターン、……………私ハターンエンド！《カオス・アンリミテッド・デビル》ニ七星カウンターヲ1ツノセル！北斗七星ノ3ツ目ノ星、禄存ガ光ルノ。」

七星カウンター 2 3

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル (七星カウンター  
13)

魔法、罨 なし

「俺のターン、ドロー！」

よし！これなら！

「魔法カード《融合回収》を発動！墓地の《E・HEROオーシャン》と《融合》を手札に加える。魔法カード《融合》を発動！手札の《オーシャン》と《沼地の魔神王》を融合。来い！《E・HEROジ・アース》！」

ジ・アースATK2500

「伏せてある魔法カード《マジック・プランター》を発動！俺のフィールドの表側表示の永續罨を一枚墓地に送り、二枚ドローする。《リミット・リバース》を墓地に送り、二枚ドロー！魔法カード《融合》を発動！手札の《E・HEROバーストレイ》と《E・HEROネクロ・ダークマン》を融合。来い！《E・HEROノヴァマスター》！」

ノヴァマスターATK2600

「そして、墓地の《ネクロ・ダークマン》の効果で、《E・HEROエッジマン》を生け贄なしで召喚！」

エッジマン ATK 2600

このターンで倒す！

「《ジ・アース》の効果発動！フィールドに存在するこのカード以外のE・HEROと名のつくモンスターを生け贄にすることで、生け贄にしたモンスターの攻撃力分、《ジ・アース》の攻撃力がアップする。俺は《ノヴァマスター》と《エッジマン》を生け贄にする！」

ジ・アース ATK 2500 5100 7700

「よし、攻撃力が上回った！」

「十代、行け！」

「バトル！《ジ・アース》で《カオス・アンリミテッド・デビル》に攻撃！アース・マグナ・スラッシュ！」

《ジ・アース》の体が赤くなり、剣を持って《カオス・アンリミテッド・デビル》に切りかかった！

「……………《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果発動！  
バリイイン！」

「な、……………何でだ！？」

《カオス・アンリミテッド・デビル》に《ジ・アース》の剣が当た

った瞬間、《ジ・アース》の剣が粉々に砕けてしまった。

「《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果ダヨ！」

「どんな効果だ!？」

「……………《カオス・アンリミテッド・デビル》ハネ、コノカードニ七星カウンターガ3ツ以上ノツテイル時、1ターンニ一度、コノカードヲ攻撃シテキタモンスターノ攻撃力ガコノカードヨリ高い場合、ソノ攻撃ヲ無効ニスルコトガ出来ルンダヨ！」

「そんな!？」

じゃあ、今の《カオス・アンリミテッド・デビル》を倒すには攻撃力7500を超える攻撃力で二回攻撃か、攻撃力を7500丁度で攻撃しなければ倒せないのか!

「……………俺は、ターンエンド！」

ジ・アース ATK 7700      2500

十代

モンスター      ジ・アース

魔法、罫      なし

「私ノターン、バトル!《カオス・アンリミテッド・デビル》デ、《ジ・アース》ヲ攻撃!北斗葬送波！」

……………《ジ・アース》も破壊された。

「《カオス・アンリミテッド・デビル》の効果発動！北斗百鬼夜行  
！」

「ぐわあー！」

十代LP1900 900

「私ハターンエンド！ソシテ、エンドフェイズニ《カオス・アンリ  
ミテッド・デビル》ニ七星カウンターヲ1ツノセルヨ！北斗七星ノ  
4ツ目ノ星、文曲もんじくガ光ルノ！」

七星カウンター 3 4

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル (七星カウンタ  
ー4)

魔法、罾 なし

「俺のターン、ドロー！」

……………このカードは違っ！

「俺はターンエンドだ！」

十代

モンスター なし

魔法、罾 なし

「十代君、何モシナイノ？」

……………いちいちうるさい。

「マア、イヤヤ。私ノターン、コノママ私ハターンエンド！《カオス・アンリミテッド・デビル》ニ七星カウンターヲ1ツノセル！北斗七星ノ5ツ目ノ星、廉貞れんじょうガ光ル！」

七星カウンター 4 5

真理奈

モンスター カオス・アンリミテッド・デビル (七星カウンター5)

魔法、罫 なし

「俺のターン、ドロー！魔法カード《天使の施し》を発動！デッキからカードを三枚ドローし、二枚捨てる！」

……………くそっ、これも違う！E・HEROを二体墓地に送ることは出来たが。

「……………ターンエンド！」

十代

モンスター なし

魔法、罫 なし

「私ノターン、私ハターンエンド！ソシテ、《カオス・アンリミデッド・デビル》ニ七星カウンターヲ１ツノセル！北斗七星ノ6ツ目ノ星、無曲ガ光ル！」

七星カウンター 5 6

真理奈

モンスター カオス・アンリミデッド・デビル (七星カウンター6)

魔法、畏 なし

「キャハハハハ！アト1ターン、アト1ターンダ！アト1ターンデ十代君ヲ救エル！」

くそっ、……………どうすればいい。

「あと1ターンしかないよ！……………アニキが負けたらどうなるの！？」

「北斗七星ノ7ツ目ノ星、破軍ガ光ツタ瞬間、私ノ勝ち！十代君ガ負ケルトネ、世界中ノ人達ノ魂ガ《カオス・アンリミデッド・デビル》ノ生ケ贄ニナルンダヨ！」

「世界中の人達が生け贄に！？」

「デモ、十代君以外ノ人達が生ケ贄ニナルンダヨ！十代君待ツテテネ！モウ少シデ、アノ悪魔カラ救ツテアゲレルカラネ！」



「……………ふざけるなよ。」

「エッ？」

「ふざけるなって言ったんだよ！ユベルは俺の仲間だ！ユベルだけじゃない！ハネクリボーも、ターボシンクロンも、エフェクト・ヴエラーも全員俺の仲間だ！」

「仲間？ナニ言ツテイルノ？ユベル八十代君ヲ騙シテイルンダヨ！目ヲ覚マシテ！ハネクリボー達モユベルニ騙サレテイルノ！」

……………こいつは！どこまでも救えない奴だな！

「……………十代君、ユベルハ悪魔ナンダヨ！」

……………。

「……………私ガ助けテアゲルカラネ心配シナ「ふざけるのもいい加減にしろ！！」ナ、何言ツテイルノ！？私八十代君ノ為ニ言ツテイルンダヨ！」

「俺がいつ！お前に！助けてほしいって頼んだ！それに俺の為にって言っているが、本当は自分の為だろ！」

「違う！本当ニ私八十代君ノ為ニ！」

「だったら、関係ない人達を巻き込むな！……………悪魔はユベルじゃない！お前なんだよ！真理奈！」

「私ガ、悪魔？……………違う！私ハ悪魔ジャナイ！私ハ天使ダ

「ヨ！」

「天使？……………お前が？」

「ソウダヨ！私八十代君ヲ救ウ為ニ別ノ世界カラ来タ天使ナンダ！」

「別の世界？」

「あいつは何を言っているんだ？」

「私八十代君ヲ救ウ為ナラ何ヲヤツテモ許サレルノ！」

「……………もういい。お前の馬鹿馬鹿しい妄想はうんざりだ。」

「……………馬鹿馬鹿シイ？何ノコト？」

「お前を、倒す！！」

……………言ったのはいいが、どうすればいいんだ？《カオス・アンリミテッド・デビル》を倒すにはどうすれば？

「……………。」

どうすればいいんだ？

「十代君八。」

「……………いちいち喋るな、うるさいんだよ。」

「十代君八十代君ナンダヨネ？」

「喋るなって聞こえなかったのか？」

「何デ、ユベル八十代君ノ側ニイルノ？本来ココニハイナイ筈ナノ  
ニドウシテ？」

「……………そんなこと、今は関係ないだろ。」

「答エテ！」

「……………うるさい。」

「答エテヨ！ユベルガ十代君ノ側ニイル理由ヲ！」

……………イライラしてくる。でも、早く答えないとずっと聞いてくるな。

「ユベルは俺の仲間だ。それ以外に理由はない。」

「……………違ウ。」

何が違うんだ？

「……………君ハ私ノ知ツテイル十代君ジャナイ！」

……………また何か変なことを言い出しやがった。

「……………君八十代君ノ偽物ナンダ！」

……………。

「俺は俺だ。」

「違ウ！」

……………何なんだよ、こいつ！

「私ノ十代君ハ、ソシナ事ハ言ワナイ！」

「……………俺はお前の物じゃない。俺は俺として生きている。それだけだ！行くぞ！俺のターン！」……………。」

くそっ！デッキからカードをドローしようとするが、手が震えてしまっ！

(このドローで、……………全てが決まる。……………だけど、手が震えて動かない！)

動いてくれ！

【十代さん、あなたなら大丈夫です！】

【クリー！】

【十代、自分を信じろ！】

【……………僕達がついているよ。】

「アニキ！」

「きばね、十代！」

「負けるな！」

「あなたなら勝てるわ！」

「信じているノーネ！」

「十代君、君なら大丈夫です！」

みんな。……………ん？デッキの一番上のカードが光っている。奇跡をこの手で起こしてやる！

「……………ドロー！！！」

……………このカードは！！

「……………魔法カード《賢者の石 サバティエル》を発動！ライフを半分支払う事で、デッキまたは墓地からカードを一枚手札に加え、このカードをデッキに加え、シャッフルする！俺はデッキから魔法カード《ミラクル・フュージョン》を手札に加える！」

十代LP900 450

「魔法カード《ミラクル・フュージョン》を発動！墓地の《沼地の魔神王》と《E・HEROスパークマン》をゲームから除外し融合。来い！《E・HEROシャイニング・フレア・ウィングマン》！」

シャイニング・フレア・ウィングマンATK2500

「《シャイニング・フレア・ウイングマン》の攻撃力は墓地のE・HEROと名のつくモンスターの数×300ポイントアップする！俺の墓地にE・HEROと名のつくモンスターは、十三体だ！よって攻撃力は3900ポイントアップする！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 2500 6400

「《賢者の石 サバティエル》の効果で手札に加えたカードをデュエル中に使用した時デッキの《賢者の石 サバティエル》を手札に加える。そして、墓地の罨カード《スキルサクセサー》をゲームから除外し、《シャイニング・フレア・ウイングマン》の攻撃力を800ポイントアップさせる！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 6400 7200

「でも、あと300ポイント攻撃力が足りない！」

「……………300ポイントか。手札の魔法カード《賢者の石 サバティエル》を発動！ライフを半分支払い、墓地の速効魔法、《異次元からの埋葬》を手札に加える。その後、デッキに加え、シャッフルする！」

十代 LP 450 225

「速効魔法、《異次元からの埋葬》を発動！ゲームから除外されている《E・HEROスパークマン》を墓地に戻す。これで墓地に存在するE・HEROと名のつくモンスターは十四体だ！」

シャイニング・フレア・ウイングマン ATK 7200 7500

「攻撃力が並んだ！」

いや、並んでもまだだ！

「《賢者の石 サバティエル》の効果で手札に加えたカードをデュエル中に使用した時、デッキの《賢者の石 サバティエル》を手札に加える！そして《セカンド・ブースター》を召喚！」

セカンド・ブースター ATK1000

「《セカンド・ブースター》の効果発動！このカードを生け贄に、表側攻撃表示で存在するモンスターを一体選択し、その選択したモンスターの攻撃力をエンドフェイズまで1500ポイントアップさせる！俺は《シャイニング・フレア・ウィングマン》を選択する！」

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK7500 9000

「十代、何をしているんだ！？攻撃力が上回ったら攻撃は無効化されるんだぞ！」

「そんなこと、言われなくても分かっている！俺を信じろ！魔法カード《賢者の石 サバティエル》を発動！ライフを半分支払い、墓地から速効魔法、《異次元からの埋葬》を手札に加える！そして《賢者の石 サバティエル》をデッキに加え、シャッフルする！」

十代LP225 113

「速効魔法、《異次元からの埋葬》を発動！ゲームから除外されている《沼地の魔神王》を墓地に戻す！《賢者の石 サバティエル》の効果で手札に加えたカードをデュエル中に使用したので、デッキ

から《賢者の石 サバティエル》を手札に加える！」

これで全てが揃った！

「魔法カード《賢者の石 サバティエル》を発動！《賢者の石 サバティエル》は効果を三回使用したとき、効果が変わる！自分フィールドの表側攻撃表示のモンスターを一体選択し、相手モンスターの数だけ選択したモンスターの攻撃力を倍にする！俺は《シャイニング・フレア・ウィングマン》を選択する！そしてお前のモンスターは一体、よって攻撃力は倍になる！」

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK9000 18000

「バトル！《シャイニング・フレア・ウィングマン》で《カオス・アンリミテッド・デビル》に攻撃！シャイニング・シュート！」

「《カオス・アンリミテッド・デビル》ノ効果デ《シャイニング・フレア・ウィングマン》ノ攻撃ヲ無効化スルヨ！」

《シャイニング・フレア・ウィングマン》が攻撃するが、《カオス・アンリミテッド・デビル》には届かなかった。

「キャハハハハハ！コレデ、私ノ勝ち！」

「そんな！」

「……………真理奈、《カオス・アンリミテッド・デビル》が攻撃を無効に出来るのは1ターンに一度だけだよな？」

「ソウダヨ！」



.....勝つ  
た！

「.....俺は速効魔法、《ダブル・アップ・チャンス》を発動！  
モンスターの攻撃が無効になった時、そのモンスターを一体選択し  
て発動する。選択されたモンスターはこのバトルフェイズ中にもう  
一度だけ攻撃することが出来る。さらに、選択されたモンスターは  
ダメージステップ時に攻撃力が倍になる。俺は《シャイニング・フ  
レア・ウィングマン》を選択する！」

「.....エッ？」

《シャイニング・フレア・ウィングマン》の体がさつきとは比べ物  
にならないくらいに輝き出した！

「これで最後だ！《シャイニング・フレア・ウィングマン》で《カ  
オス・アンリミテッド・デビル》に攻撃！究極の輝きを放て！シャ  
イニング・シュート！！！！！！」

シャイニング・フレア・ウィングマン ATK18000 36000

《シャイニング・フレア・ウィングマン》の放った光が、《カオス・  
アンリミテッド・デビル》を貫いた！

「キャアアアアアアアアア！！！！」

光が消えると、《カオス・アンリミテッド・デビル》の姿はなく、  
暗くなっていた空も明るくなった。

「……………やっと倒せた。」

俺はその場に座りこんだ。

「やったー！」

「十代、よくやった！」

「すごいんだな！」

「……………みんなのおかげだ。」

俺の周りにみんなが集まってきた。

「ナ、何コレ!？」

真理奈の声がしたので見ると、足元に黒い何かがあり、足が膝の辺りまでその黒い何かに入っている。

「あれは何だ!？」

「どんどん沈んでいるわ!」

「イヤダ!助ケテヨ!」

……………これが真理奈の罰だな。

「十代君、助ケテ!」

真理奈は、もう首のところまで沈んでいる。

「助けテヨ！十代く……………」。

黒い何かは真理奈の全身を引き込むと消えてしまった。

十代 s i d e o u t

## 第二十八話 奇跡の力（後書き）

《賢者の石 サバティエル》はアニメ効果ではなく未OCG効果です。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能たんのうしてください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n0127t/>

---

遊戯王GX～十代に転生！？～

2011年10月6日21時02分発行